庭のその独り

u_

（後ずさりする猫の…）

　後ずさりする猫の舌は、木の箆のように硬く尖っていて、地べたに文字を書き付けていた。その書き始めは、もう地平線の向こうだった。始めから読もうにも、私の脚は弱っていて、とてもそんな遠くまで出掛けては行けない。猫を踏むと、その体は粘土のように潰れ、木の箆のような舌が、私の手に渡された。それを二つに裂いて、両足の甲に突き刺した。先端は足の裏に突き出て、それを地べたに擦り付けて動かせば、字が書ける。猫の続きを書くのは癪なので、私は腹這いになって、両腕だけを使って、別の所に移動した。頭が硬いものに当たって、見上げると、古い墓が一基だけあるが、表面が磨り減って、誰の墓か読み取れない。尻がぬるぬるする。手を当てると、踏み潰された猫だった。それを両手でこねくり回して、猫を生き返らせると、猫は私の左右の足に替わる替わるしゃぶり付いて、自分の舌を取り返そうとするらしい。足は唾だらけ

になって、ぴちゃぴちゃと音を立てた。身を潜めていた男が墓の左右に一人ずつ現れた。二人とも濃い緑の葉を付けた枝で全身を覆って、ひどく汗臭かった。どうしてずっと隠れたままで居ないんだと私が怒ると、二人は、猫が私の足をしゃぶるのが、音楽に聞こえてしまったと言い訳した。神妙なので許すと、二人はそのお礼だと言って、胸の辺りの厚い葉の先を搾って、銀色の液を地べたにぽたぽたと垂らた。猫が飛び付いて、それを啜った。私は立ち上がった。足が勝手に地べたを擦り付けて、字を書いた。男達は、それを唸るようにして読んだ。祈っているのだ。墓の周りを回りながら、文字を綴って行ったので、墓を中心にした渦が描かれた。男達は私の後をついてそれを読み続けた。猫の姿が見当たらない。すると祈っている筈の男達の声が、私の書いた事を、嘘だ嘘だと繰り返し唱えているだけのように聞こえて来た。嘘の筈がない。その証拠に私は、爪を立てて尻を引っ掻き、血の代わりの水銀の雫を、足元に垂らして見せた。男二人は、地べたを零れる水銀を掻き集め、それで指輪を作ろうと相談を始めた。私の書いた文字の渦は風に消されて行くようだった。墓の裏側は女陰の形をしていた。（二〇〇四年九月九日）

（罰として腹に…）

　罰として腹に太鼓を括り付けられた男が、活劇のポスターに描かれている。両手のバチで太鼓を打つ男の顔は、苦痛に歪んでいた。私の腹に括り付けられた太鼓を打とうとしたが、私の両手には、分厚い包丁が握られていて、それで太鼓の皮をズタズタに切り裂いただけだった。そのまま太鼓は潰れて形を失った。誰かに、その残骸を押し付けなければならない。騙すにはもってこいの、人待ち顔の女が、一人池の縁で、キョロキョロ辺りを気にしながら苗木を植えている。しかしそれは、塀の破れ目を通して遠くに見えているだけで、先ずはその塀に辿り着こうと、庭に捨てられた血塗れの畳を跨いだ。血は全て、私が傷付けた者達のもので、畳には私への恨みが籠もっていた。太鼓の残骸が腹から落ちて、破片になって庭に散らばった。包丁を握っていない事に気付いて、包丁を探すべきか、たとえそれが足元に落ちていても二度とそれを手に取らずにおくか、迷った。振り返ると、胸をはだけた寝巻き姿の年取った痩せた女が、血塗れの畳に横になろうとしていた。「これが体に良いんでね」と、その病人に違いない女が言った。その姿が、包丁の代わりになるように思えて、私は包丁を探さずに済んでホッとした。苗木を植えていた女が、塀の下の隙間を、長い髪を砂塗れにして通り抜けて来て、「旅に出る事にした」と言う。「お土産に昆布を頼む。体に良いので」と病んだ女が応じると、砂塗れの女は「こ

こへは戻らない」と言ったきり黙った。病んだ女は、いざり寄って、砂塗れの女の靴と靴下を脱がせて、その足を爪先から順に舐めた。砂塗れの女は、衣服を巻くって、自ら脚を剥き出しにした。病んだ女の唾に混じった畳の血が、うっすらと女の白い脚を這い登るのが、私の目には心地良かった。塀の向こうから、池の波立つ音が聞こえた。私は、何の苗木を植えたか、女に尋ねたくなったが、掛けるべき言葉がなかなか見付からず、女の見ている前で、女の靴と靴下を拾って、それを腋の下に抱えるようにして女の反応を待った。それでも女は黙ったきりで、私が、「ここは天国ですね」と声を弾ませて言うと、女はやっと、「混沌としてますから」と応えた。（二〇〇四年九月二一日）

（当番なので夜中に…）

当番なので夜中に四角い建物の周りをぐるりと一回りする。一本だけ季節外れに濃い葉を茂らせた木は、近付く程、高く大きく聳え立ち、見上げると何本かの枝の先は星空を撫でている。寝入る前に、三つの轟く音を聞いた。大地の震える音と、巨木の風に鳴る音と、後一つが分からない。それを見付けようと木に登った。直ぐに、外の夜の闇が見えなくなった。どちらを向いても枝と葉

ばかりで、星から来た明かりで、それらは内側から照らされていた。葉が、色々な金属の色をしていた。色々な合金が作られている。それらの互いに反応し合う音が、三つ目の轟きだったのだ。当番日記にそれを書かなければならないが、星明かりについてだけは秘密にしなければ怪しまれるだろう。星明かり抜きにこの事態を説明しようとするなら、それに代わる明かりをでっち上げるしかない。木の下を大勢の行過ぎる足音が聞こえる。仏像を仮のお堂に運ぶのだ。彼らは明かりを携帯している。それを見届けようと、木の外に顔を出そうとするが、木の中は広過ぎたし、枝も葉も内側から輝いては何処にも陰がなく、どちらが上か下かも見失いそうだった。枝から手を離して足を浮かせた。落ちて行く方が下の筈が、そんな気がしない。列の先頭を行く者は、役所に届ける紙を懐に入れていた。何処かの枝に襟首でも引っ掛けて、やっとそれだけ見届けた。仏像に係わる届ではなく、寝たまま死んだ男の死亡届だった。誰一人明かりを持っていない。木を通して降り注ぐ星明かりが、道を照らした。それなら、それを秘密にしなければならない訳は何だろう。寝かされて担がれて行く仏像に尋ねようとすると、列をならす者達が一斉に声を挙げてそれを遮った。その声は木の下で反響し、轟きとなって星明かりをも遮った。列は、闇の中でも行く道を知っていて乱れなかった。闇を通してでも、仏像の傍らを男の死体が籠に揺られて行くのが見えた。その喉が痛くて堪らないのだ。籠を担ぐ者に訴えて、

死体の喉を擦って貰っても無駄で、それ以上は困った顔をされるだけだった。阿片など精製して喉の痛みを鎮める薬なら、木の中を探せば見付かりそうだ。列はどれだけ長いのか、足音は途絶えないが、段々と聞き覚えの無い金属のような音になってゆく。枝が全て同じ向きに反発したのが最後だった。（二〇〇四年九月一四日）

（川が埋め立てられて…）

川が埋め立てられて川魚の博物館が出来た。見境無く吠える犬を二匹飼っている、元は川縁の家の中を通り抜けると博物館の入り口で、中は舟の展示ばかりが続いた。舟でないのは、腐り掛けた小さな木の橋だけだ。橋を渡ってみても良いが、その前に、橋の下の底の知れない深い鍋に白く濁る水をぐつぐつと煮ている訳を知りたかった。立て看板には「橋の長さより身長の短い者は渡ると危ない」と書いてある。船酔いした気分が橋へ踏み入れさせた。橋を渡った先の立て看板は「二十六人、渡った」と読めた。尾根の中腹で遭難した山男共の数と同じなのはどうしてだろう。ギシギシ音を立てる欄干にしがみ付いて舟の数を数えると二十六艘まで数えられた。足元を白い鼠と黒い鼠の二匹がチョ

ロチョロしている。踏ん付けようとでもすれば、ますます窮地に陥るのは明らかだ。欄干の上を腹這いに滑って橋を渡り切った。二十七人目になれた筈だが、外で犬がひどく吠えるので、事の起こらぬ内に戻る事にした。一艘だけ、底に大きな穴の開いているのは、二十七艘目に数えられた。欄干の上で軽業師が逆立ちして芸をしていては引き返せない。沸騰する鍋に飛び込めと言われているのか。閉館には早いと思うが、照明が消された。明るかった所が暗くなり、安普請で、暗い奥のあちこちの隙間から光の漏れ来るのが浮き出た。二匹の鼠に従ってその隙間目掛けて逃げた。後ろから聞こえる軽業師の掛け声が、戻れと言っているようにも、鼠を脅しているようにも聞こえる。光の向こうから川魚のぴちぴちと跳ねる音が響いて来る。身を伏せて筆を執った。紙を何枚継ぎ合わせても、川魚は長すぎて尻尾まで書き終える事が出来ない。橋を渡ったのが悔やまれ今頃になって悔やむ馬鹿さ加減にも嫌気が差した。長く繋いだ紙を見返すと、何処まで伸びるか知れない黒光りする硬い棒を描いたとしか見えない。外では、二匹の鼠がすっかり凶暴になって牙を剥き、金切り声を上げて組み合っている。白が上になると辺りは光りが満ち、黒が上になると闇に閉ざされた。その下を硬い棒は更に伸びて、やっとキラキラした鱗が表れヌルヌルとくねり出すようだったが、橋を潜る手前で身はばらばらに崩れ、ぐつぐつと煮え立つ濁り水に似た睡魔か何かに押し流された。（二〇〇四年九月一五日）

（蝙蝠の棲み付いた…）

　蝙蝠の棲み付いた納屋は、何度覗いても、昼間でも目潰しを食らったように暗い。その度に怖くなって走って逃げるのだが、家に戻るには道を塞ぐ茨の藪を通り抜けなければならない。更にその藪の直ぐ手前の水飲み場には、毛の短い白い大きな犬が何時も居て、藪に潜り込むには、そいつの襲い掛かって来るのを素早く避けなければならない。最近やっと、そいつを温和しくさせる方法が分かった。犬を褒め称える歌を吠え声に負けない大声で歌えば、犬は垂らした尾っぽを引き摺って水飲み場を離れ、鶏の番に帰って行く。それは医者から教わった。私は病弱で一日寝ているが、偶にどうしても隣家の納屋の暗がりを覗いてみたくなる。それで無理に息を切らして胸を壊し咳が止まらないが、医者は面白がるだけだ。診察後は必ず好物の酒を煮詰めた野菜料理でもてなす。それが目当てで、私の体の事など考えていない。それが証拠に、野菜の季節が終われば医者は「病状が落ち着いた」と嘘を言って往診に来なくなる。納屋に行く時は、その気になっているのでそうでもないが、斜向かいの薬局への行き帰りはひどく疲れる。そこは何時行っても客は私だけで、棚に並ぶ薬の数が日

に減っている。とうとう私の求める薬が底を付いた。薬屋は薬を包む紙を細工して一輪の白い花を拵え、それを彼の知り合いの画廊に持って行くよう薦めた。紙の花なのに直に萎れた。空気が湿っているせいだ。通りを隔てた建物さえ朧に霞み、日暮れでもないのにどこも暗い。腰の曲がった年寄りの群れにゲラゲラ笑われながら追い越されて行く。分かり難い地図を頼りにやっと見付けた画廊は閉まっていて、去年の日付の廃業を知らせる張り紙を読まされただけだ。扉に投げ捨てた花は道に落ちた。そこに蹲る痩せ細った子猫は白い毛をぐっしょりと濡らし、片眼だった。路地裏を覗くと、その行き止まりの低い石塀の向こうが蝙蝠の棲む納屋だった。それでも、遠回りさせられたのかどうか判断出来なかった。石塀を越えられないなら地図を頼りに来た道を戻るしかない。居なくなった猫の小さな足跡に踏み付けられた紙の花は泥で汚れていた。その手向ける先を求めて、道の神がこの辺りにないか、どうにも聞き回らずには気が済まなくなった。片眼は蝙蝠にやられたのかも知れない。（二〇〇四年九月一六日）

（明後日を明日と…）

明後日を明日と間違えて生き延びた女が、明日を明後日と間違えて死んだ男を偲びながら、別の男に明日の事を頼んでいる。女はまた明後日の事を明日と勘違いしていて、それに気付いた男は何とも返答をしなかった。明日、姿を現さなくても不都合はない。それでもし、先の男のように、勘違いした女が命を落としたところで、明後日、男一人で仕事を熟せば何の事はない。女が死ぬ事など珍しくもない。いや、ただもし女が勘違いのせいで明日死ななかったら、明後日は男の死ぬ番でないとも限らない。明後日になって代役を頼める者もいない。女に勘違いを分からせて明日一日じっとしているよう言った方が良い。しかしその女は頼むだけ頼んで、もう姿を消していて、何処にいるか明日にならないと分からない。男は、事によったら女の代わりに自分が死ぬのだと覚悟した。勿論、女に何も頼まれなかった事にして明日も明後日も姿を隠していれば、女の代わりには死なずに済む。しかしそんな風にして女を死なせた男に誰が真面な仕事を頼みに来るだろう。誰かが明日と明後日を勘違いしている時の、代わりに死ぬ役を遣らされるだけなら、明日明後日から逃げる事は、結局自らに死刑を言い渡すようなものだ。こうなっては、女が明日と勘違いしている明後日の事を、無理にも明日に持って来るしかない。そうは言っても男に、人を操り一日分の世の中全てを入れ替える力などない。世の中はそのままにして、明日と明後日をすり替えるしかないが命懸けの仕事だ。女の代わりになるより

死ぬ確率はずっと高そうだが、それは失敗した時の話しだ。そして命を懸けた甲斐あって、明後日とすり替えられた明日が来て、男は一人で仕事を熟した。その日は明後日なのだから、明日にならなければ勘違いに気付かない女は来られる筈もない。そして、明日とすり替えられていた明後日になった。現れた女は勘違いに気付く。しかし仕事はもう済まされていて男は現れない。明日を失った男は、女には死んだ男だった。いや実際に男は、明後日から明日への反転の中に挟まれて、磨り潰されてしまっただろう。そして明後日がない女も、進退窮まって一日遅れで消えてなくなるしかない。しかし本当の二人の死因はと言えば、ただ明日と明後日を勘違いしたからであるのは明らかだ。（二〇〇四年九月一七日）

（薬局の帰り道…）

薬局の帰り道、小学校は運動会の閉会式だった。乱暴な音を立てる風が舞い、並ばされた子供達は疲れ果てて見えた。家に戻るときちんとした身なりの男が待っていて、長く丈夫そうな指で、抱えた黒い鞄を細かく叩いた。催眠術かも知れないと警戒はしたが、私はその音に合わせて唇をパクパクさせた。歌いた

いが、その男が先に歌うのを待って歌い出さなければならない。唇の動きは男を催促するためだ。薬の袋を破ると透明な液の入った重い硝子瓶が一つだけで、その底には白い粉が沈んでいた。灰にした動物の骨を磨り潰したものだが瓶を振ってもなかなか溶けない。黒い鞄が開いた。硝子の小瓶がびっしり並び、男の指は鞄の端を叩き続けたので、瓶の中で揺れる色取り取りの液はそれぞれに煌めいた。それを男は全部自分で作ったと言った。それが歌うように聞こえて私は男に続いて歌った。男は私を誘った。月の綺麗な入り江を知っていると。私の耳にはそれも歌で、また私は歌で応えた。しかしどうやら、歌うのではなく何かを食っていた。私が口を開くたびに、何かが私の口に放り込まれている。男の額の生え際は見事な半円を描いていて「墨を塗ったな」と私が言い掛けると、それが歌でなかったからか、私の口は中のものを吐き出すしかなかった。胃の中のものまで戻した気分になると、男は薬剤師で、さっき薬局で調合した薬を直ぐに飲めと言う。白い粉の溜まった液の事だ。激しく振ってから瓶の蓋を開けて一気に飲み干すと、体操着を着替えた小学生の一団が二列になって擦れ違って行った。空の硝子瓶に目を付けた子供に、蓋だけくれてやった。それから私は来た道を半分戻り、静まり返った運動場に足を踏み入れた。私の他にも何人か居た。気怠そうな若者達で、黙ってキャッチボールをしたりバットの素振りをしている。空っぽだった胃の中で薬はチャポンチャポンと音を立て、

胃の底に沈もうとする白い粉の重みも感じ取れた。振り返ると私の家の二階の窓が開いていて、我が物顔の薬剤師が下着姿で運動場を見下ろしている。家を乗っ取られたからには、私もまた誰かの家を乗っ取らなければならないのに、硝子瓶すら何処かに無くしていた。動物の骨の灰は、ゆるゆると体を巡り始める。（二〇〇四年九月一八日）

（必ず男が…）

必ず男が二人居なければならないのに何度数えても一人だ。二人居なければ隙間が出来ず隙間を巡って争えない。争いがなければ眠くなるが、そんな眠りは愁うべきでオチオチ眠れもしない。眠ってしまうよりマシだが、愁いだけでは眠気を払えず、争いから遠ざけられるままだ。それならば、眠ってしまう男と愁うばかりの男の境目によくよく目を凝らし、二人を分け隔てたらどうか。そこは祭りの中で、祭囃子は眠る男を夢見心地にするが愁う男には耳障りだ。そこに隙が出来、それを巡って二人は争う。眠気も愁いも吹っ飛び、ただ殴り合う二人の男が居る。争う理由はなくなっているが争う限り二人で居られる。それを見て、争いを続けろと言う者と止めろと言う者が現れる。止めろと言う

方は、二人が一人になって食い扶持が半分で済むのが嬉しい。続けろと言う方は、二人を宴会に呼んで二人分供応出来るのが嬉しい。何時も穀潰しと後ろ指差される身だ。宴会に呼ばれて喜ばれるなら言う事なしだ。意見が合い、争いは収まる。さて宴会には座を盛り上げるために二人が騒々しく争っていなければならないが、一人になってお通夜のようだ。選りに選って陰気な男を呼んだもんだ。全くの穀潰しだ。針の筵の男は消えるように席を外す。祭りは通り過ぎ、祭囃子はもうずっと遠い。ところで忘れていたが男は祭りの主催者で、その指図を受けようとする者達が男を探しに来る。「さてどっちだったかな」と誰かが言う。二人居るところを見付かった。二人では隠れようがない。互いの姿を見せ合わなければ二人としてやって行けず、その二人で居る姿を何人もの連中に見比べられるのは恥辱だ。直ぐさま男は連中に連れて行かれたが、彼らの目には始めからずっと男は一人だった。それを二人だと思わせる辺りが彼らの要領の良さだ。男に一人だと思われては容易く身を潜められしまう。指図を受けようという素振りも嘘で、男は石の下に埋められた。祭りは一年の区切りであって、明日からの一年は新しい男が二人居なければならないが、その務めは宴席を外さなかったもう一人の男と決まっていて、何も知らされずに石の前に毎日連れ出され、それがどうしてなのか、よくよく考えさせられる。（二〇〇四年九月二十日日）

（古いレコード盤を…）

古いレコード盤を持ち込んだが小太りの質屋はそれを手に取った切り黙ってしまった。希望の金額を言い掛けると、痩せた背の高い裸の女が入って来て私の横に立った。帳面を付けていた質屋の奥さんが立ち上がり応対しようとした。「旅「声を質に入れるんですね」と私が口を挟むと奥さんは黙って私を睨んだ。「旅をして来たんですが…」と女は言ったが、とびきり美しい声を期待した私はがっかりした。それから女は少し口篭ってから意を決したように外国語で語り出した。そちらは期待通りだった。質入れする位なら私がその声を引き取りたいが、質屋の主人はとても手の出ない高い額を即座に提示した。「実はこのレコードにも同じ国の言葉が吹き込まれてる」と私は言った。「知らないから」と質屋の奥さんは呆れ顔で主人に囁き、机に戻って専ら帳面の続きに係り切った。「この方の声を録音しましょうか。同じ国の言葉なら難しくありません」と言った私は、録音技師で、綺麗な声を求めて世界を旅していたのだ。質屋が私の申し出を断ると坊主頭の物乞いが店に入って来て、金色のピラミッドの模型のようなものをカウンターにドンと置いた。直ぐに録音機だと分かった。どうせ

盗んで来たのだ。よく見ると物乞いは女で、姉妹のように裸の女と似た顔付きだったが、小柄で腰の周りにだけたっぷり肉が付いている。その腰を後ろから ぴったり抱いて私は物乞いの女に録音の仕方を教えたが、汗ばんだ彼女の体から直ぐに凄い匂いが立ち昇った。腰の肉は腐るか爛れるかしているとしか思えない。堪らなくなって後ずさると、質屋の主人は物乞いと同じように大汗をかいて、すっかりピラミッドの底に書かれたエジプト文字を解読しようと言い出したりしていた。すっかり録音機の虜だった。そちらは二人に任せ、私は裸の女に片言の何ヶ国語かを試して通じ合う言葉を見付けた。数字の言い方が話題になって、億より兆よりもっとずっと上の単位を、分かる限り並べて行った。私が分からなくなっても女は楽しげに少しも言い淀まずに続けた。数の単位が上がる程、声は何処までも澄み渡るようになって、その輝きさえ辺りに満ちるのが見えた。多分そのせいで、ピラミッドは壊れ、質屋と物乞いは腐った肉と肉を掴み合って狭いカウンターの上で激しく交わり、質屋の奥さんは居眠りを始めた。（二〇〇四年九月二十一日）

（四等分した筈が…）

四等分した筈が一人だけ白い。後の三人は黄ばんで狭い。三人は狭く黄ばんだものを求めたがるが、それで益々黄ばんで狭くなる訳ではない。広くこそならないが、寧ろ時を追って白味を帯びて見えなくもないか。白い方の一人は全体を檻で囲んだが何処も弛んでいて好きに出入り出来る。檻を超えようとする者など居ないが目障りではあり、檻に沿って等身大の人形を並べた。色とりどりで檻はすっかり隠れた。借金取りに追われる者なども隠れたりする。無粋な借金取りは人形など目も呉れず行過ぎるが、人形を愛でる者には、破産寸前のやつれた姿の混ざるのはこれまた目障りで仕方ない。そこで連中の土気色の顔に化粧を施しキラキラした服を着せる。そうされた方は人形に挟まれて息苦しく、知らず檻を越え中に迷い込む。実はそっちはもっと息苦しい筈だが、追われる不安で息継ぎの心配までしていられない。そこでは着飾る方が目立つので服を脱ぎ化粧を落とすが、別に白くなれる訳でもなく、寧ろ身の熟しが素早くなって、月の光りでも浴びればその肌はぬるりと光って嫌でも目を引く。どいつも似た境遇で直ぐに気が合う。誰が一番逃げ足が速いか競争しよう。最初に息が上がった奴が叫ぶ。「息が出来ん！」駆けっこどころでなくなり互いに体を擦り付け合い少しでも大きく息をしようとする。獣の群れは危機に瀕するとそんな行動を取るのだと、誰かの頭にそんな知識が仕込まれていた。檻の外から、人形と人形の隙間に首を突っ込んで黒い牛が中を覗き込む。ぬらぬらした

獣の群れに牛の目はウットリしている。農業を始めてまだ間もなくて、押しても引いても牛はびくともしない。牛は段々機嫌が悪くなって遂に爆発する。吼えたかと思うと人形と檻を薙ぎ倒し月を見上げて猛烈な速さで駆けて行く。破滅だ。弁償のために大変な借財を抱え込んだ。しかし人形を愛でる者は穏やかに笑って「四等分すればいいんだよ」と言う。大変な知恵を授かった。戻って来た借金取りを三人捉まえて口説き落とした。檻を越えて中に入り、喘ぎ喘ぎ四等分した。誰も自分だけは狭いと思っていて、脱ぎ捨てられたままのキラキラした服を着て化粧をし、黄ばんで狭いと思っていて、脱ぎ捨てられたまま黄ばんだものを欲しがった。お蔭で借財どころか取り立てる側になれた。（二〇〇四年九月二十三日日）

（雨が降ると…）

雨が降ると道は縮むので足は速くなる。見慣れた景色も縮んで頼りない。目当ての建物の中も晴れた日より狭く、それだけ人の数も少ない。縮んだ機械の前に立って操作を始めるが、思うように動いてくれない。雨のせいではなく私の準備不足だが、それを怪しまれてしまうのは人が少なくて目立ってしまうか

らで幾らかは雨のせいだ。見張りは目を逸らして速足で建物から出て行った。機械から離れて始めてそれが細かく震えているのが分かった。離れたまま回り込むと、機械の裏側にうっすらと白いものが纏い付いている。誰も順番待ちをしていないので直ぐに用件を述べたが、係りの女は気付かずに隣と話し込んでいる。その女は、空が飛べて光りを見たので一刻も早く頭を剃って俗世を捨てたいらしい。同僚は真面目な顔で聞き入っている。しかし行方知れずの兄が女には気懸かりだ。その兄が縛られて入って来る。女は機械の裏側に走って、私が発見したうっすらと白いものを引き剥がし兄に纏わせた。縛られたまま兄は空を飛ぶように逃げた。それともただ空を飛べると喚きながら逃げただけだったか。女に感謝された私はここぞとばかり書類を出した。女は偽造だと見破ったが見て見ぬ振りをして私に恩を返した。見張りが連れて来た男は、眉間に皺を寄せ咥え煙草で機械を睨み付けるだけだ。私は建物を出た。女が傘も差さずに追って来て私の袖を掴み、魂と物質は何処まで行っても平行線である事を、是非分かって欲しいとせがむように言い続けた。私には分からなかったが、心は定まらなくなって為す術なく女に小さな一軒家に連れ込まれた。そこは診療所だが医者は留守で、一部屋しかない真ん中に私は独り座らされた。心だけが抜け出て建物に戻った。機械の前には誰も居らず見張りの姿もなかった。機械は、ガソリンスタンドを隔てた隣の建物の中の別の機械と繋がって、そこから

見張られているのだ。私の悪事はもうそちらの機械にまで記録され、また次の場所へと送られているに違いない。機械の裏側に纏い付き、こちらからその記録を消して行くしかない。戻って来ないところをみると女は寺に入ったらしい。私の心は戻って行けるのか。この試みを差して女は平行線と言ったのだ。（二〇〇四年九月二十五日日）

（叩けば中が…）

叩けば中が空だと分かる。真っ赤に錆びた鉄の箱だが扉がない。鑢で錆を落としても継ぎ目一つ見えて来ない。中が見えるまで鑢で削り続けるしかない。始まったばかりの戦局は有利に運んでいる。夕方の会議が迫っていた。それに上げる情報を纏めなければならない。角が裂けて中が僅かに覗いたかと思うと箱は急に柔らかくなって潰れ掛けた。特殊な気体が詰まっていて、それがずっと箱の形を内から支えていたのだ。急いで裂け目を押し開き書類の束を取り出したが、もう余程慎重に扱わなければ粉々に砕けてしまいそうだ。鉄を裂いた時の傷で両手の指の股が血に塗れていて、その血の滲んだ所だけ紙の劣化は進まない。血に混ざり込んだ鉄錆が、血塗られた紙の表面を震えるように動いて

細かな泡を噴いていた。湖からの突然の風が血の染みていない部分を粗方吹き飛ばしたが、血の染みた部分は残った。その血の中に読めたのは要約すれば「技術を携えていたのは、南から来た人だった」という事だったが、先祖の記憶にさえ殆ど残らない昔の話しだ。今は南には荒海が迫って狭い陸地を脅かし、湖を挟んで僅かな土地を奪い合うしかない。生き物の棲まない湖の底に兵士達の屍が積み上がっているが透けて見える。その最も古い屍は何時の時代のものなのか、熱い議論も虚しいばかりで、湖をぼんやり眺めてはその古い時代の空想に耽るのが多くの者の習慣になってしまった。読み取れた事からして我々は、南からの技術が海によって閉ざされた時から戦いを始め、その南から齎された限りの技術で戦い続けているに違いなかった。湖ではなく、何処までも続くと見える海への働き掛けが転機になるかも知れない。その推論が会議に発表された時にはもうすっかり日が暮れて、戦い疲れた者達の殆どは眠気と戦っていた。首領は寝椅子に横になって、敵の芝居に騙されて負った傷の疼きに怒りが収まらず、またその流れた血の筋が湖に沈んで行く経路を辿れば湖底の先祖の遺体をその血で穢したのは明らかで、それをただ悔やみ恥じていた。次の日、海に顔を向ける者さえなく戦局は一進一退になった。首領は独り戦いに背を向け、昨日話し合われた遣り方で穢れを祓うため、両足に鉄の重りを付けて帰らぬ旅に出た。（二〇〇四年九月二十八日）

（人一人入る…）

　人一人入る空っぽの逆さの甕を磨く。その底に開いた穴は耳の形で、甕に抱き付いて囁き掛けると、池の辺で水を飲もうとする姿勢の小さな黒い獣が頭を上げて振り向いた。獣までは起伏が幾つもあり、その距離を目で測ろうとするだけで彼はひどく喉の渇きを覚えたが、体は却って軽くなった。池に向かい窪地へ降りて行く。見上げる地面の向こうに池への眺めは遮られる。下りきって上りに掛かるが足が滑って前に進まず、諦めて遠回りするしかない。池の辺に来たが別の池で、小さな白い虫がうるさく飛び回っている。その羽音の中に聞き覚えのない女の囁き声が聞こえそちらを向くと、一軒家が林の中で傾いて窪地の底へと僅かずつ滑り落ちて行くようでもある。自分の家らしい。そう思えては、妻を救い出しに行かなければならない。玄関を押し破った。壁の奥に妻と男の言い争う声が聞こえたが、その隣の部屋に通じるドアが見付からない。虫の群れが廊下に入り込みその羽音の中の囁く声が彼を導く。両目に虫が飛び込んで前が見えない。細く柔らかい指が彼の目の縁を優しく撫でて虫を取り出す。目が開くと寝室で、根を張った土と共に黄色い花が窓際の床に投げ捨てら

れている。それが争いの元か。よく見ると鮮やかな黄色を残したまま花は枯れ、土も乾き果てている。寝床に男が蹲っていた。小さな水差しを持って池の水を汲みに行くらしい妻の後姿が窓から見えた途端、また両目に虫が飛び込み、足の縺れた彼は寝床に倒れ込んだ。幾らまさぐっても寝床の上に蹲る筈の男の体が捉えられない。布団の起伏の作る影が男の姿に見えただけか。それともそこに確かに蹲っていたのは、自らの姿だったか。喉の渇きが動く力を奪い、軽くなり過ぎた彼の体は冷たくなって行くしかない。それを嫌うかのように虫は彼の両目から舞い出た。微かに目が開いて窓の外が眺められた。妻が池で溺れている。逆さの大きな甕の上で体を丸めた小さな獣が、遠くからそれを静かに見下ろしている。その獣の腹が温めている甕の底の穴は、彼の片方の耳で、冷たくなった体の中でそこだけは血が巡り、池の底からの彼の妻の声を聞き取ったが聞き覚えのない囁き声だった。獣の擽ったそうな表情はとても幸せそうで老いて見えた。(二〇〇四年十月四日)

(店先に白い…)

店先に白い犬を繋ぐ果物屋を探していた。長い急な坂道を登り切ると直ぐに

果物屋で、手掛かりの写真と比べると店の造りはそっくりだが塗り替えられた看板には「砂」とだけ大きく書かれてある。棚は空っぽだ。写真と同じ太った奥さんが出て来て、字が読めないんだねと言った。懐からお土産の艶々した扇を取り出すと態度が変わって奥から主人を呼び出した。俺も読めないんだとその痩せた男は狡そうに言って看板の一文字を指差した。奥さんは扇を弄り回し、これは何に使うんだねと尋ねた。呆れ顔の主人が扇を奪い取って何度も唾を吐き道に叩き付けると、それは坂の方に転がった。もう一人坂道を登って来た者がその砂塗れの扇を拾い、字が読めないんだと言って扇を投げた。坂の下の平野には大きな街が拡がっている。似たような小さな建物で埋め尽くされ何処にも道がなく動くものが見当たらない。四人共初めて見るようにその都市を見下ろした。誰も坂を登って来ないな。字が読めなくて良かったと私は嬉しくなって叫んだ。扇は風に乗り都市の遥か上を舞って落ちる気配もない。小さくなって行く扇から砂が少しずつ落ちてキラキラ輝くのが悲しいと言って奥さんは泣いた。扇は何時か落ちる。追い掛けようと言って私は坂を下った。振り向くと誰も付いて来ない。果物屋の主人が深追いするなと叫んだ。それきり三人は何事もなかったかのように店に入った。坂を下り切ると役人風の同じ服装をした三人が出迎えた。看板の字を読んでしまったんだなと言われて私は二度と戻れないのを悟った。落ちて来た扇を受け止め、風に弄ばれてあちこち傷んでいるのを指

で撫でて直して行った。それを見た三人は、どうしてそんなに速く直すんだ、命を縮めたいのかと繰り返すので、何の話かと尋ねた。お前は扇に執着し過ぎる、それが命取りだ。それだけでは分からないと言うと、惨めに若死にした男女の例を幾つも並べ立てた。扇はすっかり直って前より艶を増した。三人は窓から建物に入り窓を閉めた。道がなくては街へは一歩も入れず疲れてしゃがみ込んだ。僅かに開けた窓から腕が伸び、私は首輪を嵌められた。振り仰ぐと坂の上の「砂」屋の店先に繋がれた白い犬が小さく見えた。人の姿が何処にもないのは、せめてもの慰めかも知れない。私達は遠い目と目を見合わせて吠え続けた。（二〇〇四年十月八日）

（結局走る仕事には…）

結局走る仕事には就けなかったが脚を鍛えるため砂浜を走るのが日課だった。同じ志の連中とボロ屋で寝泊まりしていた。そこで生まれ育った私が年少なのに一番の古手だった。もうそのボロ屋はなく高速道路の出口になっている。その高速道路を取り壊す仕事を請け負った。昔の仲間に声を掛けると早速遠い所を、皆脚を鍛えて来ただけあって自分の脚で駆け付けた。先ずは宴会で盛り上

がろうと飛び切り辛い味噌を頼んだ。その味噌の嫌いな者は昔から一人もいない。その味噌がちっとも来ない。催促に人を遣っているが痺れが切れた。取りに行こうとして途中背の高い男に道を塞がれた。河原から飛んで来た石を受け取って高い方に投げ上げるのが仕事で脇目も振らない。一度手を休めて貰わなければ通り抜けられない。道を塞がれた者達が犇めき、力の弱い者は道から弾き出され河原に転がり落ちた。残れるのは余程屈強な男だけだ。太刀打ち出来ない私は脚力を活かし高い方へ駆け上った。大きな穴が開いていて縁に立つ者が石を受け取っては穴に投げ入れている。穴の底で石をぶつけられる赤ん坊が素っ裸で泣いている。急な傾斜の穴の内側を一気に駆け下りた。赤ん坊の身の丈は私と同じでゴム製の体は石が当たる衝撃で泣くように出来ている。その裂けた腹の中に埋まった味噌を僅かずつ嘗めては我慢出来ずにカップ酒を飲んだ。真っ先に酔いは脚に来てもう穴の内側を駆け上れそうにないが石が頭に当たっても酔いが回って余り痛くない。赤ん坊は石が当たる度に少し体が跳ね上がって石に埋もれないが、私はそうは行かない。石を投げ込んでいた者が、今日の仕事は終わりで伝えたい事があるなら伝えてやろうと言った。仲間に渡して欲しい物があると言うと、これの事かとそいつは金属の箱を穴に投げ入れた。穴の底に届く前に蓋が開き、中の物が飛び出て赤ん坊に降り懸かった。写真やらガラクタやらの懐かしい品品だ。ガラクタはどれも人を傷付けるための物で、

写真にはそれらを振り回すギラついた目付きの仲間ばかりが写っていて、それをけしかけるのが赤ん坊の私で、怯む者には容赦なく罵声を浴びせたものだ。特に臆病なひょろ長い三人組の顔が浮かぶ。穴の縁で私を見下ろす奴と道を塞いでいた奴、もう一人は河原から石を投げていたに違いない。（二〇〇四年十月十日）

＊　　＊　　＊

1（仮病の患者ばかりの…）

仮病の患者ばかりの病院に忘れた水差しを取りに戻る。水差しの底に細工がしてあり金になる情報を隠しておいた。受付から見える部屋のベッドに寝ているのはどうしても一目会っておかなければならない人だが、肩を寄せ合い歓声を上げながら高校生のような笑顔を振り撒く若い男女二人の医者が近付いて来たので、知らん顔で通り過ぎなければならなかった。とても長い時間が経って

いて、まだ新築の病院の真っ直ぐな廊下を振り返るとその時間の長さが見通せた。誰も私を見なかった。人に見られるのに耐える才能が私にはないのだと思えた。直ぐに死ぬからそれまで酔わせておいてくれ、と側の患者に袖を掴まれて頼まれた。その隣の患者が、お前の目付きが酔いを醒まさせるからだ、俺はさっきまで気持ちよく寝ていたのにお前のせいで目が覚めたじゃないか、顔をよく見せろ、お前の事は死んでも忘れんからな、と私を非難した。夜が明けようとしていて病院の中は床も壁も露に濡れた。天井がまだ仕上がっていなくて朝の空が見通せた。目指す病室の目印である青く光る電気スタンドを見付けた。その傍らを小さな硬貨が一枚転がり、電気スタンドの置かれた机の下で、大きな口を開けた男が尻餅を搗く格好で仰け反っていた。硬貨が落ちて来たら口に入れる積もりだ。それは誰の金だ、と私が強く尋ねると、男は体を折り畳んで黙ってベッドの下に身を隠した。お前と俺がどんだけ違うんだ、とベッドの下からぶつぶつ言う声が漏れた。私は口の中に盗まれないように硬貨を何枚か含んでいて、その手垢の味でそれぞれを判別し、一番安い硬貨を一枚床に吐き捨てた。それが合図かのようにスタンドの青い灯りが消え隣の部屋が透けて見えた。大柄な女と丸い背中の小柄な男が小声でサンドイッチの売買の交渉をしている。二人の後ろに積み上げられた段ボール箱にはサンドイッチが詰まっていると表示されているが私にはまやかしに思えた。こんな時間に交渉するのは訳

ありに違いないからだ。後ろに回ると箱の側面が透けて見えて中に紅葉の葉が詰まっている。朝日が差し込むとそれはしかし、そのような絵が箱に描かれているのだと分かった。試食する小柄な男の口の周りがベタベタしていて口の裂けた女の顔のようだ。一方女は口の周りにうっすらと髭を生やしていて髭というよりも青い黴にも見えた。窓の外の庭の噴水はトロリとして蜂蜜のように甘そうだった。私を非難した患者が同じように薄汚い形の酔いを醒まされた患者を噴水の池の脇まで引っ張って行って、その水を飲ませた。水を一口飲んだ患者は故郷に帰りたいと盛んに言い立てた。その患者の故郷の人達を私が指揮をして長い間暴力を用いて苦しめていたのを思い出した。その事は直ぐに私を非難した患者の口から故郷に帰りたい患者の耳に囁かれた。二人とも諦めたような顔になって本当に病気であるように力なくその場にへたり込んだ。庭に虎が放たれ二人は食い殺された。私は窓のない部屋の奥の方で大柄な女からその報告だけを受け、誰に賄賂を贈れば二人の死骸を穏便に処置出来るか考えていると敵の大軍が庭を埋め尽くしていて、私は一人隣のタクシー会社の車庫に逃げて身を潜めた。（二〇〇五年五月四日）

２（山賊に捕らわれた…）

　山賊に捕らわれた警官の友人の救助に向かう事になり、先ずは食糧の調達に出掛けた。魚臭い路地を抜けると急に海が現れた。浜は全て削られ、いきなり乗り上げて来る波に足をすくわれそうになった。馬でやって来た男が、馬に水を飲ませたいと言いながら馬を降りた。私は海に入り腰まで水に浸かって井戸を探した。海風はネバネバしていて目が開かなくなり足が着かなくなり沖に流されるようだった。馬の嘶きと波の音と海岸線が崩れて行くのを嘆く声が耳の中で渦を巻いた。暗さの先にある熱っぽさに追い付いて熱い砂を掴み取ると目が開いて長い浜辺が拡がった。振り返ると海の水は涸れてゴツゴツした遠い地平線から魚臭い熱い風がたっぷりと運ばれて来ていた。馬に跨る男が、時間の無駄だと言って私を抱き上げ山の方に馬を駆った。しかしじめじめした谷は深く、なかなか山を登れない。殆ど草も生えてないぬるぬるしているように見える地面には輝く粉が薄く万遍なく敷かれ、光りが蠢いていた。お前が山賊だな、と私が言うと男は私を鞍に縛り付けて馬から降りた。馬は忽ち急な崖を駆け上り山頂に立った。そこから見ると、下からでは地平線の彼方に退いていた海の水が、地平線を縁取る帯のように見て取れた。水の色はピンクと薄い黄色の縞模様だった。喉が渇いて我慢出来ず馬と格闘した末に馬を山頂から突き落とした。山頂の岩肌から滲み出る清水を山頂に抱き付いて舐めた。見下ろすと山腹を山

賊達が取り囲んで、じりじりと山頂に迫っていた。警官の友人の姿も見えた。彼はもう殺されてしまっていたが、死霊となって山賊共の恐怖心を煽りすったかり彼らを従えていた。私を助ける振りをして、彼が私を殺そうとしているのは明らかだった。下の谷間で村人達が会合を持って山賊に味方するか山賊を打つかが話し合われていた。私の乗っていた馬が潰され村人達はどんちゃん騒ぎを始めた。山賊達は飢えと寒さで次々に倒れ崖を落ちていった。清水に錆びた鉄の味が混じると、海底の涸れていた地肌から少しずつ海水が滲み出して暫くすれば海は元の姿に戻りそうだった。谷間はずるずると沈んで浜辺に埋もれ遂には海に呑まれた。体の軽い村人達は海面にプカプカ浮いた。警官の友人の霊は海上を行き来してそれらを集めて回り、全て配下にした。私に逃げ場はなかった。裸の胸を岩肌に擦り付けている内にとろりとした香りが漂ってきて眠くなったが、友人の笑う顔が側まで近付いてくるのは分かった。それでも私は眠る事で山頂から彼の目の届かない方にずり落ちて行けた。それは逃げ場を失うより更に悪いのだと、私と友人の意見は一致した。（二〇〇五年五月七日）

３（有名な金持ちが…）

有名な金持ちが死んで遺産が相続される手続きが始まったが誰に資格があるかが問題だった。彼の親族を名乗る者達の主張は退けられた。次々に現れる彼の恩人だという者も退けられた。退けたのは彼の家族としてつい先程選ばれた者達で、その家族にだけは間違いなく遺産を受け取る資格はなかった。数年前に法律がそう変わったのだ。遺骸の周りは彼の死を聞きつけた者達でごった返していた。壁が打ち壊されなければならなかった。庭に人が押し出されて庭も人で埋まると塀も打ち壊された。庭の中の地面を掘り返している者達がいて黒い土の中から古書を見付け出した。それで法律は無効になった。誰が遺産を受け取るかが一から検討され直されなければならない。しかしまだその古書の真贋が問題でその発見はでっち上げだとする声が高まった。黒い土の鑑定をしようにも、それはもう全て持ち去られていた。遺骸の置かれた直ぐ上の階の部屋で、遂に金庫がこじ開けられた。いい匂いの新鮮な羊の肉の塊が出て来た。金銀よりも羊肉の価値が跳ね上がった。その上の階にもそのまた上の階にもそっくり同じ部屋があって、それが積み上がって高い塔になっていた。その一番上の部屋の地上の喧噪の届かない部屋で、私は怪我人の手当をしていた。肉付きのいい胴にも腕にも脚にも同じ幅の綺麗な深い傷が何カ所もあり、そこにカードを差し込むと怪我人の肌から現金が湧き出て来る。私の他に女が三人居てそれぞれカードを持ち、代わる代わる怪我人の体から現金を取り出した。女三人は電

車の時間が迫っているので窓から部屋を飛び出た。三人は他の客達と銀色の駅の通路を進んだ。私は手元の現金もカードも持ち去られているのに気付いた。女のカードが一枚だけ落ちていた。私も同じ電車に乗らなければならない。時間の許す限り女のそのカードを使って現金を取り出し、それから女達を追う積もりだった。しかし怪我人はもうかなり弱っていて、もたもたしてなかなか現金が出せない。ホームに入った電車は最後の二三人が乗り込めば、直ぐに発車しそうだった。私は金を諦めて駅の通路を走ったが目の前で電車のドアは閉まり、ホームに溢れる降りた客の流れに乗って駅の外に出た。黒い土の周りに人集りが出来、その全員が協力し合って道に開いた大きな穴に黒い土を埋めて隠そうとしていた。しかし水道管が邪魔で仕事は滞っていた。煙が来る方に行くと、遺産を巡る言い争いの場に引き戻された。遺骸はなくなっていて、さっきの女達の操るその夫三人が話し合いを取り仕切ろうと躍起になっていた。私は彼らに見付からないように顔を背け、まだ煙が回っていない方に逃げた。青く塗られた棺桶を撫でるのは遺産を残した死んだ男だった。私に気付くと手招きし笑いながら棺桶の蓋を開けた。中は空だった。彼の笑顔は私に中に入るように促していた。神妙な顔付きの棺桶職人が呼ばれ彼の拵えた鳥の彫り物が放たれると、それは本物の鳥のように羽ばたいて飛び去った。私は安心させたいのだ。職人の顔に見覚えはなかったが直ぐに心を許したくなる顔だ。一方、死ん

だ男の顔は毎日ずっと見続けてきた顔だったが、笑顔で優しく誘うようでも決して心を許せないと思えた。（二〇〇五年五月十日）

４（ローソクの明かりだけで…）

ローソクの明かりだけで山小屋の小さな絵を描いている男の部屋に入ろうとしていた。一歩踏み込むと窓の外が急に明るくなった。慌てて一歩後退ると窓は元の暗さに戻った。鉄パイプを握って一息に部屋に入り窓の外が明るくなる前に絵を描く男を叩きのめそうとした。絵と男は壁の中に逃げた。目が眩んで燭台を掴もうとするがローソクの火がクネクネと揺れるだけだった。燭台を追って部屋中を歩き回っていて、床を見ると何色もの多量の絵の具を踏み潰していた。暗い色ばかりで明るい色を見たくなって探したが色は独りでに濁るばかりだった。窓の直ぐ外に埃を被って色褪せた乳母車が見え、それを押して絵の具を買いに行ってくれる人を募りたくなった。その為の道具をポケットから取り出すと重く大きな真っ黒な双眼鏡で、それを窓から押し出そうとした。壁の中の男はコーヒーを飲みながら双眼鏡と格闘する私を余裕の表情で眺めている。男はコーヒーを飲み終わるといきなり何十歳も老けてしまい、ガッシリした丸

い背中を向けて壁の奥に出て行った。それに引っ張られるように明るい雪景色の斜面の前に来た。進もうとしても斜面には近付けず雪は段々溶けて行く。振り返ると暗い色の中に廃材が固まって見えた。壊れた山小屋だろうと思いながらそちらへ滑っていた。鉄パイプを何度か地面に突き立てたが却って速度は増す。小屋の主人は、お越しいただき喜びに堪えませんと芝居がかった身振りで何度も言って立ちはだかったが、私はその脇を擦り抜けた。そうしている内にも私は袋の中から小さなお菓子を幾つか掴み出しては頬張っていた。湿気ていて変な味がしたが舌の上で溶けると暗い味だと思えて、絵の具が舌の上でのたくっているようだった。その味から逃れればここからも逃れられる。その前に頭を守るヘルメットが必要だが、ないので頭を抱えた。狭い所を擦り抜けると山小屋の主人が後を追って来るのが分かった。主人の姿はボロボロだったが必死の形相で雪と暗い色の絵の具の混じったドロドロの斜面を駆け上ってくる。追い付くのを待ったがなかなか来なかった。犬のように地べたに鼻を擦り付けて私の方から主人を探したが、探しているのは私ではなく若い頃の山小屋の主人だった。しかしそれにしても若過ぎる。主人が雇ったアルバイトなのだ。その動きをストップウォッチで測っている私は山小屋を乗っ取ったのだと思った。ただ私は主人を殺した訳ではない。その証拠に私は彼を神棚に祀っていた。その神棚の何カ所かに変な所がある。暗い色の絵の具のせいにしたが誤魔化しき

れない。やはり新しい絵の具が必要だが雪に閉ざされて手に入らない。吐き捨ててても吐き捨ててもお菓子の変な味が残った。客が三人蒸し風呂に入って談笑していている。吐き捨てる音を聞かれてしまったかと悔やんだ。（二〇〇五年五月十三日）

５（下手な詩だと…）

下手な詩だと思って読んでいるとどうやら私の事が書いてある。そこでは私は身籠もっていたがそれは嘘で脹れた腹の中にはそれまでに踏み倒した借金が隠してある。子供が三人居てどれも盗んできた子だった。しかし扱いが面倒なので布切れを束ねて結んで脚や腕の形を作り、子供の生身の脚や腕をもいではそれと取り替えていた。頭をすげ替えるには布切れとはいかない。医者に頼まねばならず金が掛かる。空気の澄んだ気持ちよく晴れ渡る日を選んで草原の道を金策の旅に出た。道は途絶えては直ぐまた続いた。日が暮れかけても雲と山の形が変わっていない。前に進んでいないのではと足元を調べると、ゆっくり回る大きな球体に乗ったり降りたりしているだけだと分かり、私は球体から弾き飛ばされた。強い老眼鏡を掛けた男が来て、お前は奴隷になったのだ、ただ

し俺は奴隷に常に自由を与えてきたから安心しろ、というような事を言った。
私はその男が物知りに見えてもっと別の事を聞きたかったが、球体と地面の隙
間から地下に逃げる事にした。暗い中を過ぎると大きな奴隷部屋に居て百人は
居そうな奴隷達は積み上げられた豚の丸焼きを食い放題に食い散らかしていた。
私は彼らの見向きもしないサイコロ形の寒天のお菓子ばかり食べた。隣の奴隷
が、お前は変わりもんだな、変わりもんは生きられんぞ、と力なく言って臭い
ゲップを長々と吐くとその場にぶっ倒れ直ぐに片付けられた。豚が食い尽くさ
れたらしく奴隷達が騒ぎ出した。円天井の頂点から黄色い光りが霧のように降
り注ぐと奴隷達は殆ど居なくなり、がらんとした部屋の壁と床に噴き付けられ
た黄色い光りが輝きを増して目を開けていられなくなった。目だけでなく光り
は体にも作用するらしく、光りに晒されている全身で酷い眩しさに苦しんだ。
残った僅かな奴隷が同じ方向に走って逃げるのが足音で分かる。その姿を見た
い誘惑に勝てず目を開けると眩しくなかった。それはしかし目の中がすっかり
光りで占められたからで、目がモノを見るのでなくその光りが見るのだ。目で
見られないものが見ようとされていても私には知りようがない。老眼鏡の男が
同級生だったのを思い出した。学生の頃の彼は、踊り子を外国から買い集めて
いかがわしい商売をするのが夢だと語っていて、一緒にやらないかと何度も私
を誘ったのだが相手にしなかった。何年か後にぶくぶく太った大柄な踊り子達

の中に埋もれてしまいそうな冴えない彼を見掛けて、私は軽蔑した。私が子を盗もうと思った時、真っ先に思い浮かんだのが彼の踊り子が産んだ子供達で、私はそれを次々に盗んでは彼の商売仇に売り飛ばしていた。それを彼に知られてからはすっかり疎遠になった。私は今復讐されているのかも知れない。狭い中を潜り抜けようとしていた。産道だろう。もうすぐ私は売られるために生まれる赤ん坊になって産声を上げる。（二〇〇五年五月十六日）

６（草の中を…）

　草の中を濡れて這い蹲っていた。草は目に見えて大きくなり私の背丈を超え乾いて硬くなって形だけは草だが別の材質で出来ている。尖った草の先はもう青空を突き抜けそうだった。しかしそれを巨大なものとして見上げているのでもない。私もまた草には及ばないが大きくなって乾いて硬くなっていた。高い風が吹き降りて草の先からパリパリと薄い硝子の弾けるような音を立てて欠けてゆくのを見せられると、同じ事が私にも起こりそうで身を縮めた。陽気な感じの数人が来て私を引きずり出した。彼らを真似て私も陽気に振る舞おうとリズムを取って手足を動かすと、彼らの体はパリパリと硝子が弾けるような音を

立てて粉々に砕けた。私の体も似たような事になっている。ただ砕けたのは上っ面だけで脱皮した気分だった。黒塗りの車が迎えに来て後ろのフカフカの座席に収まると四つの車輪の位置には黒い服を着た男が据え付けられていて車体を支えている。運転席に運転手はいない。車ではなく何か別のものだ。汚い顔の子供達に取り囲まれていて中の私を憐れむ目で覗き込む。私は伸びすぎた自らの体を鋏で端から順にジョキジョキ切り始めたが切っても切っても直ぐ元に戻ってしまう。鋏の刃はとても長く窓を突き破って子供の頭や体を切っていた。子供は幾らでも居て切られた子供から後ろに放られて新しい子供と入れ替わりそれがまた鋏の餌食になる。手放そうとする程鋏は激しく閉じたり開いたりした。目だけでも転じたい。それが無理なら鋏で目を刳り抜きたい。その通りになったのか、真っ暗なのに急斜面がずっと先まで降りて行くと分かった。そしてずっとそうであるには、急斜面は急斜面と分かってしまえば直ぐに別の急斜面と取り替えられなければならない。その内にその取り替えられて行った急斜面の一枚一枚が巨大な刃になって重なり合い、スクリューのように激しく回転すると感じられたが、その一方で実際には私に感じ取れない別の事がそこで起こっているのだという確信も何故か持てた。狩りをしている道に迷った男が来て、秘密だけは守ってくれ、誰にも何も教えないでくれ、私とあなたは同じ事をしたのだから、と言ったがそれを信じる理由もなかった。男は泥のように弾

け飛び、男に殺された獣の匂いがその辺りに湧き立った。窓にへばり付いてきた子供達は皆青年に成長していてそのどれを裸にしても傷一つなかった。彼らは重なり合う急斜面を素速く次々に飛び移りながら転げ回って、一種類でも多くの獣の匂いを身に纏おうとまるでそうしなければ生きて行けないように競い合った。それは彼らの姿ばかりか急斜面の様相をも獣そっくりに変えて、獣の形ばかりが何処までもスクリューのように回転し続けて闇を全て塞ぐのは分かったが相変わらず何処も彼処も暗く、何処にも目を転じられないのを思い知った。（二〇〇五年五月十九日）

7（肋骨の一本が…）

肋骨の一本が伸びて出て湖に繋がった。湖が伸びてきて肋骨に繋がっているとも見えたが、それでは肋骨一本では済まず体中を湖に侵されそうで困る。そるの困る方に事が進むのは湖がついさっき生まれたばかりだからだ。今日生まれると分かっていてその準備をしていなければならなかったのに忘れていた。駅舎が焼けて屋根の黒こげの骨組みだけが残ったのも今日が湖の生まれる日であるのを忘れていたからだ。兎の顔をした人が頬を擦り寄せて時間を売りに来た。

三秒もあれば劣勢を押し戻せる。悪くても肋骨一本失うだけで済む。良い話しだと思っていると兎顔は溺死して湖面に浮き、湖面の照り返しの方に妙に速く流れて行く。湖にしては水が動きすぎる。堰が切れたのを知らせるサイレンに追い立てられるように肋骨は溺死体を追い越して切れた堰の方にグングン伸びた。目印の鉄塔が見えてきたが武具を身に着けた兎顔をした人達が周りをがっちり守っていて近付く肋骨に臨戦態勢を取っている。このままでは鉄塔にぶつかって肋骨一本だけが天を指して突き上がってしまう。鉄塔の真下を風が吹き抜けその向こうの白い景色が見通せて白い尖った屋根の上に湖の代理人が跨った。この先何が起こり得てどのような交渉が可能かの大きな紙に書かれた一覧表を丸めて抱えていたが、それは要らなくなったのかちりぢりに風に舞った。肋骨はそのまま後を追うように地下をグングン進んで根を張って白い景色全体に養分を送っていたが誰にも気付かれず忘れられた。兎顔の人が売ろうとした三秒間が宙に浮いていた。それを瞬きもせずじっと見詰める私の濡れた目は、底なしに澄み渡っていて湖一つくらいならその中に収まりそうだったがもうその必要もない。三秒間に危ないところを救われたからだが湖に向かう飛行機の時間が迫っていて逆にその３秒間に行く手を塞がれて困る。山の中の小さな飛行場であればちょっと遠回りすれば良さそうだが、それをしてしまえば三秒間は二度と私を助けてくれないだろう。そんな風に考えながらも私は三秒間を粉々になるまで壊

してしまっていた。それで結局また肋骨と湖が繋がってしまったが湖はドロリと濁って勢いがなく肋骨の優勢は明らかだった。恐らく誕生した日が終わり次の日になったのだ。一本だけでなく他の肋骨も集まってカチカチと触れ合いながら勝利に酔って踊り回った。湖は益々濁り水草にすっかり覆われて湿原同然になった。そうなるよりずっと前に肋骨は姿を消していた。調査官を乗せた小舟が湿原を掻き分けて骨を探しに来た。私はその調査官の一人でそこで近々行われるボートレースの準備の担当でもあった。コースから水草を除けるのが大仕事でこの土地の兎顔の従順な人間を大量に雇って肋骨が胸から食み出るまで働かせようとしたが、彼らは顔だけでなく全身兎の姿になってしまう事で私に抵抗しようとした。それに対し私は兎の嫌がる事をし続けねばならず兎についての資料と首っ引きで仕事をした。その甲斐あってレースは無事行われ次の仕事場に行くと私は悪い見本にされて壁に張り出されていた。（二〇〇五年五月二十二日）

8（網を束ねた…）

網を束ねた塊を誰だか分からないように背負わされて、ケバケバした明るい

色の波打ちそうに柔らかい山の前に居た。びっしり生い繁る木々は幹も枝も葉もセルロイドかプラスチックで出来ているように見える。足が竦んでいたが山の異様さより眠気のせいだ。木々の隙間に倒れた朽ち木の見えた気がした。水気をたっぷり含んだ表面を養分を求めて白く小さな虫達がびっしりと這い回っている。風が吹くと枝葉に覆われて朽ち木は見失われた。目の錯覚だったとしたらそれも眠気のせいだ。空がグルグル回るのも眠気のせいだ。その眠気が少しも眠りを導かないのが不思議で解明しなければならない。心臓の鼓動がうるさいからだ。担いでいる網が心臓だった。それではどうにも出来ないと諦めた。潰しても支障のない別の心臓が探せば見付かるように思われた。それを求めてケバケバした山の前に居るのかも知れない。私のよりもっと軽そうな網を担ぐ者達が私を追い越して何事もないような顔で山に入って行く。とても真似出来ないのも眠気のせいだがそれを眠気と名指す事に段々と我慢出来なくなってきた。しかしどうにも出来ない。焦ってみても何も変わらない。だとしたら眠気と名指す事でなく、私が人である事が間違っている。例えば私が犬か宇宙人か微生物ならその眠気はそれぞれ異なるだろう。そういう事だ！　胸のすく思いがした。網を拡げて鳥を獲ろうと思った。空がグルグル回るのはそのためだ。監視カメラを四方に据えた壁に分厚い絨毯が貼り付けられ鳥のミイラが何体かクリップで留められていた。それで網はもう要らないと捨てた積もりが眠気を

捨てていた。途端に足がふらついて地面までぐらぐらする。眠気は借りてきたもので、貸し主が私の行動に腹を立てている。ビルの工事現場の地下に逃げ込んだが夥しい数の棒鋼に搦め取られた。地下に張り巡らされたその棒鋼はそこから眠気を通して地上の世界を操っていた。遂に眠気の元締めを突き止めた。体を揺すと地下の工事現場全体がゆさゆさ揺れて地上の世界をも揺らした。私が世界の眠気の発信地になった。酒瓶を持った酔っぱらいの男女が大勢雪崩れ込んで手にした木の枝を振り回しそのプラスチックの葉がカシャカシャ耳障りな音を立て、それは彼らを更に陽気にする。彼らが水溜まりの方に消えるともげた葉が棒鋼に張り付いて地上の世界を操る棒鋼の神通力を奪っていた。現場監督は私の旧い友達で、全部駄目になったと言って現場に持ち込まれたものを全て片付けさせた。旧い友達の家に行ったが留守だった。黙って水だけ飲んで帰ったがそれがいけなかったらしく、体の一部が網になりそれは拡げられて何処へ行くにもそれを引き摺らなければならない。それは私の博識を現していたが追従者に付き纏われて迷惑だった。彼らは皆眠気の手先に違いない。彼らが好き勝手網に絡みついては息苦しそうにじたばたするので私もとうとう動けなくなった。私は巨大な翼を生やしていて網だと思っていたのは翼だった。翼をもぐには工事現場が必要なのだがそこはもうピカピカに磨かれた床と天井が拡がっているだけで、ただその地下室でなら翼を引きずり回して私はそこを移

動出来ないながらも三六〇度あらゆる方向を向けた。これまで知らなかった自由が手に入ったがちょっと使い込めばポキンと折れそうだ。（二〇〇五年五月二十五日）

９（道路に似せて…）

道路に似せて作られた道路地図は目が粗すぎて酷く水が漏る。見せ掛けの道路地図で実は貯水槽だと教わっていたのに忘れていた。確かめてみるとそれは古い貯水槽を廃物利用した巨大な道路地図だった。描かれた道路の上を好きなように歩いて行ける。山道を登った行き止まりで振り返ると貯水槽全体は辣韮のような形でその突端に居た。降りようとしても滑りやすいしぐらぐら揺れて踏ん張ってしまい、ただ体を固くするだけだった。どうやら自分で自分の体を揺らしていた。そのせいで私の周りに恐ろしい程の夥しい数の人が集まってきていた。私は彼らの中に紛れ込んで逃げた積もりだった。雨漏りのする窓のない部屋に居た。壁は脆そうな石で出来ていて誰かがそこに墨で絵を描いている。絵は大きな動物の姿に見えた。それは下絵でそこに動物の像を掘り出す積もりらしい。しかし動物でないとしたら。動物とは似ても似つかない。私はその下

絵の中に巻き込まれて行くのをどうにも出来ない。石の表面がボロボロと崩れ破片が段々と床に積み上がって行く。絵を描いている者が邪魔される事に腹を立てている。しかしそれは監視人の気に食わないようで絵描きは乱暴に部屋から連れ出された。半身を石の壁に埋めて私が絵筆を取っていた。動物と植物の境目がなかなか巧く描けない。色々な形が混じり合って収拾が付かなくなった。監視人が連れてきた絵の愛好家達はその収拾の付かないところを喜んだ。賑やかな褒め言葉は冷たく感じられた。私を石の壁よりもっと奥に埋めたくて、そんな風に褒めるのだ。褒めすぎて全身の熱を放出してしまったのか、彼らは冷たい石像に見えた。私はほっとした気分で石の壁の見えない奥に自らの姿を墨で描いた。ただ道ばかりで出来た世界に日が昇ろうとしている。道と道の隙間の広さを全部合わせたら半端ではない。光が差し込む前にそこを何かで埋めなければ道は支えを失ってバラバラに壊れ、そこは道の細かな破片が飛び交うだけの世界になってしまう。そうなっても良いように自分の体を釘付けにしたくても体はクネクネしていて釘は役に立たない。釘は私の体の役に立たない！この真理は何かに使えるに違いない。何に使えるかを探る事が全てになった。日は昇りはしたが眩しくない。日輪の中に道が縦横に走っているのが容易に見て取れて道ばかりの世界も安泰だった。私の体は宙に浮いてその眩しくない陽の光りに差し貫かれた。見下ろすと道と道の隙間には何もないというのは杞憂

で色々なもので埋まっていた。その一つに目が凝らされると腹を空かした客達にたった一人で給仕をしている女の姿が浮き沈みする。私は段々と痺れが切れてきた。それを天に向かって訴えると動物と植物の間に送られた。そこは私が描いて拵えた世界かも知れずとても居心地よくしていると、私は動物と植物とに切り離されていて動物の私と植物の私が互いの姿を見比べ合うしか出来る事がなくなっていた。その中間に笑う監視人が臭い匂いで割り込んできて、私は道の破片の飛び交うだけの世界に連れ去られそうだった。道の破片を滑らかに飛び交わせるための物質が、動物と植物を混ぜ合わせて抽出された。（二〇〇五年五月二十八日）

１０（結婚式のために四つん這いの…）

　結婚式のために四つん這いの女が糞のようなものを食っている。その女が結婚するのでなく医者と思われている男の治療を受けて式に彩りを添えている。その式が途中から悪徳商法の団体の総会に変わると、その女は踏み付けられていて食ったものを吐いていた。色取り取りの溶けた硝子のようにとろりとしたキラキラしたものを吐いた。薬剤師が商売を始めようとしていて、子供がお菓

子の家に憧れるように彼は薬だけで出来た薬局の建物を思い描いていた。女の吐いたものはその材料にもってこいだ。しかし量が全く足りない。どうやってその嵩が増やせるのか分からない。医者と思われている男は自らを女の父だと名乗り、娘を貰うなら増やし方を教えてやろうと薬剤師に迫った。小柄な薬剤師は押し潰されそうになったが全身から噴き出たぬるぬるした汗を利用して身を躱し、結婚しないのは団体の戒律だ、と言うと男は娘だとする女を更に激しく踏み付けた。女は逆襲し父だとする男の体を食い始めた。男は食われながら、俺は医者じゃない、健康食品を売ってるだけだ、その健康食品もインチキだ、と白状し、紹介状を薬剤師に渡した。紹介された者がやって来て神社の側の製薬会社の営業マンを名乗り薬を荷台一杯に積んだトラックが続いた。私の叔父さんは薬剤師の命の恩人でそれが縁で今までは私が薬剤師に薬を売っていた。私は小さな製薬会社をやっていたが、巧く薬を作れないので同じ薬を違う箱に入れて色々な薬に見せ掛けて売っていた。しかしそんな私でもトラックに積まれた薬が糞のようなものだと見抜けた。神社の側の製薬会社は見るからに精力的な感じの人間を次々に送り込んできて、薬剤師が夢見る薬だけで出来た薬局の店舗を造っていった。私は忘れられて、薬屋は繁盛した。大方の人がニセ薬に騙されているのだろうと思っていたが、通行人に尋ねてみると殆どの人が建物ごとニセ薬で出来た酷い薬屋だと知っていて、知らないのはお菓子の家に憧れる

馬鹿ヅラの小さな女の子だけだった。では何故薬屋は繁盛するのか。私との取引を停止したからだ。私の作る薬に比べれば糞のようなニセ薬の方が効くのだ。神社の側の製薬会社は大儲けした金で神社を囲む土地を全て買って自社ビルを幾つも建てた。本当の自社ビルは一つだけで後は私を警戒してのダミーだった。私は神社の杜に迷い込んだが杜は木を殆ど伐られて狭く、見回せばどちらを向いても杜を囲む同じ形のビルが見えた。そのビルの姿に迷っていたのだ。どのビルも海に面していてここが小さな島だと分かった。連絡出来る者も居ないので私はもう島から出られない。下唇を始終尖らせた色黒のずんぐりした製薬会社の社長が、僅かに残った髪の毛をモジャモジャと靡かせてビルに入って行くのが見えた。私の叔父さんが薬剤師の命を救ったのはまだ悪徳商法の団体が暴力一辺倒のやり方で恐れられていた頃の事だった。彼らは今はすっかり紳士ヅラしてよく分からない商売をしている。彼らがまた以前のやり方に戻る事を総会で決議して平気で人を殺したりするようになれば私にもチャンスが巡ってくる筈だ。社長はその私の考えを見逃さなかった。それを口実に社長は私のただ一つ知っている薬の製法の秘密を教えろと脅した。拒むと悪徳商法の団体の新入りのヒョロリとした男が私の家からそれを盗んで行った。私はそれに毒を仕込んでおいた。しかし幾ら待ってもその毒を飲んで人が死んだという話しは聞こえてこない。毒と薬は紙一重でそれはよく効く薬になってしまったのか。し

かしそんな良薬の話も聞かない。私の毒がどうなったかだけが何時まで経っても気懸かりで命を縮める日々を送らなければならない。（二〇〇五年六月一日）

１１（店屋の軒先に…）

店屋の軒先に季節外れの花を咲かせて垂れる枝が額に触れた。花を調べようと手を添えると店員が来て、凍らせてあったのを煮たんだ、と言ってそれ以上立ち入って欲しくない様子だった。旅行者が来て泊めてくれと言った。似たような風体の客は次々に来て店員がやっと最初の旅行者を断った時には店先に人集りが出来ていた。店員の目を盗んで何かしたが何だか分からない。気に掛かって分かるまで已めない事にした。店の商品に仕掛けをしていたのだ。別の一人の若い店員だけがそれを見逃さなかったが丸椅子に掛けて知らん顔している。隣の丸椅子に掛けてその店員の顔を覗き込むとまだ幼さを残していたので巧く丸め込もうとしたが店員は表情を変えない。年配の店員が来て指図すると若い店員は言われた通りに棚の商品の傾きを直した。馴れ馴れしい年配の店員は私の事を何でも知っている口振りだが全く的を外れている。若い店員が突っ立ってぼそぼそ呟くと私の事を見抜いていた。初めの店員がやっと客を捌き終えた

らしくこちらに突進してきた。私は棚に身を隠した。棚には子供が二人先客として居て私の身を隠す姿を不恰好だと笑った。棚の背面が鏡なので見てみると酷く老けて見えた。しかし鏡に映る子供の顔も老けた顔だった。若い店員が子供を見付けた。三人で隠れん坊をしていて見付かった二人はまた別の所に隠れに行った。私は若い店員を引っ張り込んでその顔を鏡に映させ、お前も老けてしまうんだ、と言ったが鏡に映る顔は若いままで代わりに鏡の方が古びて曇った。その店員が私服に着替えて通りを歩いて行く。しかしその店員はまだ店にいて腹の出た偉そうな男二人に熱いお茶を振る舞っている。同じ人間を作る装置が制御不能になっていて、私はそれを直す技術を持っていた。直すのが嫌で逃げていた。若い店員は給湯室に引っ込んでいた。私を見付けた事を警備担当に通報したに違いなかった。棚ごと縛って警備員はそれを店の外に持ち出したが彼らも自分そっくりの人間が欲しかったのかこっそり私を逃がした。代わりに腹の出た男の一人が連れて行かれた。その隙に若い店員が逃げていたので私は難所を幾つも乗り越えて何処までも追って気が付くと見失っていた、檻褸布のように擦り切れた若い店員を手にしていた。同じ人間を作る装置があればその擦り切れたものを使って幾らでも同じ人間を作れる。広い部屋で、これまでに登場した人間が全員集まって何故自分たちがここに姿を現さなければならなかったかが話し合われていた。私だけが酷く遅れてきたのは、ついて行けな

い程議論が白熱しているので分かった。しかしやっと話の筋が見通せると自分達が全部で何人なのかを言い争っている。私しか冷静に数えられる者は居ない。数え始めるとその数える私が、同じ人間を作る装置だった。途中で分からなくなって数え直す度に数は増え続けた。そして言い争っているのは全て同じ人間同士だと分かった。それならどれも答えは一人なのだ。そう言ってみたが私の声は掻き消された。それでも私は何度も同じ事を言い続けた。それを一々書記が書き留めていてその分厚いノートを奪って読むとどの頁も梅にちなんだ名前が絵と一緒に書かれてある。今は梅の季節ではないが私の力で今を梅の季節に出来る。そうするために私は部屋を出て熱風が吹き荒ぶ荒れ地を進んだ。辿り着いた場所で斧を拾いそれを木の幹に振り下ろした。熱風に掠れた大勢の声が今日の日付と時刻を唱え続けた。遠い部屋が目前に見えて来て言い争う人の数は段々と減りそれぞれが一人の人間になると誰も口を利かなくなった。知らない顔が一人だけ居た。しかし見覚えがあるようでもある。唸り声を上げて思い出そうとして分かったのは、ここに姿を現したのは全てニセ者で、一人だけがそれを知っていてここには現れなかった、という事で、その一人を私は何年か前までよく知っていた。　今も忘れようにも決して忘れられない者だ。（二〇〇五年六月四日）

１２（舟で何処かへ…）

舟で何処かへ行く途中だったが舟が壊れた。陸に上がると南に行けと言われて歩いて行くと見晴らしの良い所で村長が染め物をしている。村への道を尋ねたがはっきりした答えが返って来ない。村はもうなくなっていてそれを誤魔化すために染め物をしているのだと思えてそういう顔をすると村長は、ここが一番南だ、と言った。コンパスで調べるとまだこの先に南はある。それは間違いだ、何故ならこれこれだ、と筋の通った事を村長に言われてコンパスを信じられなくなった。仕方なく帰ろうとすると村長は、一人では無理だから已めた方がいい、俺の村の住人になるしかない、村にはあれやこれや色んな物が揃っている、と言った。その揃っている物を全て聞き出したがその中に私に必要なものは入っていない。だったらあんたが作ればいいじゃないか、村にはいい劇団がある、と村長に言われた。私は芝居の稽古をしていたが必要な物を手に入れる役ではなく不満が溜まるばかりで夜逃げする事にした。村長は何時もと違う酒が飲めていい気分になっている。小遣いの男が来て逃げようとしている私に、已めておけ、と言った。私に必要なのはこの小遣いの男だった。彼を見付けたからには私に主役が回ってくるのではと思っていると小遣いは、俺の役が奪わ

れるのは困る、と言って私の首を絞めようとする。私にはこの男が必要なのだからこれでいいのだと思えた。いやそうではない、これではいけないと思わなければならない、という声が遠くで聞こえたが巫山戯るような調子で私には頼れるものは何もないのだと思い知った。その私は村の外れに置かれ旅人は旅の安全を願って私の体を撫でた。それが私にはとても不快で、人を介してこっそり回していた金が大分貯まったので村を去った。村人達は私が村の金を盗んだと思って追ってきた。車で逃げていると村人の姿が直ぐ後ろに迫っていた。自分が何処に帰ろうとしているかが分かれば逃げ切れる算段は付く。ラジオを付けてその場所を聞き出そうとした。難しい字の読み方を言い当てる番組でラジオからその漢字が見えた。次々に出題される漢字に時々人の顔が混じってその場合には人の名を言い当てなければならない。人の顔が現れなくなり車にも乗っていない。どちらを見ても透き通っていて自分で自分の体を撫で回して何とか周りを不透明にしようとした。透き通った拡がりが捏ね回されて僅かに濁った。その僅かな濁りだけで周りは霧に覆われた。霧が晴れて細い真っ直ぐな坂道を登った。世界がその坂道の右と左に等しく分けられその二つの景色はそっくり同じでそれはとても醜い事に見えた。そうなるのは私が坂道を登るせいでつまりは私の醜さを映し出していた。坂は登る事しか出来ず登る程左右の景色は克明に似てゆく。自分の体も二つに分けられれば良いのだが、左右の景色が

似る程私はその両方から拒まれてただ一つの姿に押し込められた。坂を登り切ればば私は罪人として処刑されるに違いないが道は透明な空気の中を見通せない先まで続いている。その道幅がどんどん狭くなって綱渡りでもしているようで足元から目を離せなくなった。遠い先を見上げずに済むならその方が良い。私は氷の塊が溶けるように倒れ、殆ど鋭い刃になった坂道に私の体は二つに裂かれはしたがその右と左はまるで違った。似ていない左右二つの私が左右そっくりの景色の中に落ちてゆくと、醜かった景色が揺るぎなく美しくなりその中にぽつんと浮いた似ていない二つの私にだけ醜さが刻み込まれていった。それは決して拭い取れるものではないが私の中の醜さが表に出ただけなら諦められる。しかしそれが裏目に出て、その諦めるという行いの耐え難い醜さに身も心も切り刻まれた。思い出そうとすれば初めから美しいも醜いもない。（二〇〇五年六月七日）

１３（互いに偽名を…）

互いに偽名を名乗り合うだけの何処に住んでいるかも知らない相手と食事をする事になっていたが、果物の匂いが壁のように立ちはだかって約束の場所に

行けない。誰も居ない広い廊下に居て大きな窓から外を見ると窓の直ぐ下から遠くまでずっとただ濁って見える。見直すと遠くの方だけ澄んで見えた。私の体の皮膚だけが透き通った。これで果物の匂いの壁を擦り抜けられる。相手はもう席に着いていて私達は窓際の小さなテーブルを挟んで向かい合った。髪に短い小さく細長い角張った顔は取っ付き難そうだった。いきなり宇宙の本体についての話しが始まってしまった。私は相手に話しを合わせるしかなかったが何時の間にか私だけが果物の匂いについて話していて、相手は私にそっぽを向き宇宙の本体を直ぐ側まで呼び寄せてそれを相手に議論していた。果物の匂いが老人を若返らせる事がある、と私が言うと宇宙の本体は私の話しに身を乗り出してきた。宇宙の本体は、ここに来るまでに酷い傷を幾つも負った、寄る年波を思い知らされた、と言った。会食は私達とは関係のない理由でいきなり終わった。窓から濁って見えたのは海だった。そこに浮かぶ廃材の塊の上に私は乗っていて、それを澄んだ遠くから宇宙の本体が眺めている。そんな所に居て宇宙の本体は大丈夫かと心配になって見直すと、遠くの方は張り巡らされた電線がどんどん密集して脹らみ濁った海を圧迫し出した。私は海を助けようと廃材の塊をそちらに向けた。廃材はグングン電線の山に突き進んだ。私はそれを窓から眺めていたが結果を知ると面倒なので目を背けた。会食の相手とはまだ向かい合っていた。相手の顔が何処か変わっている。取っ付き難そうなのは相

変わらずだが、その頭の中に収まっているものが随分磨り減ってしまっているように感じられた。試しに話し掛けてみるとやはり空っぽな頭が思い付きそうなつまらない答えしか返ってこない。私は前々から博物館に通い詰めていてその知識を一人で捲し立てた。返ってくるのはつまらない答えばかりと思っていたが、それは私のひけらかした知識をそれ以上分解出来ないまでに細かくしてそれをまた組み立て直しているだけなのだ。つまらないのは私の知識の方で、相手はただそれを自動翻訳機のように分かり易く図解しているようなものだった。実に見事で感心しました、お仕事に出来ますね、と私は言った。こんな最果ての地にようこそ、と言って相手は初めて笑い死んで濁った海に葬られた。私は謀られたような不快な気分で席を立とうとしたが何年もずっと座り続けていたかのように足腰がすっかり弱って動けない。ここでこのまま死ねればここからの眺めを未来永劫停止させてその中に自らを葬れる。それを妨害したい者が居てもここには来られない。誰もここを知らないのだから。男が来て私の直ぐ後ろの席に着いた。目付きの鋭いボーイが注文を取りに来た。二人は料理の素材やら酒の種類やらの細かな違いを話し始めとうとうボーイは客の男と向き合う席に着いて二人は体が臭くなるまで延々議論し続けた。私はもうとっくに死んでいて砂丘を歩いていた。見渡す限りの砂粒より私のようにそこを歩く死んだ者の数の方が多かった。人だけでなく様々な死んだ生き物が砂丘を大体同

じ方に歩いていた。砂丘の向こうは濁った海でそこに辿り着いたものから海に溶けていてそれがまた海を濁らせているのだが、私がそこに辿り着くのは気の遠くなる程先の事に違いない。雨期になって死んだ生き物の他は全て腐って砂の中に染みて一つの匂いの中に溶けた。しかしその匂いは偽物で実は匂いを装った地の果ての景色だった。他のものが皆死に絶えた世界を私は一人だけで生きていなければならなかった。（二〇〇五年六月十日）

１４（乾燥した丘に…）

乾燥した丘に水道を引く工事が始まっていた。水道管は見当たらず木を組んで小さな橋を幾つも架けている。それに携わっているのは男と女が半々位で皆同じように整った顔をしている。何かが間違っているが指摘出来ない。橋はまだこれから本格的な工事をするための足場なのか。医者に行って話しをすると、あれは水道工事ではない、彼らは新しい病気なのだ、と言われた。うっかり近寄れなくなった私は材木を刳り抜いた中に隠れて現場に入った。見掛けない老人が近付いて来て私の潜む材木を不審そうに撫で回し、これは駄目だから直ぐに燃やそう、と言った。間一髪擦り抜けて乾いた地面に潜った。先客が居て、

空から舞い降りてきたがあの年寄りに攫われそうになったんで隠れている、と言う。あの年寄りが監督なのか、年寄りも病気なのか、と尋ねると、恐らくはそうでないらしいという答えなので私は橋を架けている人達の方に出て行った。橋は木でなく木の色をした石で出来ていて、それは私の得意分野だったので直ぐに彼らの一員になって働いた。空から舞い降りたヤツを見ただろう、としつこく尋ねられたがしらを切り通した。すると、自分達は皆性病だがお前それでもいいのか、と言われ性病持ちには整った顔立ちが多いと聞かされていたので私は仕方なく白状した。彼らが私の教えた所に行って地面を掘ると手足の欠けた石膏像が出て来てそれに触れた者から水のように消えていった。何十年も楽をして生きてきた事がすっかり顔に出ているむっつりした市の担当者が来て、この工事はあれこれの基準に違反している、と彼らの消えた方に向かって紙を読み上げた。私は人を探していて役人なら知っているのではと思い尋ねた。役人は一言も口を利かず市役所への道を教えてくれた。その通りに行った積もりだが道に迷った。店に入って燃えやすい服を探した。目当ての服が見付かるとその直ぐ脇にもっと燃えやすい服が見付かる。売っているのは服ではなくＣＤで燃えやすいものが次々に見付かるのも尤もだ。試聴している者の横顔が水道工事をしていた整った顔に似ていて、居たたまれずに私は手近の服を掴んで店から走って出た。道の両脇にずらりと石膏像が並んでいて見覚えのあるものを

順々に探して行ったが見付からない。それは採寸が間違っているからだ、と見掛けない老人に声を掛けられた。燃えやすい服を捨てたが捨てても捨てても石膏像から弾き返される。喉が渇いてきて老人を探した。老人は石膏像の選り抜きの一体を嬉しそうに磨いている。これを月に返したいんですね、と私は言ったがもっと明るい星の方が良かったかなと思い直した。老人の汚い手に撫で回される石膏像はキラキラ輝いたが私には不快でそれに唾を吐いた。その自らの行いの方がもっと不快で私は何処に行っても相応しくない人間なのだと思った。老人が背を向けていて私はその小さな背中を撫でた。老人の体は粘土のような手触りの丸い塊になった。その手触りだけが世界から遊離して私はその遊離した手触りとしか係われなくなり私も世界から遊離するしかなくなった。私の背中に何かがゆっくりと縫い付けられた。手を後ろに回して爪を立てたが背中の何かはすべすべして指から逃げ回る。翼かも知れない。黒々としたべっとりとした翼が思い浮かんだ。飛ぶためでなくひたすら真下へと私を突き落とすための翼。しかし私は何処へも落ちていない。石を組む仕事で使った難しい計算をして落ちない理由を突き止めた。その計算した紙を見ると真っ白だった。ちょっと角度が変わると真っ黒だった。それをどう考えて良いか分からないのが不快に感じられないのが不快だった。それは私が私から遊離した世界の手触りを持て余しているからだ。その不快でないのが不快なのだった。不快からも遊離

させられているのは私が不快にさえ相応しくない人間だからでその理由を導く計算式もちゃんと手に入れていた。計算するのに白でも黒でもない灰色の紙を探し回った。紙でなくても灰色の余白なら何でも構わないが、遊離した世界を織り成すのは極彩色とはっきりした白黒だけだった。（二〇〇五年六月十三日）

１５（山頂の展望台で…）

山頂の展望台で轆轤を回して壺を作ったが失敗で空気が漏れる。姿を変えて本人と分からなくすれば罪が軽くなりもう何人かは赦されて山を降りたらしい、という話しが広まっていた。壺一つ作れない私には縁のない事だとそっぽを向いたが私以外は列を作って変身振りを評価して貰おうと順番待ちをしている。並んでいる中に少しも姿を変えていない者が何人も居て彼らは早晩処刑されるに違いない。気が早いが処刑を見物しようと見晴らしの良い所に行った。展望台がなくなっている。山頂のあった所も若草に覆われた緩やかな丘に姿を変えていた。草と草を結んで追っ手に備えていると見知らぬ男が来て、巧く変装したな、と言った。私は知らない異国の服装をしていて男が顔見知りに見えてきた。しかし男が笑いながら変装を解いて素顔を晒すとそれはまた見知らぬ男に

なって私に襲い掛かってきた。男と私は組み合ったまま若草の斜面を転げて行った。立ち上がると男の体はすっかり磨り減って僅かな骨とそれにこびり付く肉片だけになっている。しかしそれは立ち上がる時に踏み潰した小動物の死骸だった。その仲間が私を取り囲んで牙を剥いている。向こうの丘を軍隊が埋め尽くしていた。琴の音の方に向かうと小動物達は道を開けた。琴を鳴らすのは襤褸を着た捕虜で私を見ると、あなたは王様で見付かれば殺されますよ、と言った。私は私を捕らえようとする兵士を粘土の像を次々に蹴飛ばすように容易く退けて逃げた。琴を担いだ捕虜が後を追ってきて私の武勇を一くさり褒めてから、実は私が王でお前は家来だ、と言う。私はそう言われてしまっては仕方ないと彼は琴を木の車に乗せて縄を付けて引いた。壺の作り方を知っているか、と彼はだみ声で尋ねた。王様らしくない声だと思って、壺が何かも知らない、と答えた。壺の品評会場には壺に変装した囚人の姿が何人も混じっている。私の素性を彼らに明かされては困るので身を伏せて会場内を素速く動き回った。壺作りの王様と呼ばれる者が講演をしていた。壺は二つの事柄から出来ている、と言っているのが聞こえる。私はその次の言葉を待たずに、それは骨と何やらだ、と声を張って言った。それを王様が聞き咎めた。私はその何やらが答えられなかった。壺の中に隠れていた者達が壺を割って躍り出て私は追われた。一つのものは一つでなければならない、と言う考えが浮かんだ。それが答えだっ

た。形勢は逆転し私が彼らを追い棒で壺を叩き割るように彼らをやっつけて回った。最後の一人を追い詰めてゆくと展望台の中で私は刑を宣告されていた。ジャンパーを着た裁判官が、お前の犯した罪は交響楽のようだ、と嬉しそうに言った。私は鉄のように重く冷たい楽器を次々に投げ与えられたが演奏どころかただそれを受け止めて体力を消耗させられるだけだった。演奏出来ないという理由で私は背中を棒で撲たれた。何回撲たれなければならないのだろうと思っていると陽の光りを受けた草の匂いをプンプンさせた男が刑法の本を見せた。気の遠くなる数字が読み取れて、前以て分かっていればと悔やんだ。前以て分かっている奴なんていない、と刑吏は言った。いや殆どの奴等はそれを前以て肝に銘じている、何をするのも退屈でぼんやりしてた奴だけがここに送られて来るんだ、と私は反論した。もう一度尋ねるがお前は壺の作り方を知っているか、と刑吏は言った。一つのものは一つでなければならない、と答えると刑吏が用意して来た轆轤が暴走して法廷をぶち壊し、糾われる縄のように粘土が長々と繋がって若草に覆われた丘をのたうち回った。私は笑いが止まらず大蛇に跨る気分でそのザラザラした背中を滑って行くが、大蛇のようであるにしても布で出来ていて鯉幟のように中を風が吹き抜けているだけではないかと危険を感じ、ここは一つじゃない、まだまだ幾つもあるんだ、と叫んでいた。数が多過ぎる刑吏は小動物のように散ったが裁判官だけは私に耳を貸さず日焼けした

顔を青ざめさせて黙り込んだ。青い空が若草の丘を押し潰すのだ。透き通った骨と肉と何やらが、大蛇がどうひっくり返っても届かないこちらへと急いで転げ込んだ。（二〇〇五年六月十六日）

１６（時々鳥の…）

時々鳥の世話をしに来る。来ると何日か泊まってゆく。その鳥の数を数えていたが退屈なのを我慢出来なくなって仮病を使って寝込んだ。鳥達はさっさと私の世話など当てにしなくなって自分で餌や水を探しに行き何の支障もない。それを薄目で見ていて疑念が晴れた気がして起き上がった。ベニヤ板にペンキを塗ったばかりの大きな年表が壁に掛けてある。直ぐ側の海の中の魚から見た海の歴史を記した年表で、その魚の郷土史家は私と知り合いだったがもう干物になっていて私はそれを少しずつ削っては鳥の餌にしていた。しかし浜辺に行って本当にそうか確かめるべきだ。ついこの間もその知り合いに会いに海に入って行った気もする。崖っぷちからコンクリートの急な階段を降りてゆくが途中で疲れて動けなくなりそうで諦めて戻る事にした。振り仰ぐと崖の凹凸に目を奪われ、ただ降りた階段を登るだけなのに道に迷った気分になった。その階

段が鳥の糞で真っ白で崖の中に埋もれている。階段を逸れて崖を登るしかない。動物達が崖をぴょんぴょん登り降りしていてそれを真似るだけだと踏み出した。左足を高い方に右足を低い方に踏ん張ったきり動けなくなった。大声を上げると芝居の稽古で他の劇団員達も崖にへばり付いて声を張り上げていた。台本らしきものといえば白い砂糖の入った大きな硝子の壷で彼らはそれを傾けて抱え、少しずつ砂糖を零しながら科白に身振り手振りを付け加えた。私にはとても出来ない。私は全くの端役なのだ。ポケットをまさぐると崩れかけの角砂糖が一個だけ出て来たが直ぐに砕けて足元に零れた。足元には火傷を負って飛べなくなった鳥が一羽優雅に寝そべっていて、私を助けに来た、と言った。飛び方を教わり崖から鳥のように飛べるのを期待したが、そうではなく鳥の鳴き真似をするとそれが滑り易かった崖の表面を粘っこくする呪文になるのだった。劇団員達の科白は全て私への陰口に変わって益々大きく張り上げられ、私はその言葉の嵐の中をグラグラしながらも切り抜けて何とか崖を攀じ登った。金貸しが待っていて、利子だけでも払え、と言う。しかし私の方がその金貸しに金を貸したのではなかったか。金貸しは気まずそうに、金は何時でも返せます、その証拠に私の財産を見て貰いましょう、と言って崖を避けて直ぐに浜辺に降りた。砂の替わりに大量の金属の塊が転がっている。金貸しはその色ごとに金属の名前を言い分けて、どれも貴重なものです、と言った。その一つに指を擦り付け

るとまだ乾いていないペンキが指に付いてゴツゴツした石の表面が見えた。金貸しは海に入っていて水の中の橋脚を撫で、もう橋脚は全て並んだし橋桁も順に据えられている、直に対岸までの橋が架かる、そうなれば金は幾らでも入る、と言った。私は岩場に腰を下ろし弁当を食べようとしたが箸箱が糊で貼り付けられていて開かない。鳥か魚が助けに来てくれる筈だと待つ内に海風に当たり続けた体は冷え切った。対岸の上空に巨大なスクリーンが張られ映画が始まるらしく更に待った。日が暮れ掛けて映画が始まったようだが私はもう大分流されて殆ど真横に近い斜めからスクリーンのチカチカした輝きに目を凝らすだけだった。隣の観客は掏摸で私のポケットの中の金の懐中時計を狙っている。対岸に向かう橋の上で画家が私達を見下ろして絵を描いている。映画は終わり全ての経緯はその画家のキャンバスに描かれた。私は勇気付けられ最後の力を振り絞って隣の観客の男の胸倉を掴んで絞め上げた。力を込める程観客は大量の金属になり、音を立てて増え続けた。金の生る木を手に入れたのだが利子を払わなければならないのは本当は誰なのか。そんな事より魚に出逢ったらどんな顔をして何をどう尋ねるかが問題で、私の頭の中は魚から上がる利益の計算で一杯になった。（二〇〇五年六月十九日）

１７（動き回るのを已めない…）

動き回るのを已めない初老の男だけには何事も起こらない。偶々にでも彼と隣り合わせた者は大抵何か嫌な事に巻き込まれる。私はそれを知っているので彼が近付いて来るとそれとなく離れる。そうして私には何事も起こらずに済むが逆に彼が私から離れて行こうとすれば私は先回りして彼のする事に気を付けていなければならないので、何時までも私は彼から離れられない。彼が危険であるとは分かっていて却ってそのために彼を恐れる気持ちを捨てられずずっと彼と即かず離れずで居ようとしてしまう。小さな机の上の小さな砂時計を分解している大きな男に初老の彼は後ろから近付いていた。その部屋にも私は先回りしていて彼が現れると部屋の隅に立ち誰からも姿が見られていない振りをした。机は窓の方にすっと滑ってその勢いで砂時計のバラバラにされたものは窓の外へ放り出された。初老の彼はもう居なくなっていた。見失ってしまってはもう彼の後を追えないので私は砂時計の部品の後を追おうと、窓から身を乗り出す大きな男とその行く先について推測し合った。男の言うには、自分は去年から畑をやっていて葉虫で困っている、農薬は重過ぎて自分には向かない、砂時計が役に立つと聞かされて分解したが果たして葉虫を駆除出来るだろうか、もし出来るなら自分は砂時計の行く先を知っている筈だ、との事だった。

私は男の説明の筋が通っているのに感心しその話しに乗らなければと思った。地図を描いて貰って畑に行くとまだ荒れ野を気紛れに掘り返した程度で種時きどころか土作りさえ出来ていない。初老の彼がさっきより髭を白くして静かに現れた。国を憂うる色の襷を掛けた若者達が畑の周りを取り囲んでいて彼らには畑が国に見えるらしく私が畑の惨状を説明するとあるべき畑の姿を彼らなりに思い描いて大人しく砂時計か或いはもっと別の何かを探しに行った。初老の彼は一人畑の真ん中に居座り土をいじっている。今回初めて私は彼から離れようともしなかったのに何の災難も降り掛からなかった。彼は恐るるに足らない。私は高値で売れそうな商品を持って頑丈そうな造りの建物の方に歩いていった。建物の駐車場でそれぞれに子供を引き連れた凶暴な感じの同じ位の歳の女二三人が強風に逆らって大声で話している。私はその一人が初老の彼の息子の嫁であるのを直ぐ側まで近付いていきなり気付いた。向こうも気付いたに違いないが女は気付いていない風を装って目を逸らした。それは私には思っても見ないとんでもない災難だった。有った筈の池がすっかり埋められそこに看板も表札もない民家か公共施設か分からない四角い建物が建っている。池がなくては私の商品はゴミだった。開発するまでに注ぎ込んだ資金と苦労を思うと頭がぐらつき、そんな私を救ってくれそうな坂を下った方の真っ黒な建物に駆け込んだ。中では光りが作られていた。出来立ての光りを一つ分けて貰い替わりに私の商

品を引き取って貰った。そこを出て懐を覗くと光りは旅行用の歯ブラシの中に収まっている。初老の彼が何処かから私を見ているのが感じ取れた。今度は彼の方が私の先回りをしようと私の周りをクネクネと歩き回っている。農道が終わり急に家がびっしり建て込んで道は狭く折れ曲がるばかりになった。どの家にも初老の彼が知らん顔で待ち伏せしているようで私は行き止まりにならないのを願うだけだった。初老の彼は昔、指を鰻に咬まれたのだ。もっと早くにその彼の弱点を思い出していれば私は簡単に彼との係わりを捨ててさっぱり忘れてしまえただろう。そのここに至った経緯を短く纏めて行き止まりの冷たい壁に書き付けた。その間にも壁がボロボロと剥がれ人の皮を剥いだような破片が足元で山になった。どの家にも初老の男はもう待ち伏せていないが何の慰めにもならず、光りは期限付きだったのか歯ブラシは毛先を磨り減らして殆ど棒切れだった。書く事がなくなれば手ぶらで戻って来た怖いもの知らずの若者達にどの家も明け渡されて私一人が立ち去るしかない。書き終えていない振りをそう何時までも続けられる筈もない。（二〇〇五年六月二十二日）

１８（お前の体の…）

お前の体の中に何か変なものが入っている、それを外に出さなければならない、と声がしたので振り返ると人一人を呑み込む事も出来そうな流線型の穴が開いている。声の主の両手は私の腹の中を探っている。その流線型の穴が声の主で、それが大きな目を刳り抜いた形に見えてきた。その盗み取られたヌルヌルした目玉を奪い還すための戦争に召集され、私の何かの能力が見込まれたらしくそれなりの軍職に就いていた。見回しても部下はいない。私の失策で全滅させてしまつたのではないかと心配になった。もしそうなら流線型の穴の餌食にされたのだ。しかし穴は遠ざかっていてそれを追って酷い悪路を選ばなければならなかった。裂かれた青竹が行く手を遮りそれを掻き分けなければならない腕も脚も血塗れだった。何が私にこんな道を選ばせたのか考えてみると男が私一人だからだ。私の知る限りの男はみんな女になってしまった。人災か天災か分からないが彼らを襲つた或る恐怖がそうさせたのだ。私独りだけが人一倍鈍感だつた。もうかなり遠くまで進んでその災難の噂すら届かない地方に入っていた。教室に迎えられると数学の時間で血塗れの体が微積分の教材に持って来いらしく教師も生徒も熱心に授業に取り組んだ。私は穴の事を思い出してそれを伝えると彼らはまさにその穴の形を求める計算式を展開していた。教師も生徒も汗をだらだら流しどんどん痩せ細って行く。ここは戦場なのだ。男ばかりで、計算式は何処までも続きそうだった。その式の書かれた黒板が蹴破られ

あの声の主に違いないとその姿を探したが影も形もない。教室は大混乱に陥って制服を破り捨てた者達は高校生と見えていたが大人の大男ばかりで互いの筋骨隆々の体に見惚れて殺気立ち見境のない殴り合いになっていた。私は窓から見下ろせる湖の方に逃れ遊覧船に乗ってその教室の光景を眺めた。殴り合う男達が羨ましくて堪らなくなり陽光煌めく湖に身を投げようとしたが、そういう派手な事はこの地方の景観にそぐわないと乗り合わせた客に止められた。その客は、年中色々な躑躅を咲かせる観光名所にこれから行くんだ、と言った。誘われるままにそこに行ったが閉鎖され荒れ果てていた。観光客は扉の鎖を引き千切って中に入りちょうど見頃の躑躅を探して回った。花など咲いている筈がないと私には思えたが行く先々の思い掛けない所に観光客は上手に満開の躑躅を見付けた。私はそれに対抗するように軍の学校で使っていた教科書を優しく花びらに触れるかのように開き、そこに書かれてある様々な軍事作戦と躑躅の花を比べ合わせた。段々と暑くなってきて熱帯植物が見付からなくなり見付かっても萎れている。観光客は熱病に罹って熱帯の植物がびっしり詰まった温室で汗びっしょりで悶え苦しんだ。別の教科書を開くと様々な兵器の性能と使い方が載っている。私が熱病に罹らないのは機械に飛び切り詳しいからで、それで私は軍の中で一目置かれ部隊を任されるまでになれたが何時も機械で頭が一杯でどんな状況でも機械中心にしかものを考えられない。声の主はそれを指摘

したかったのだ。私は植物園の温度と湿気を管理する巨大な機械室に押し入り、轟音を立てて動いている機械の減速装置を探して回った。狭い中に入り込むと室内は恐ろしく暑い筈なのに上から氷の小さな塊がバラバラと落ちてきた。私はどうやらボーッとした頭でも減速装置を働かせていたのだ。氷はどれも尖っていて腕や脚のやっと塞ぎ掛けた傷口に突き刺さる。何とか脱出しなければならない。落ちた氷が綺麗に敷き詰められて機械の隙間に道を作っていて私はそこを堂々巡りするしかないが、教科書通りの軍事作戦を忠実に遂行していると も思えた。戦争のそれがまだ言葉によって記されてもいない古い時代から受け継がれてきた意味を何故か理解していた。（二〇〇五年六月二十五日）

１９（川に行ったのに…）

川に行ったのに泳げなかった人達が戻って来た。川はちょっと背伸びすれば草原の中に見えた。淀んでいて流れを目で捉える事は出来ない。泳げた人は数少なかったが対岸で大声を上げている内に増えている。対岸の草叢に隠れていた連中が起き上がっていた。戻って来た人達は庭に集まっていたが彼らの草の匂いが立ち籠めてしまって家には入れない。家の中は泥の匂いが染み込んで誰

も居ない。奥の壁が壊されその先に張り出す小さな部屋が造られていた。私はまだ普請中のその部屋に居て庭の人達を家に入れなければならない。塩を撒けばだれが泥の匂いを吸って家の中の匂いを取り除けるのは分かっていたが塩の入った壺を取りにじめじめした板の間を通って行くのが嫌だった。外が大分暗くなったので誰にも見られないように這って外に出た。庭の人達は未練がましく皆川の方を向いている。私はその後ろをぐるりと回って樋を伝って屋根に登った。庭の人達は私が家から居なくなったのに気付き庭に居座って酒盛りを始めた。川と反対方向の道から熱燗を盆に乗せた裸足の子供達が時々駆けて来て酒が切れる事はない。屋根の瓦が熱くなり火傷しそうだ。川の水が音を立てて動いている。川の方は特に暗く耳の熱さがその音を聞き取っていた。屋根を伝って川の直ぐ側まで近付けたがその私の姿は見失われた。寒さで目が覚めると川の中に居て腰まで水に浸かり対岸へ歩いて行こうとしている。小舟が浮かんでいるがとても速く動いて行く。影のように見える舟の上の胸をはだけた人物が襟を掻き合わせると川底から水が噴き上がるように水が動いた。私は自分一人だけが犠牲者で泳げた人も泳げなかった人もただ私に危害を加えるためにそうしたのだと思えた。濡れた服が重いのでそれを脱いで泳ごうとしたが舟が側まで来ていて肩を強く押さえ付けられた。私にはそれが私を助けるためか私に引導を渡すためか分からない。私の事も川の事も知らない遠い外国の人でなけ

れば分からないだろう。その外国人と連絡が取れたが何を尋ねてもその言葉はぶるぶる震えるばかりで聞き取れない。私は覚悟を決めて舟に乗り込んだ。びしょ濡れの体が舟の上をゴロゴロと転がった。艫に来て上体を起こすと舟の上は私独りだった。泡立つ川面に掌を浸すと震えるだけだった言葉がはっきりしてきたが知らない外国語だと分かるだけだった。しかし段々と私がその外国人になっていて自分で分からない言葉を喋っていた。川に腰まで浸かった裸の男が刃物を振り回しながら近付いてくる。私は舟底に腹這いになった。片耳を舟底に押し付けると川底の震えが聞き取れた。川底の更に下は外国と繋がっている。しかしどうやったらその外国へ行けるのか。刃物を振り回す男が乗り込んできて外国へ行く方法を二人で研究しようという事になった。泳げた人も泳げなった人も私にこの研究をさせたくてそうしたのだと思えてきた。私は犠牲者ではなかった。草原の陽はなかなか暮れず、柔らかく暖かい風がねっとりと流れて来てとても静かだった。研究など已めて眠ってしまえばこの景色の中に溶け込んで行ける。裸の男は刃物を手放して疾っくに眠り込んでいる。しかし私は眠れなかった。ずっと眠れずにきたのを思い出した。泥の匂いのする川の水で目を洗えば不眠に効き目があるというので私は遠い外国から遥々やって来たのだ。泥の匂いを嗅ぎ取ろうとしたが無駄だった。川が終わり舟はぬるりとした赤土に乗り上げた。その赤い地面に色々な食い物が並べられ白衣の人達が取

り囲んで摘み食いしている。食べ合わせの悪いものばかりで彼らのしている事は全く理解出来ないが外国に辿り着けたかどうかは分からない。私は箱詰めにされ切手を貼られまた外国か或いは本国かへ送られるらしいが泥の匂いのする水からは遠ざかるばかりな気がする。（二〇〇五年六月二十八日）

２０（耳の病気の…）

耳の病気のお蔭でそれまで行き来出来なかったあちらとこちらを行き来出来るようになった。途中その必要もないのだがあちらとこちらの境目に立ち止まってみたくなった。境目だと分かる印は何もない。歯ブラシを隠し持っている子供を掴まえた。子供はそれで境目を磨きその僅かな段差を更に人目に付かないようにしていた。歯ブラシを取り上げると子供は歯を剥き出して奇声を発し四つん這いで挑み掛かる姿勢を取った。その後ろでは沢山の人夫が砂埃の舞う中を働いていた。そこではまだあちらとこちらが繋がっていなくて色々と不都合な事が起こる。しばしば足を滑らせてあちらとこちらの裂け目に落ちて二度と帰って来られない。職員が駆り出されて子供を捕まえに来た。子供は私から素速く歯ブラシを奪い姿を眩ました。私は疑われて子供の代わりに捕らえられ

た。しかし捕り手達はあちらとこちらを行き来出来ないので彼らから逃げるのは訳なかった。鏡を張り詰めた僅かに傾いた床に車の通った跡がうっすらと見えた。古馴染みの者が帰ってきたのだ。浮き浮きした気分でその者を探すとその姿を鏡の裏側に見付けた。小さくて黒々として薄っぺらで形は定まらなかった。私達は鏡越しにでも抱き合おうとした。初めて会った時の、私がポケットの中のパン屑をその者に与えた事を思い出した。その者は穴から出て来たばかりだった。それ以来その者は私と一緒では全て私に頼り切ってただ私に纏わり付くようになった。鏡の裏と表もあちらとこちらならそこを行き来出来る筈なのに、私達の間は少しずつ離れている。鏡は見せ掛けでそこは石をピカピカに磨き込んだだけだった。古馴染みの者は消えた。私は石の床を鏡に変える方法を探しに出掛けた。そうして鏡の割れた破片をせっせと集めて回っていた筈だが、手元には硝子のように透き通ったものだけが残った。それは柔らかくて硝子でもない。何なのか教わろうと荒れた寺の門を潜った。坊主が一人だけ居て私に詩を読むように迫った。あちらこちらの言葉は全く違う。その両方が私の頭の中でこんがらがって詩どころか会話さえ真面に出来ない。柔らかく透き通ったものは手を濡らしている水だった。何故手が濡れたのか。体を固くしてひたすら記憶を辿った。しかし直ぐに記憶を当てにしたのを後悔し、どうしたら自分を悪く見せられるか考えた。悪者の振りをして脅せば坊主から言葉の使

い方を引き出せそうだ。坊主は体をくねくねさせて手足の関節を外し涎を垂らして馬鹿の振りをして抵抗した。子供が坊主と私の駆け引きを少し離れた所から見ていて、私はその子供の目から坊主と私の姿を眺められた。ここはとても良い所だと思えた。私達三人は寺の周りに土嚢を積み上げて余所者が入って来られないようにした。しかしもう余所者は寺の本堂の屋根を壊して平らな足場を造り、そこに大きな太鼓を運び上げてそれを打ち鳴らしていた。私は我慢出来ずに耳を塞いだ。積み上げた土嚢で自らを寺に閉じ込めていた。あちらもこちらもない。夢を見ていただけで寺も夢の一部だった。私はその夢から脱出して一本だけ伸びて行く細い鉄の線を行く先も分からず辛うじて辿っていた。鉄の線は蹲る丸い背中に行き当たった。声を掛けると、その者はもう一人の坊主だと名乗り後ろ向きのまま私の姿を見ないで私が誰で何をしたいかを言い当てた。その背中が私に相応しい働き場所を示す標識に見えた。私はそれを後ろから包み込むように抱きしめ、掌の濡れたパン屑をその小さな口に与えた。帰ってきたのは私の方だった。パン屑を頬張りながらその坊主を名乗る者は今日が何の日かを私に告げた。その言い分からは、私と誰かの血の混ざる匂いを少し嗅ぎ取れただけで何の記憶も呼び覚まされなかったが、全て本当だと信じられた。坊主を名乗る者はずっとあちらの言葉だけを使っていたので。（二〇〇五年七四月日）

２１（三つ並べた…）

三つ並べた光りについての講義が行われていた。それにしては受講生の姿がない。まだ講義の練習をしているだけだが受講する予定の者達が消えてしまったという連絡が入って講義は中止になった。講師は疲れ果て三つ並べた光りを片付ける気力も湧かない。光りだけが残されると、三つ別の方向に影が落ち先へ先へと伸びて少しずつ向きを変え何処か一か所で結ばれた。机の上は浅い水槽で水が満ちその水は机の下に滲み出ている。それを止めなければ水の重みで床が沈み込み壁も柱も歪んで部屋の形を変えてしまう。部屋は私の頭で、中には脳ミソが詰まっている。その脳ミソだが影も形もない。探すとそれは水槽の中の昨日の金魚の糞のような小さな塊だった。こんな事は止めにしたい、なぜこうなったのか、とそんな風に頭を抱えてしまったからだ。頭を真っ直ぐに起こすと雲を突き抜けた上に頭が出た。白衣を着た小柄な痩せた研究者が口に銜えた管を吹いて炎に細工している。私はもうその研究を完成させていて今更何をやっても答えは出ている。研究室はボロボロで研究のために生活を犠牲にしているのも分かった。私は気の毒になって研究の方向を変えてやろうと庭に出

て石を採集して回った。結局使えるのは同じ形の三つの石だけだった。その三つだけが温かかった。戻ると研究者は出掛けていて、窓から眺められる高い山の麓にその姿が見えた。山に登って山頂の火を採って来ようとしているのだ。それももう私によって研究済みなのに。審査官達が入ってきた。研究成果の検証に来たのだが道端に生えている草花をそれぞれ手にしている。草花について詳しいだけのこんな畑違いの連中に審査されたんじゃ堪らない。いやそれはそうだがその方が丸め込むのも容易い。審査員同士で次々に議案が提出され難しい議論が始まった。私は別の庭に敷き詰められた白い砂の数を数えていた。その砂の一粒一粒に研究成果が活かされていたが、それは私の研究ではなくあの小柄な痩せた研究者のものだった。私の知らない新しい炎を山頂で発見したのだ。三つ並べた光りが堪らなく恋しくなって講堂に戻った。至る所で水漏れがして何処もびしょ濡れだった。光りはなくなっていたが直に帰って来ると思えた。演台の傍らのドアを開けるとエプロン姿の学生が料理を作っている。殺風景な台所の飾り付けをしようと提案すると学生は料理ではなく炎を作り始めた。私は引き寄せられた。学生が不敵な笑みを浮かべて私の顔を見た。その態度が耐え難くて私は倒れ込んだ。床は抜けていてその下の部屋にふわりと降りた。見上げると半透明の天井越しに学生が作った炎が三つの光りに分かれて煌めいる。ドアを開けて隣の会場を覗くとレスリングか腕相撲かの決勝戦の最中だっ

た。当然遅れた私は不戦敗で代わりに見張り役をやらされた。三つの光りが入って来た。それを告げると決勝戦は中止され観客も全員逃げた。がらんとした会場は見れば見る程拡がって行くようで、無限の可能性が伸び拡がる新天地を見た気分になり、光りを写した三枚の写真を飾って新しい研究を始めた。呼ばれた部屋に入ると審査員達はまだ議論を続けている。相手の言った事を聞き落として議論は脱線するばかりだし、呼ばれたにも拘わらず私は彼らの議論の対象から外れていた。帰り道で夕刊を買って読むと研究中止の大見出しが目に入りこれで自然界の中の三つ並ぶものの研究は十年遅れると記事の調子は酷く憤っている。それ程の事でもないのに、記者は何も知らないのだ、と失望はしたが私の頭の中で三つの炎がじゃれ合って消えた。それも失望すべきなのか。新天地の記憶だけがゆらゆら揺れて消えそうにないが、それが三つの炎を消したとしたらそれは禍か福かまた別の事か。（二〇〇五年七月七日）

２２（ひんやりした所に…）

ひんやりした所に俯せになっていて、睫毛に触れる小さな土塊を指で弾くと微かな音がして目の前の石垣が崩れた。起き上がると転がった石が全て何処か

に消し飛んで小さな店が現れた。入ると薄暗い本屋で女の店員が男の客をトイレに引っ張り込もうとしている。店員に監視されて客が用を足すのが見えた。牛か馬がしたような大きな糞は反り返って誰かを侮辱するためのベロに見えた。侮辱されるのはその糞をひり出した客だった。店員はしゃがむままの客の尻を何度も蹴った。私は棚と棚の間の人が擦れ違えない程に狭い通路を抜けて本屋の裏に出た。車三台が入って全く隙間のない狭い駐車場で無理に車の脇を擦り抜けようとして車とブロック塀の間に挟まれた。助け出された私は通りを見下ろせる二階の喫茶室で得意先に記念切手を売り込んでいた。その得意先の顔は本屋の女店員にそっくりだったが、その香水の鼻に付く強い匂いを嗅がされると別人だと思い込めた。通りが雨に濡れその湿気に香水の匂いが分解されて私の思い込みは打ち消された。女の顔は土気色で尖った目だけが輝いた。周りの客には私が悪意を持って女の生気を搾り取っていると思われている。席を立ってトイレに入った。本屋の客が先に中に居て便器の中からせっせと黒いものを掴み出して床に撒いている。壁も天井もみるみる汚くなった。見直すとその本屋の客は男の姿をしたドアで、私はそのドアを裂いて隣の部屋に入った。壁も床も天井も照明も赤く私はその有害な色を避けようと帽子の鍔で顔を隠したが、そうしたばかりに前が見えなくなって部屋の中をぐるぐる歩き回らなければならなくなった。あちこちで二人一組の男達が低い椅子に掛け額を寄せて密談し

ている。どれも一人は役人でもう一人は政府から仕事の許可を得たい商売人だった。私はそんな話しは聞き飽きていて耳を塞いで蛇のようにクネクネと床を這っていた。やがて交渉は一段落し、弛んだ腕と脚を剥き出した汚い感じの赤い服の女が何人か入って来て男達に入り交じった。私はこっそり会社に電話し記っ切手の替わりに古い壺を勧める方が商談が纏まるだろうからそうしたいと上司の許可を得て女の恰好をして男達に壺を勧めた。男達は初めは興がって笑っていたが段々不愉快な顔付きになって、これはどこ製だ、と私に尋ねた。メードインジャパーン、と答えると私の英語を訳せる女が一人も居なくて私は呆れて壁に張り付いてだんまりを決め込んだ。女の臭い髪がその私の顔に押し付けられた。その中の一本の髪だけが襟元から私の服の中に入って生き物のように直に肌を這い回った。服の下に私は小さな壺を幾つも隠していて、それをその女の髪は蛇が卵を呑むように順に呑み込んだ。男達はずっと古い時代の別の本に引用されてだけ後世に残された文学作品について論じ合っていて、女達は話しに付いて行けず皆むくれていた。私は仕事の行き帰りに古本屋でその作品を探していた。何も出来ずにいる女達の腐った泥のような匂いに堪え切れず、私は彼女達に男を蕩かすようけしかけた。その文学作品は色んな糞の事を真面目に書いていて名高いのだ。その知識を武器に押したり引いたりすれば男なんてどうにでも転がせる。私は女達を全て追い払いその武器を自ら用いる事にし

た。そうして役人は全て落とした。商売人はコソコソと逃げ帰った。役人達を裸にし契約を大声で反復させた。壁ばかりで窓が一つもないと見えていたが赤いカーテンを巻き上げると窓から昼の強い陽が差し込んだ。裸で並んで正座する男達の体は色白で皺皺で果たしてちゃんと役に立つかどうか疑われた。これ以上こんな奴らと係わっても碌な事はないと外に出ると検問に引っ掛かった。私は余りに貧しくて片腕を切って売った金を警官に渡してやっとそこを通して貰えた。（二〇〇五年七月十日）

２３（気候のせいで地面は…）

気候のせいで地面は柔らかい土と硬い土が交互に現れて縞模様を作る。しかし一年暮らしてみたが来る日も来る日も曇り空で気温も少し寒い位なまますっと安定していた。気候のせいだというのは俗説だった、と思っていると足元の柔らかい地面がくねくねと半透明に盛り上がって前が見難くなった。一年寝起きを共にした同僚はお茶の時間に拘る人でお茶菓子が切れている事で頭が一杯だった。私は、お茶菓子がなくても地面がお茶菓子みたいだからいいじゃないか、と言ったが同僚は姿を消していた。お茶菓子を買いに行ったのではなく盛

り上がる地面が怖くなったのだ。では何故私は逃げようともしないのだろう。縞模様だったものが柔らかい地面だけが一か所に集まって大きな三角地帯を作ったが、そこで盛り上がるのか沈み込むのかはっきりしない。私は大きな巻き尺を肩に担いで走り三角形の手前側の一辺の長さを測っていた。途中道を間違えて隣の地域に迷い込んだ。円柱を輪切りにしたような同じ大きな石が並んで曲線を描いている。その最後の石の影に隠れてギターを抱えた同僚はじっと譜面を睨んでいる。私は乱視でその譜面が柔らかい部分と硬い部分の縞模様に見えた。それは譜面の形を借りた論文だった。同僚は気象観測を私一人に押し付けてこっそり地質と気象の関係を研究しその成果を独り占めしようとしているのだが、私は促されるままその表紙に献辞を書いた。それから二人で酒を飲む事になったが何処へ行けば酒が手に入るか分からずただ辺りをうろうろした。この一年にはなかった寒さだった。雷が獲物を狙うように陰惨に響き鳴った。この辺りは大昔、歴史に載っていない国の首都でちょっと地面を掘れば往時の官庁の刊行物が出てくる。しかしうっかりそんなものを掘り出せば間違いなく死罪だった。空と地面からの危険に居たたまれず、私は仰向けになって背中を丸め畳んだ手足をぶらぶらさせて赤ん坊になりきった。同僚はそれを呆れ顔で見下ろしながら突っ立っていて雷に打たれ、焼け焦げながら、これまで隠しておいたがお前は私の子供なのだ、と言って死んだ。大昔の首都の賑わいが一瞬

甦った気がした。家に帰って障子を閉て切って何の物音もしない中でじっとその最期の言葉を考えようとしたが、報告書を書かなければならないのを思い出して考えるのを已め、物凄い勢いで書いた。読んでみると間違いだらけだったがそれより何故そんなに速く書けたかを知りたくなって一年暮らした測候所に戻った。傾いた立て看板が一つあるだけの寒々とした光景が広がるばかりの所へ何人かが走り寄って来て私を同志として迎えた。古墳の地下へ続く階段を降りて柩の納まる部屋に行こうと勧められたが、私だけがそこに決して入ってはならない出自である気がして断った。報告書を改めて読み直すと間違いだらけなのは読み方を間違っていたからで、全て正しい事が精確に書かれてある。それは初めから終わりまで雷についての二千年以上に亘る記録だった。私は自らがその雷の末裔であると確信した。私を同志として迎えた者達は興奮した口振りで現代文明が魂を汚染しているだの社会習慣が人々を虐げているだのを私に吹き込もうとした。しかしまた家に帰って静かな中で良く考えてみれば、その現代文明を私がその雷の末裔としてたった一人で支えているに違いないのだった。同僚がお茶の時間に拘った理由が分かった。濃くて苦いお茶を何杯も飲んだ。それから血を採って調べようとすると血はシャボン玉になって飛んで行って、遠く暗い空で割れては雷を落とした。私はその雷光を目にする度に怖じ気がし死にたくもなったが、そうなってしまう事に当惑もした。雷光の一筋一筋

がそれを眺めるばかりでそれに少しも近付けない。逆立ちをすると自分にはもう子供を作る能力がないのが思い出されてじわじわと幸せが込み上げた。（二〇〇五年七月十三日）

２４（獣が爪を…）

獣が爪を研ぐようだった。そんな事をして来た。人の殺し方を何通りか覚え込まされたかも知れない。もちろん全く別の事だったかも知れず、そう考えるとそれはフラワーアレンジメントか何かだったようでもある。しかし花を活けるのと人を殺すのとにどれ程の違いがあるのか。初めて見た光か何かにただ目がるのと人を殺すのとにどれ程の違いがあるのか。初めて見た光か何かにただ目が眩んでいるだけだと言い聞かせようとした。言い聞かせられたかどうか分からない。何故なら私は何でも出来るような気がしていた。自らに言い聞かせたからどうかなど取るに足らない。四つ角に立っていた。人を攫って行く商売が流行っていて行列が出来る程で、世の中には何処かへ攫われて行って身を落とした連中が大勢居るのが分かる。私は傭われ者でこの商売の邪魔をしに来る者共を近付けないのが仕事だったが酷く疲れてもいた。攫われて行く嬉しさに友

達同士気兼ねなく歓声を上げている者など見ると神経に障る。高いビルの壁の時計を見上げると私はもう殆ど二十四時間、通りに立ちっぱなしだった。長針が真上を指すとその先は時間の外だった。商売も何も全ては私を時間の外に攫って行くための罠だったか。通りすがりの者の首根っこを捕まえて身代わりに立てると、そいつはやはり二十四時間の外に攫われた。私も無傷という訳には行かない。心臓を取り巻いている神経を剥ぎ取られた。その裸の心臓に引き寄せられて、私を人攫いに紹介した女社長が金箔の扇をヒラヒラさせて近寄ってきた。彼女は、人攫いが横行するせいで不動産の相場が下がりっぱなしだ、と嘆いた。何か出来る事はないかと尋ねると、寒い北の方から今日着いたばかりの若者を一人面倒みてくれないか、と頼まれた。そいつはうっすら赤い髭を生やしていた。それとそっくりの髭は女社長の頬の下にも生えている。息子を持て余していて私に押し付けようとしているのだ。私はそいつをビルの屋上に連れて行って突き落とした。見下ろすとそいつは地面に叩き付けられても形状記憶物質で出来ているように元の形に戻ろうとしている。鐘の音に振り返ると二十四時間とその外が交わろうとしていた。ということは、ここは二十四時間の外でさえなかったのだ。私はこんなものばかりが見えてしまう事に嫌気が差して騒がしいカフェに飛び込み、興味本位なだけの根も葉もない噂話を全身に浴びて骨の髄まで根も葉もない浅薄な人間になろうと努めた。貨物船を飛行機で輸送す

る話しが耳に入ってきた。どうせまた新手の人攫いだ。私はその会社の弁護士である社長の相談に乗らなければならないが、ただ出任せの噂話を吹き込めば良い。業績は低迷し社長は出処進退で悩んでいた。今こそ研いだ爪を使う時で私を止められる者は居なかった。そんな私の振る舞いによって噂が噂を呼び、今にもっと悪い事が起こると人を迷わせた者程もてはやされた。横から余計な口出しをするようですがね、と身を引いてすっかり丸くなった元社長が話し掛けてきた。そうして連れて行かれたのは、彼がまた新たに興した会社の実験室で、中の空気が恐ろしい程澄んでいて驚かされた。こんなに空気を綺麗にしてしまっては実用向きの物は作れませんね、と私が言うと社長は笑いながら今までになかった実用向きの装置を次々に発明していった。実用向きでないのは私の方だった。そう気が付いて私は人の殺し方を教わった所に帰る事にした。奇抜な形の香水の瓶が社長の呉れた餞別で私はその中に入れられて送られて行く。瓶は船底にびっしり詰め込まれ触れ合ってはカチカチ音を立てた。実際に私は香水なのかも知れない。噂話には香水が付き物でやっと私も実用向きになれそうだが、今度こそ本当に人を殺してその殺し方を体で覚えるのだ。飛行場に到着してみると実験室とそっくりに恐ろしい程に空気は透き通っていたが、空気を綺麗にしたのは私達自身だった。

その空気は面白いように人の肉を断った。（二〇〇五年七月十六日）

２５（競売所での仕事を…）

競売所での仕事を終えて急いでマラソン大会に参加した。折り返し点を過ぎて順調に走っているとコースは公園の中に入り、そのコースを見失った。うららと暖かい日で家族連れがあちこちでピクニックを楽しんでいる。道を尋ねると彼らは言葉だけは同情的だがのんびり笑っている。体が解くなって眠りこけた。目が覚めると笑い皺を顔中に刻み付けた坊主がうろうろしていて、法要を営む事にした、とよく通る声で言う。親戚の何人かはもう喪服を着込んでいるが私はランニングとパンツだけの下着姿でそれをどうにも出来ない。礼服を探して家の中を走り回っていたが箪笥の角を曲がるとマラソンコースを走っている。前に誰も見えないのでトップかも知れなかったが、また公園内に入り込みコースが見付からないまま走り回るしかない。公園の縁の岩場を駆け上っていコースに復帰し競技場に入ってゴールした。７着だった。コースを見失ってなければ優勝出来ていた。審査員が笑いながら近寄って来て手首を掴み私を何処かへ連れて行こうとする。私は競売所での私の素行が暴かれるようでその手を振り切り、知り合いの男の娘が待っているような気がする公園に逃げ込んだ。

誰も居らず日が暮れかけていて風が冷たい。コンクリートの小山にペンキ絵を塗った滑り台に何度も頭突きをした。法要は終わって坊主はすっかり肩の荷が下りたようで満足そうにしているが、話し振りなど何とも素人臭い。私は服を着てはいたが、私一人が喪服ではなかった。まだ全員席に着いたままでその並び順が血の濃さにも長幼にも従っていなくて何の規則に拠っているのか気になる。私の席は花の側で、一つぽつんと離れているように花に半分隠れていた。私はその席に着いた憶えはない。電報が届いて読み上げられる前に私は当然そこを退出する資格のある者として会場を出た。電報は競売所からだが競売所は今日限り閉鎖されたのだった。私のいない会場内でその噂が話されているのを廊下で聞き取り私は安心して公園へ走った。すっかり夜で砂場が小さく裂けていてそこから湧き出す水が金色に輝いた。額に手を当てると割れていて、その金色の水は額から流れる私の血だった。公園に寝泊まりしている老人の痩せた腕に支えられて安宿に運び込まれたが、そこは見掛けだけ宿屋で中はがらんどうだった。その静まり返った真ん中で恰幅の良い男二人が膝を突き合わせて熱心に密談している。老人に凭り掛かったまま近付こうとすると隠れていた警備員が先ず老人だけ外につまみ出し、私を別室に連れ込んだ。競売所で扱う事になっていた色々な物を乱雑に押し込めた倉庫だった。考えてみれば私もその競売に掛けられる物品の一つなのだ、いやそれは願望に過ぎない、などと考えて

いると床の端の板が外れて、床下に水の流れる溝を覗き込めた。そこへ金色の水が落ちて行くが、それは溝の水と混じって明るくなるものと暗くなるものに分かれた。何故そうなるのか警備員に尋ねられて私の考えをすらすら述べると、警備員の代わりに男二人が側にいて一々証拠を上げて私の説を否定した。私は病院に戻りたくなった。坊主と法要の相談をしたのも病室でだった。がらんどうに思われた建物の中は病院で、病院に居る私に帰る所はない。男二人は私より若いが白髪が目立つ。マラソン大会の審査員がやって来ると、それにも警備が一人付いた。男二人は二人の警備員と共に枕を並べて死の床に就いた。四人が死ぬと大会の審査員は坊主でもあり、私に手伝わせて床下の溝に四体の屍を流した。それから私達は二人切りでがらんどうの真ん中で膝を突き合わせた。病院は競売所でもあった。私と向き合っている者はどのようにも姿を変えられるが、審査員と坊主と医者にはもうなれなかった。私が競売所の人間なので、私の前では競売所の人間にもなれない。しかしそうしてただ何にも姿を変えずにいるのは、謀を巡らした果てに一人だけ死なずに済んだ私の、誰にも見せてはいけない姿を露わにするためではないのか。（二〇〇五年七月十九日）

　人を何人か集めてそれぞれに白い大きな布を纏わせて動き回らせればその地域を好きなように操れる筈だったが、何かが欠けているらしくそれらしい事は起こらず行き詰まって望みを失い掛けていた。それでもその同じ事を繰り返しては何の手掛かりもないまま欠けている何かに思いを凝らすしかない。使い込み過ぎて白い布が透けてきた。集めた人が一人も居なくなった。彼らの食い散らした木の実の殻だけが残って殻の内側を覗くと小さな文字が書き込まれてある。その思いの外滑らかな文に導かれて私は絵のような景色の中に入り込んだ。立て札に墨で和歌が一首記してありそこは何処かの鄙びた歌枕だった。その歌からして詠み手も私と同じ望みを抱きそれを叶えられなかったのだ。しかしもう一度読み直すとそれはただの浅ましい恋の歌で詠み手は相手の仕打ちを深く恨んでいるだけだった。ただ人を集めれば良いのではなかった。こんな醜い心情の持ち主ばかり集めて白い布を纏わせても効果がないのは当たり前だ。今更分かっても何処から遣り直せば良いか見当も付かない。苦情が来るので木の実の殻を箒で掃いて箱に入れ、それを持って行ってくれる人が居るという連絡が入ったので荷札も付けた。皆騒々しく走り回っていてなかなかその人が掴まらない。何処から何処へと、と尋ねると一人は、南から北へ、と言い別の一人は、北から南へ、と言う。私はその二人を会わせて相殺し、南へ行くのも北

へ行くのも已めさせた。しかし二人共後ろにそれぞれの集団を負っていて、何よりもその利益を実現する責務を全うしなければならない。そういう訳で結局荷物は放置され、私はそれを蹴倒して自ら始末を付けるしかなかった。晴れて身軽な身になった私は、生まれ付きの澄んだ心を持った徳の高い人間を装って自らを売り込んだ。私を買ってくれる者が居て私は更地に連れて行かれ木槌で地面を突き固める仕事をさせられた。一緒に仕事をしていた連中は私とは反りが合わないらしく皆已めていって私一人になった。私は好き勝手に仕事が出来て大いに満足を得、ここに私独りが信じる神を祀る廟を造る事を夢見た。勿論その神は、宇宙の一切を私独りのために成り立たせるだろう。しかしそうなったところで叶わなかった私の望みが叶う訳でもなく、それに替わるものに仮初めの充足を得るだけだ。段々と心の置き所がなくなり冷静さが失われて行くのが自分で分かった。地固めどころか、地面を穴だらけにしていた。その穴は見掛けと相違して白い布と同じ働きをしそうだった。ただ白い布は人が纏えたが、穴に人を嵌め込んでも仕方ない。結局また何が欠けているか分からないまま望みは失われるしかなかった。それから荷を担いで売り歩いたが何を売っているかも知らなかった。人に尋ねられるとただ歩いて来た方向を指差した。その方向に目を遣った客達は、その目をキラキラさせてそちらに走って行ったがその後の消息は聞いた例しがない。期末が近付いて棚卸しのため同業者が広場に集

まった。荷を開けるとどれも綺麗に空で同業者達は皆嫌気が差して廃業した。私だけが空の荷の秘密を知っていてこれから私は利益を独り占めに出来るのだ。そう確信してその荷を担いで売り歩いても客足はぴたりと途絶え商売を変えた。墨の材料の煤を売る仕事でその煤をどうにかすれば白い布や更地の穴と同じ働きをしそうだった。その煤をこっそり色んな所に持ち込んでその隠れた効力を突き止めようとした。医者の所に持って行って一つ分かった。その煤を使えば見付けられない病気が見付けられるらしい。医者は患者を次々に診断しその病気はみるみる広まった。度々病院に呼ばれて煤の話しをさせられる。その効用を宣伝している内に話しは段々と逸れ、もっと別の煤の効用がある筈だと説いてしまう。患者達は途端に嫌がって顔を背けるが、それでも私には得るものはある。嫌がる全ての患者に白い布を纏わせて更地の穴に嵌め込めば、その地域の事など綺麗さっぱり忘れられるとは思えたし、そうなれば煤が本当は何のために用いられなければならないかを考えずに済むとも思えたので。（二〇〇五年七月二十二日）

27（三人で部屋を…）

三人で部屋を見に行く事になった。四階でエレベーターを降りるとその部屋で、空いていると思っていたが私達をそこへ案内した不動産屋の家族が住んでいる。重々しげな右のドアを開けると特注品のような立派な机と椅子が部屋の真ん中にあり窓はなくどちらの壁の棚も本で埋まっていた。そこは不動産屋の奥さんの部屋で私は近所でよく彼女の顔を見掛けた。挨拶しても黙って通り過ぎる人だった。部屋はその奥さんの書斎と後は大きな部屋が一つだけで、そこでは同じ年の人大人が集まって卵料理を作っていた。中に一人だけ以前話しをした事のある人を見付けたので二人で話し込んだ。その人は私に外も見ておくように勧めた。鋼鉄の重い扉を開けて外に出ると天井の低い狭い駐車場が二重三重に入り組んでいてそこを抜けると住宅街だった。犬を散歩させている人に物珍しそうな目でじろじろ見られ、私は独りきりで知らない土地に居るのが不安に思えてきた。振り返ると案の定マンションの建物は遠ざかって戻る道が分からない。少し広い道に出たがその両側は何羽もの駝鳥の走る姿を描いた高い壁でその奥はシートに覆われた高層ビルの建造中だった。その道が急に混み合った。同じ年頃の同じような顔付きの大人ぱかりでこの近くの大きな会場で何かの催しがあるらしい。彼らと同じ方に行っても仕方ないので人の流れに逆らった。すると彼らはその場で両手を拡げて踊り出し、私の行く手を遮った。彼らと同じ方を向くと踊りは直ぐに已んだ。行けども行けども会場に着かない。

道幅は端が見えない程拡がっていて、人と人の間隔も拡がり彼らは皆杖を突いて私を取り囲んだ。中で一番の古顔が出て来て、引き際が肝腎だぞ、と言った。私が、それは不動産屋に言え、と反論すると私はその不動産屋に助けられて駝鳥の絵の壁の脇まで引き戻された。道を歩く者は居なかった。駝鳥の走る草原が燃えていた。少しは節度を弁えろ、と私は不動産屋に忠告した。不動産屋はそれを、家庭の問題を咎められたと思い込んで奥さんの姿を探した。私はマンションに帰り着ける道を見付けて奥さんと一緒に部屋に戻った。卵料理が出来上がっていて私は席に着いた。燃える草原の話しをすると居合わせた人達はその責任の所在について議論を始めた。不動産屋に責任が押し付けられそうになると私が必ず話しの方向を変えた。そうしている内に鋼鉄の扉を擦り抜けて炎が床の端を舐めていた。不動産屋の奥さんが他の者に気付かれないように水を掛け続けたので火はそれ以上は燃え広がらなかったが、床板の焦げる匂いは段々と酷くなった。不動産屋を糾弾するパンフレットが部屋の中で刷られていた。その不動産屋の名前は私のものだった。以前話しをした事のある人にその印刷ミスを直すように言ったが、もう手遅れだからお前はここに遣って来たんじゃないのか、と嘲笑われた。ここはマンションの一室ではなく巨大な客船の客室で一度も燃料を補給せずに運行しているのでまだ誰もそれに気付いていない。窓が開けられパンフレットがばら撒かれた。居合わせた者達の体が一つに纏め

られた。その一つになった顔を見ると、私を苦しめるためだけに生き続けている者の顔だった。しかし実際そんな者とこれまで一度も顔を合わせた事はない。直ぐにも縁を切りたい、とは言いたかったが、どう逆手に取られるか分からない。辺りは恐ろしく静かで巨大な客船なのに私達二人しか乗り合わせていない。窓からの景色に海の色がない。地上のあれやこれやが流れ出て海面はすっかりそれらがらくたで覆われてしまった。胸の痛みは燃えるようでそれが客船の燃料だった。相手の方から縁を切ってくれたのか、私は一人になっていた。陸の色で埋め尽くされた海を、藻掻くように泳いで行く人達の姿が何人も見えた。彼らは直に力尽きて次々にがらくたに紛れて沈んで消えたが、その姿の途絶える事はなかった。臆病な私には思いも寄らない行為だ。私を苦しめるためだけに生き続けている人の顔が、がらくたの間に一瞬覗いた海の色に映り込んだ。その溺れる姿が私そっくりに見えた。（二〇〇五年七月二十五日）

２８（砂時計の砂が…）

砂時計の砂が三分の二落ちた所で止まってしまって横にされた。拳程の硝子の塊の中に砂と空洞は密閉されて、見る角度によって部屋の様子を映す硝子の

表面に隠されてしまう。その部屋に山が崩れたと知らせが入った。今回も予想屋はそれをちゃんと予想していて直ぐに隣の三角形の部屋に移った。そこで私は三角形の壁から落ちたタイルを張り直そうとしていた。予想屋はその部屋に一つしかない円い窓から山を眺めた。私はその隙にタイルの裏を覗いた。そこには私のよく知っている人の夢が乾燥して張り付いていた。その人と私とは抜き差しならない関係に違いなかったが、それが何だかは思い出せなかった。その夢の中に目を遺ると決してその人の見る筈もない夢だった。私はタイルを張り直すべきか迷った。本来その人が見るべき夢に直せるならそうした方が良いがそれが出来ないなら壁の中に埋め込んでしまうしかない。しかしそうしてしまってはその夢はもう直せないし壁全体に何か悪い影響も与えそうだ。知らん顔をしている予想屋の注意を惹こうと私は態と何を言いたいか分からないような事を言った。予想屋はそれをこの三角形の部屋の成り立ちについて尋ねられたと思い、私よりももっと何を言いたいか分からないような事を言った。それでも聞いている内に私にはそれが海の水の成り立ちについて語っていると聞こえてきた。そして山が崩れたのもその海の水が鍵を握っていた。私は予想屋の秘密を暴けるかも知れないと思ってはっきり山の崩れた訳を尋ねた。すると予想屋の言う事が私と誰かとの関係を事細かに語っていると聞こえてきた。それによるとその誰かは流れる水のようで私はそれを止める堰なのだった。三角形

の部屋がグラグラと揺れるのはそれが高い所に宙吊りにされているからで、円い窓から下を覗き見ると草一本生えていないだだっ広い殺風景な灰色の石庭が拡がっている。私が流れる水のような誰かを堰き止めて造った石庭だった。しかし見直すと石庭にしては石が少な過ぎる。幾つあるか数えようとすると一つもなくて、ただ灰が敷かれただけの空き地だった。石を探しに行くと言う者達が現れたが予想屋は反対した。予想屋の予想がまた当たるなら探しても石は見付からない。私は腹の中から青や緑の小さな原石を取り出して予想屋に気付かれないようこっそり彼らに渡し、これを目印に探せば良い、と言って彼らを送り出した。予想屋は私のした事を予想出来なかったのだからもう予想屋ではない。腹の古傷が痛み出すと石庭には大きな石が次々に運び込まれた。しかしどれも庭石にはどうもそぐわない。予想屋だった者がレスキュー隊のようにロープで庭に降り立って石の審査を始めた。すると三角形の部屋に一人残った私が予想屋だった。窓の景色に掌を翳すと山は崩れていなかった。壁はタイル張りではなく半透明で触ると柔らかくふやけていた。その壁に触れているのが私ではなく私と何か関係のあった誰かになって、更にその誰かの見た夢の中身になった。その夢の中身が円窓を閉め隣の部屋とのドアも閉めると、予想屋だった者の目から半透明の三角錐の建造物が見上げられるだけになった。予想屋はそれを予想していたのだ。私は少し出過ぎた真似をした罰としてかタイルの一片

を胸に抱えて余り目立たない庭石の中に埋め込まれた。予想屋は石の値段を予想して回った。その行為が嵐を呼び石庭に敷かれた灰が乾いて大量に舞い上がった。嵐が過ぎると何処も彼処も灰色の半透明の世界になったが庭石だけはどれもくっきりと輪郭を浮き立たせその表面はどれも陽に焼けて褪色しているのが分かった。私はそれを誤魔化すために灰色の空気に紛れて石と石をくっつけて回ったが、段々と何時終わるか分からない苦役ではないかと思えて来る。ばったり予想屋に出くわすと視界が透け、その後を付いて行くと周りは誰も彼も予想屋になって私の全く知らない話題を巡って予想し合っていた。その意見は直ぐにぴったり合致するので話題の次々に取り替わって行く速さは凄かった。私独りがその速さによって前へ前へと押し出された。その勢いで、止まったままの誰かとの関係を崩しに行くのだと予想してみたがグラグラして当たりそうにない。（二〇〇五年七月二十八日）

２９（机を並べた…）

机を並べた部屋で何人かが立って口をパクパクさせている。口の動きを順に追って行くと鍵の形が浮かび上がる。秘密の鍵を伝授された人達がその精確な

形を確認し合っている。一人だけ違った口の動きをする者はそれを記憶するに熱心でなかったか、そうでなければ秘密の鍵を盗みに来たのだ。しかし誰もそれを気に留めない。猫が窓から覗いている。その猫の方が余程怪しい。猫の仮面を被ったビデオカメラだ。電話でそれを通報しようとした。しかしもしも秘密の鍵が有害なものなら猫の味方をするべきではないか。などと考える前に電話が見付からない。鍵のせいだ。その鍵を手に入れなければ電話機も見付からない。猫が捕らえられ化けの皮が剥がされた。私は生来病弱である振りをして彼らに近付こうとした。病室で寝ていると秘密の鍵を伝授された一人が来て私に色々と話し掛けて来た。私は話しには耳を貸さずその口の動きだけにじっと目を凝らした。その口の動きは古い歌を次々に詠んでいて私はどの歌も字余りなのが気になって頭が痛くなり本当に病気で寝込む羽目になった。うつらうつらしていたが病室に人が増えてくるのは分かった。彼らは私について言い争った。問題なのが私を招き入れた事なのか私が病気である事なのかは分からない。何れにしろ私は厄介者で責任のなすり合いよりどうやって私を処分すべきかに議論は移っている。私はポケットを探って皺くちゃの金券を取り出して渡し彼らの印象を良くしようとしたが受け取る者は居ない。誰も居なくなっていた。泥絵の具を何処からか調達するかを話し合う声が微かに聞こえる。私は死んでいたか、死んでいないとしても死人であるとは見做されていた。病室がそのま

墓になって私は葬られるらしい。体の何処かから水が零れて床を濡らす。段々と体の形が変わりその輪郭の入り組んだ凹凸ばかりが目立つようになった。まるで鍵だ、と思ったがただ鍵の事が頭を離れないのでそう思えてしまうだけだと思い直した。壁に絵の具が塗られると壁は直ぐに腐蝕して冷たい風に吹き払われた。寝ている場合ではない。私達は大きな円卓を囲んで会食していた。私以外は全て敵だがそれはおくびにも出さず、彼らの腹の内を探って彼らを出し抜く方法を見付けなければならない。色々探りを入れる内に彼らが皆郵便ポストから郵便物を取り集めて来る仕事をしているのが分かった。私がそれを知ったのが彼らに知られて私は孤立した。手紙を投函しても見分けられて私のものだけ捨てられてしまう。彼らを出し抜く手段は全て塞がれた。耐え難くなって立ち上がり鳩の鳴き真似を繰り返した。鳩は助けに来てくれなかった。私は彼らに絞め殺された。その屍肉を取り分けるには彼ら全員の手が必要で彼らは一列に並んだ。それが鍵だった。彼らは彼らに号令を掛ける者をじっと待った。私を助けに来た者が統率者のような口振りで近付いてきたが消えた。何人も同じように現れては消えた。鍵に翼を生やす事が出来たなら私は助かる。消えた者達の輪郭だけを呼び戻してそれを一枚ずつの羽根にして束ねて行けばよいのだ。私は並んでいる者達から顔を背け、声には出さず口をパクパクさせて誰かにその翼の拵え方を掻い摘んで説明した。その私の口の動きを遠くから眺める者が

壁の絵を仕上げた。それは見掛けは古い時代の誰かの生前の姿を描いた一枚の絵だが見る者が見ればその家の系譜を読み取れた。ただ読み取れても声に出される言葉では伝わらず口の動きに頼るしかない。その口の動きが鍵に翼を生やした。翼は翼だけで飛び去り、鍵は残った泥絵の具の中に埋め込まれた。それきり鍵の事は気に懸けなくなったが私は絵筆を手放さず、その家の壁一枚隔てた隣に天寿を全うするまで住んだ。（二〇〇五年八月四日）

３０（あちこちで水嵩が…）

　あちこちで水嵩が増している。雨はずっと降っていない。何年かに一度そうなると決まっていて運悪く丁度その時期に当たってしまったとの事だ。川や湖だけなら分かるが神社の裏の小さな池まで溢れそうなのは何故か。コップからも泉のように水が湧いて出る。抜かりなく準備は整っていて、溢れる水はそれ専用の溝に流れ込むようになっているので辺りが水浸しになったりはしない。ただ造花が本物の花のように見えてしまう。元々どれも生花だったと錯覚させる。実際花びらを抓むとどれも生花の感触だ。人形と生きた人間を見誤る事はない。しかし人形と分かるのはどれも小さなもので等身大の人形の姿は全く見

掛けなくなった。それは人間と区別が付かなくなったからではないか。鞄を開ければこの地方の地図が入っていなければならないがなくなっている。水に流されたのだ。溝を辿って広い水路に合流する所まで来た。丁度水路の点検中でいつもなら流れ着いたものが止められるのだが、そのための網が枠ごと外されている。作業員達が粗末な弁当を食っている。仕事をやり掛けたまま休むな、と非難すると彼らは口々に食事が酷すぎるからだと反論したが、その内の一人だけは冷静な態度で、お前が地図を探して来たのは知っている、と言って紙を私に見せた。そこには、もし地図が流れて来たら必ずそのまま下流に流すようにとの通達が小さな読み難い字で書かれている。あなたは誰か、と尋ねるとその者は、仕事のない時は占いをやっているが地図の行く先は占えない、と答えて私の鞄に目を遣った。その鞄を開けると濡れた地図が鞄の内側に貼り付いている。しかし水のせいですっかり地形は変わってしまった。人を惑わすこんな地図は燃やした方が良いという事にはなったが、水ばかりで火がない。私は易者と二人で火を探しに出掛けた。何昼夜掛けても火は見付からない。行く先々で私が呼び込みをして易者に稼がせ何とか食い繋いだ。相談者の一人から旧家の箱入り娘の話を聞いた。その娘が火を扱うらしい。易者はそれを聞かされると急におどおどした様子になりインチキ占いの化けの皮が剥がれて袋叩きにされた。私一人でその家を訪ねると屋敷は透き通っていて冷たい風が吹いてい

るだけに見える。その風に手を翳すとその方向の地面にだけ造花が敷き詰められた。手を引っ込めるとそれらは消えた。冷たい風は乾いていて景色の何処にも、水は気配すらない。水もなくもし自分が人形だったらこの先どうなってしまうのか急に心配になると屋敷に人影が現れた。半ば透き通っていて見掛けからして人形だった。その口から私が人形である事が滔々と述べ立てられ、私はそれを眠気を我慢して聞き続けなければならなかった。その言葉は冷たい風に乗って近隣へ広まった。私は四つん這いで冷たい地面の中に腕と脚をすっかり埋められていた。透き通った屋敷全体が景色の中からベロリと剥けて飛び過ぎた。その跡はと見ると等身大の人形の中に埋め込んであった人間のはらわたが、びっしりと押し詰められて積み上がっている。私の腹の中のものも掻き出されてその中に放り込まれた。そうして私は外見も中身も人形に戻れたが、それを声にしなければ粉々に砕け散ってしまいそうだ。他の数え切れない程の人形がその屋敷跡を取り囲んで四つん這いで蹲って何か同じ掛け声を掛け合っている。見回すと北の方角以外は高い山脈に囲まれてここは一日中陽の当たらない盆地の底だった。掛け声ではなく呻き声だ。それを避けて北へぐるりと迂回して来た使者によって国の命令が伝えられるのだった。そのために、剥き出されたはらわたの山はまた透き通った屋敷に覆われたが、悪臭までは覆う事が出来ず風すらそれを避けて風は已んだ。使者が一礼すると箱入り娘が手に小さな火を携

えて現れ、使者は灯明を手にした。命令が読み上げられ古い法律は破棄された。囲んでいた人形達の呻き声が已み、私の他はその姿も消えた。私だけは人形でも人間でもないからここに残れたのだ。その証拠にと、人間には決して描けない私の地図を、こっそり隠し持って使者は帰って行った。箱入り娘もまた人形でも人間でもないが、人形や人間よりも私からもっとずっと遠い別の何ものかに違いないのだ。私にはどうしてもそうでなければならなかった。（二〇〇五年八月七日）

３１（熱帯の海で…）

熱帯の海で捕らえた大きな魚を生きたまま運ばなければならないが問題は水槽を置く船室の温度と湿度だった。温度は分かるが何故湿度なのか。その魚は水が苦手で気が向けば何時間でも水から上がって過ごすのだが棲息地と同じ湿度でないと鱗がカサカサになって剥がれてしまい売り物にならないからだ。それにしても異常な暑さと湿気だ。息をするだけで胸が悪くなる。船は港に着いたらしい。仲買人が船室に入って来て、色が駄目だな、と魚を触りながら言った。いやそんな筈はない、温度も湿度もちゃんと一定に保ってきた、と言い返

したが仲買人はバカの相手をしている暇はないという顔で黙って出て行った。船室を出ると船は半分焼けていた。航海中火事に遭ったらしいが魚の世話で手一杯で気付かなかったのだ。その火事のせいで船室の温度と湿度が設定値を遥かに超えてしまっていたのだ。それでも不幸中の幸いで怪我人が一人も出なかったというのでパーティーが開かれた。あの仲買人が乾杯の音頭を取り、この会場は防火装置の最新のものを備えたばかりなので安心だ、とおどけた調子で言うと会場から笑いが起こったが、笑ったのは何のパーティーか知らずに紛れ込んだ連中だけだった。私は景色の佳い場所があると聞くと矢も楯も堪らずそこへ出掛けてしまうんですよ、と仲買人が私に柔らかな物腰で話し掛けてきた。先程の船室の中は異常で、私の顔を見て憶える余裕はなかったらしい。仕事で何度も行き来した海峡の朝焼けの様子を話すと、仲買人はこれ以上嬉しい事はないという顔をしたがそのまま他の客の中に紛れた。私は家路に就いていた。行けども行けども薄明るい山道だが道に迷ったかどうかは決めかねた。その山道が段々ネバネバネバしてきて私はやっとあの仲買人の計略に嵌められたと気付いた。ネバネバした土はもうしつこく足にこびり付いて、ここから戻ってみても途中足は道に張り付いてどうにも動けなくなるだろう。道から逸れようとすると道の両脇をヌルヌルしたものが盛り上がって乗り越えられそうにない。道ごと切断した。振り返ると道は生きているようにクネクネとのたうって、それに連れ

て切り口と切り口は少しずつ離れて行く。深夜で物音一つしない。何も見えなかったが、直ぐ先で神事が行われるのを私は知っていた。大きな切り身の煮魚が奉納された。匂いで熱帯産だと分かったが、それはその魚の取り出された脳の匂いだった。その匂いに惹き寄せられる内に、その魚の脳が私の頭の中に割り込んできて私の脳を食い始めた。引き戸を開けて社に登ると私は神として祀られる位置に立たされた。体が自ずと弾け床の上を跳ね回った。宮司に取り押さえられザラザラした軽石を頭に擦り付けられた。頭蓋まで削られ、その中で増殖した私の魚の脳がその軽石の表面の穴に埋まり込むと、それは小さな子供に渡された。その風習は熱帯でも行われていた。何度も見て知っていた。私の魂は熱帯に飛んだ。残された体は大きな魚の姿を晒すしかなかった。その脳が幾つもの軽石によって全て取り出されると美しい朝焼けが現れた。軽石は七個あって柔らかい子供の手から手へと投げ渡され、朝日を浴びて燃えるようでフワフワと宙に浮いても見えた。その様を立体的に目に焼き付けるのだけが私のしなければならない事だが、色も形もなかなか巧く捉えられない。朝焼けが消えてしまえば元も子もないのに細部に拘り過ぎてしまう。時間が限られているのを肝に銘じ細部を捨てる覚悟を持たなければならないが出来ない。私の魂はそのまま海に浸された。海の底には何百年も前から投げ込まれてきた軽石が隠されていた。その軽石の堆積の表面の海水の流れを受けて様々に変化する有り様

に、私の求めて已まない細部が全て見出された。私の魂はそれを抱えるだけ抱えて飛んだ。水が苦手な筈だったが私は何も見えない闇の中で繰り返し繰り返し頭から水を浴びていた。深夜の神事は続いていた。時間を勝手に進ませても結局ここに連れ戻されてしまう。地面が僅かに揺れ、私の体は宙に浮いた水の中を通って、切断された道の切り口と切り口を塞ぐのに用いられた。繋がっても道はのたうつのを已めないが、とてもゆっくりで気付かれる事はない。私の魚の脳だけは別に取り分けられ、氏子達の頭の中に移植されて彼らは若さを取り戻した。（二〇〇五年八月十日）

３２（浜辺の側に…）

浜辺の側に住んでいても、もう何年も海を見ていない。近所に立ち並んでいた家は殆ど取り壊されて空き地にテントを張って仮住まいする人達が次々に入れ替わって行く。以前は彼らは絵に描いたような遊牧民らしい身なりをしていたが、この頃は見る度に驚かされる奇抜な服に身を包み新しい仕事をしているのを見せびらかす。その仕事振りを見た訳ではないが、同じ手法を二度と繰り返さない程に常に別の事に立ち向かっているらしかった。昨日と同じ服装をし

ているのさえ見た事がない。服装だけでなく人も毎日入れ替わっている。海を見たくなって浜辺への道を歩いていると生垣の後ろで何かゴソゴソと動きがある。一人では何も出来ない取るに足らない連中が私を殺そうと計画を練りその準備を急いでいた。ご近所のように家を捨てて引っ越さなかったのを今頃になって悔いた。家に引き籠もっていた方がまだ増しだった。目を付けられる事もなかっただろう。彼らは私を殺してその勢いで彼ら自らの命も絶つ積もりなのだ。それが彼らが遊牧の替わりに見付けた仕事で、人が毎日入れ替わっていたのはその命ごと入れ替わっていたのだ。浜辺に着いたが海がなくなっている。海の青い色をした半透明のトゲトゲした結晶ばかりが大きな山になって浜辺に押し寄せていた。彼らが命を捨てようとする訳が分かった気がした。砂を掘って若緑色の大きな葉っぱを次々に引っ張り出した。それを積み上げてゆくと私の命を狙っていた者達はその葉を細工して組み合わせ、葉っぱだけで出来た何部屋もある三階建ての家を建てた。そこは私の新しい家で彼らは私の召使いになった。一部屋だけ空いたので青い結晶の山の向こうから来た商人に貸した。その商人は悪人で私の評判はどんどん落ちた。召使い達は働き過ぎで一日に一人ずつ死んでいった。商人の働き振りを真似た結果だった。商人は愛玩用の色の綺麗な小さな蛇を扱っていた。私は青い結晶の山の照り返しの眩しさに目をやられて昼でも景色は夜のように暗くしか見えない。召使い達はその私の目を

気遣って猟をしては色々な獣の肉を食卓に乗せた。商人もまた目を悪くして部屋の賃料を下げてる替わりに毎日私と同じものを食べてもらう事になった。私達は一体何をしているのでしょう、尋ねると商人は、忘れられない事だけを信じようとしているのですよ、と答えた。ではもっと他に信じるべきものがあるのですか、とまた尋ねると商人は、ある箸がない、とその先を考えてはいけないようにきっぱりと言った。私には商人の心が何処かに迷い込んだままな気がした。召使い達が商人を殺す相談をしているのが聞こえてきた。彼らこそ忘れられない事だけを信じようとしている。私は事が起こる前に家を燃やそうと薪を拾いに出掛けた。暫く歩いて振り返ると青い結晶の山は浜辺をすっかり呑み込んで、葉っぱの家はその山に押し上げられて峙った。家の中で既に殺し合いが行われたと確信出来た。誰も追って来ないが隠れなければならない。葉っぱの家が人の形になって追ってきた。挨拶すると私などが目通り出来る箸のない貴人で、許されてその人の側近く仕える事になった。家計が苦しいのです、と事ある毎に貴人に言い続けたが貴人は微笑みを浮かべるだけだった。青い結晶の山が荒れる海そっくりに波立って動いた。このままでは済まないと思っていると貴人には盗癖があって、貴人を殺すしか私には切り抜ける道はない。しかし盗癖はあなたにもあるのですよ、と貴人は私の心を見透かした。貴人の首を絞めるとその体は一本の木になってそこに根付いた。なるほど通説では生きて行

くには殺しと盗みに手を染めるしかないと言われてはいる。私はまた仲間を作って悪事を計画した。仲間は皆以前浜辺の側に住んでいた顔ぶれだった。しかしそれは私一人を監視するためではないかと疑ると、彼らは順々に私の見知らぬ人間とすり替わって行って私だけが日替わりで奇抜な服装をさせられた。見せしめのように。（二〇〇五年八月十三日）

３３（送られてきた商品の…）

送られてきた商品の箱の側面に何行もの長い文章が印刷され、その商品がどういう経緯で何処を経由して来たかが記してある。一度通して読んだだけではとても頭に入らない。聞いた事もない幾つもの国と地域をそれは巡ってきた。中を開けると何も入っていなくてその箱が商品だった。箱を注文したか記憶は定かでないが箱が必要なのは確かだった。何故必要なのかは忘れた。手掛かりは箱の側面の文章だけだ。私が思い出すのを待ちきれず催促するように強い雨が降ってきた。雨粒を観察するとうっすらとだが青と黄色と灰色の三色が入り混じっている。青い雨の量が多く灰色の雨は少なく黄色は見難い。それぞれ別の国の空から降ってきて混じり合っているのだ。雨に降られた禿げ山の黒土が

目の前でみるみる崩れ、中の白っぽい尖った岩が露出した。流れ出る土砂から浮く水が青っぽいので大方は青い雨が土に浸みたのだと分かる。腹が減ってきて食事の出来る所まで移動しなければならない。箱を持ち上げながら中を覗くとそこにだけ雨粒は落ちていない。箱は鉄砲水を防ぐのに必要だった。私はそれを持って禿げ山の直ぐ下の今にも水が出そうにブルブル震えた崖の下に降りた。箱の中に段々と水が満ちてきてそれに連れて崖の震えが収まった。雨が止みその崖に浮き出た形を珍しがる人達が何処からか湧き出るように集まってきた。箱の中は水が一杯で持ち上げるどころか手を貸してもらってさえ傾ける事も出来ず、私は帰りたくても帰れない。その箱の送り主だという者が現れて、私のものであるその中の水の扱いについて私と交渉する積もりらしい。その後ろに隠れていたもう一人は崖を見上げる人達の前に立って、そこに浮き出た形に表れた何か崇高な意味を説きそれを誉め讃えた。そこにいる人達が皆それに従うと箱の値段が吊り上がった。成る程そういう事かと私は彼らの遣り口を見て取れたので冷静でいられた。つまり重要なのは箱の値段でも箱でもなく箱の中の水なのだ。崖に浮き出た形は私の顔にそっくりかも知れず、それなら私は一度だけ夢で見た鬼か鬼の跡継ぎのようにでも振る舞えるのではないか。体の中がぐつぐつと音を立てて化学変化を起こすらしい。崖に浮き出た形が真ん中から裂けて水が噴き出ようとする刹那、私の体はその裂け目を継ぎ合わせ

て閉じた。崖の下に出来た町は大いに栄えたが人々が夜も眠らないようになると急に陰気な町になり、それを誰も何ともしようとしないので改善案を出した。それが無視される代わりに箱の送り主の子や孫達が裂け目を継ぎ合わせている私の体に異状がないか調べた結果、殆ど限界に達していて何も起きないのは幸運という他ない。私は町の人間を二つに分け片方は助けもう片方は全て殺してしまうと決めた。しかしそれは彼らに筒抜けでそうならないよう補修が急がれた。私は身を躍らせた。水を満たした箱の中に全身を浸して私は踊り続け、箱の経由して来た国と地域を逆に辿って箱の製造工場を突き止めた。見学を装って訪れると空は灰色で灰色の雨を降らせるに違いなかった。箱の中の水も殆ど灰色で上澄みだけ黄色だった。青い雨水が加わらないせいか二色の水は糊のように粘った。箱は十年に一個しか作られず工場には誰も居ない。それでも誰かが銀色一色の食事を差し入れたので水の中で食った。私の全身を覆う毛が銀色になった。十年と言っても十年に一度その製造に掛かるのではなく、十年掛けて作られてやっと一個出荷されるのだ。十年の間に私の体はゆっくりと箱の中の水に溶け、その水も干上がって箱の内側は銀色に塗り込められて、山から出る水だけを受ける箱が再生される。電話だと言われて受けると三色の雨雲と話しが出来、雲が箱を見失わないために私はどんな国や地域であろうと雲の流れる後を追って今直ぐにも出発しなければならないという事になった。その支

度をしながらも全てを台無しにする方法を探った。見上げると三色の雨雲が啀み合いを始めていてもう台無しになったも同然のような気がするのは、啀み合いの原因が全て私の腹にあるからだ。（二〇〇五年八月十六日）

３４（一本道に沿って…）

一本道に沿って片側にだけ家が隙間なく並んでいる。帰ろうにも自分の家を見付けるのにいつも苦労する。見てくれはどれも同じなので匂いで判別するしかない。何のためか忘れたが私は黒い鼠を飼っていてその糞の匂いのするのが私の家だが、鼻が詰まった訳でもないのに鼻が利かなくなっている。人通りはなくどの家も窓を閉め切っているので誰かに尋ねる事も出来ない。申し訳ないが余所の家の屋根に登った。屋根を伝う私の足音を聞き付けて鼠が答えてくれるかも知れない。硝子張りの屋根の上に来た。つい覗いてしまうと狭い部屋に女ばかりがすし詰めになっていて、もう一部屋には男と女が一人ずつ居た。硝子の端の小さな割れ目に鼻を押し込むと女達の匂いを嗅ぎ取れた。鼻が治ったならさっさと道に下りたいがそのための足場が見付からず、すべすべした硝子の上でただ手足をばたばたさせていた。私が鼠を飼っているのではなく私はそ

の飼われている鼠だった。いやそうでもなく、その飼われている黒い鼠を食ってしまおうと狙っているその鼠よりずっと大きくて獰猛な鼠だった。そして狙う獲物は下の部屋に女と二人で居る男だった。黒い鼠が男に変装して一人ずつ女を部屋に入れては婦人科の治療をしていた。待合室ですし詰めの女達の骨盤はどれも酷く歪んでいて男は女の肌のあちこちを噛んでその歪みを治した。その度に男の黒い肌は艶を増して私の食欲を嫌でも掻き立てる。硝子は頑丈でビクともしない。私は何とか屋根の端を齧って目印を付けた。次の日の朝、屋根を見上げてその目印を探しながら道を歩いていると、黒い肌の男が声を掛けてきて彼の家に案内された。私は、助手を探している彼の面接を受けていた。彼の牙はもう使い込み過ぎて磨り減り効き目が薄れている。私の牙は申し分ない。遣り方さえ覚えればいい稼ぎになる。私は先ず腹拵えしようとその黒い鼠を食った。今日一番に予約していた女が来た。女は先ず私に珍しい形の黒い貝殻を差し出した。昨夜屋根の上から見ていたのでそれを真似れば私の治療は少しも怪しまれなかった。来る女来る女が黒い貝殻を一つずつ置いて行く。夜、診療が終わって大きな金庫を開けると中に黒い貝殻が詰まっている。こんなものを眺めていても腹は膨れない。私が求めているのは黒い鼠のふんわりとした生肉だけだ。金庫の中を空にして調べたが他に何も出て来ない。黒い貝殻を黒い鼠に変える方法が見付かった。ただその端を齧りさえすれば貝殻だったものが私

の手の中で黒い毛並みを艶々させて動き出す。食べてみると女の恨みが染み込んだ味だと思えたが気のせいにしてその日は心ゆくまで食った。次の日からぱったり女は来なくなった。それどころか当局が一斉に無資格の医師を摘発するという話しが聞こえて来る。慌てて外に出ると一本道に沿って並ぶ全ての家から私と同じように男に変装した鼠が一斉に飛び出して、道は右往左往する鼠の群れで溢れた。私達はそれぞれの家に火を掛けて散り散りに逃げた。振り返ると家々は燻っていたが炎は見えなかった。私が逃げ込んだのは黒人の住む地域で、住民の耳がどれも黒い貝殻に見えてしまいその度に私はそれに齧り付いた。それが黒い鼠に変わる事はないがその耳の肉はそれはそれで旨い。気付かない内に罠に嵌ったらしく私は捕らえられて監獄に入れられていた。そこで私は一日中黒い貝殻に細工をした玩具を作らされた。隣の囚人はその玩具の使い方の図入りの説明書を書く係だった。その一枚一枚に違う使い方を書き込んでいるのを見付けて、何故そうするのか、と尋ねると看守を混乱させて脱獄するためで、私はそいつと二人で脱獄し何かの任務を負わされてずっと遠い所に向かっていた。何処へ行っても黒い鼠の玩具は店の棚の一番端で埃を被っていて、今時猫でさえこんなものでは遊ばない、と言われた。試しに端を齧ると女の骨盤の味がしてただ苦いだけだった。相棒が、そんな使い方はなかった筈だが、と怪訝な顔をしたが、その顔が何時まで経っても黒い鼠の顔に見えて来ない方

が私には耐え難い程に怪しくて、幾ら不味くてもその相棒を吐き気を堪えて骨まで食い尽くさなければ収まらない。（二〇〇五年八月十九日）

３５（緑色の土を…）

緑色の土を掴んで舐めた。その味を憶えて歩いて行けば目当ての場所に辿り着ける。小さな円い池の前に来た。池の中に円い島が浮いていて太く真っ直ぐな高い木が密生している。枝も葉もない幹だけの木は見上げても何処まで伸びているか見えない。島はその重みで何時グラグラと揺れ出すかも知れない。私は池の畔に小屋を建てて住んだ。或る日楽器と黒い材木を担いだ人達が大勢遣って来て、私の許可を得てその材木で島への橋を架けた。初めは黒かった橋は池の水を吸うに連れ段々と薄い紫色になった。それを待って彼らは楽器を持って橋を渡り、木を登って高い方へ消えて行った。池の水が減って池の底が見え島まで歩いて渡れそうになったが私には何か渡れない事情がある。それを知ろうと小屋の中の棚に並べられた濁った玉を順に手に取った。中に一つだけ軽い玉がありそれを磨くと玉は段々と透けて中に入れられた手紙の文面が読めたり読めなかったりする。小屋の真ん中にその私を眺めている者が座っている。玉を磨

けば磨く程私は小屋の隅に追い遣られ、遂には玉を抱えて体を丸くし小屋の隅から動けない。それでも玉が独りでに回ると丸くしたままの体も回り、頭が上になったり下になったりする。片方の耳が吸盤のように床に着いて体も玉も止まった。小屋の外で鳴らされる様々な音が地面を通してその耳に伝わる。橋を渡った人達の持って行った楽器の形が次々に思い浮かび、その中にそれぞれの音が満たされては耳の底に埋め込まれた。部屋の真ん中に座っている者が頭の中で文章を作っている。その文章と私の耳の底の音の関係を調べると、文章は骨で音は金属だった。それは文章を作っている者にも分かって、それが負担となって文章もみるみる滞り、その者は衰弱して寝込むしかなくなった。その病を治すための道具が段々と増えて狭い小屋の中に私の居場所はなくなった。壁を突き破って外に出ると玉は何処かに転がって見失われ、緑色の地面が広がる先に国境が見えた。国境に向かって歩きながらスケッチブックに次々に絵を描いた。歩きながら体で感じられた事を色と形にして描いた筈だが絵を見直すと、私のしてきた事を揶揄する絵ばかりだった。特に嫌な感じのする絵では、私は木の表と裏が分からず他の事が全く手に着かなくなって寝食も忘れてその木の裏と表をただただ見比べるばかりで、私の痩せこけた姿は誰が見ても嗤ってしまいそうだった。そんな絵を見ていて国境を見失った。止まれば転ぶのでただ当てもなく歩いているだけだ。池の前に来たが遠すぎて対岸が見えない。岸辺

に置かれた積み荷は全て材木でそれを素速く組み立てると舞台が出来上がった。高い所から木の幹を蟻のように伝って楽器を持った人達が降りて来る。それが舞台いっぱいに並ぶと彼らは演奏内容について言い争いを始めた。楽団に楽器は揃っていても歌手が居ないのだ。私は耳の底の音を頼りに彼らの演奏したい声楽曲を器楽曲に直した。演奏が始まったが私のした事に不満な楽団員達が途中で次々に抜けて、舞台には誰も居なくなった。私は歌手になって一人で歌った。池は小さな円い池で池の真ん中の小さな島は幹だけの木の密生が重すぎてグラグラと揺れた。池の水が激しく波立ち池の形はギザギザになった。それで私の歌は何処までも引き延ばされて終わらなくなった。遂に池はバラバラになって飛び散り、島だけが残った。その島を眺めながら、歌詞の中で私は玉を探し続けていた。探し続けるしかなければ、その中の手紙の文面も先へ先へと書き継がれて行く。つまりはそれが私を縛っている事情であるしかない。密生する木々に枝葉が生えて、幹は痩せ細って縮んだ。その枝葉は拡がり続けて飛び散った池の破片を全て隠し、辺りは薄い紫色の低い枝葉の他何も見えなくなった。それでも歌は詞が続く限り已める訳には行かないが、私の事情など顧みようとも思わない。（二〇〇五年八月二十二日）

３６（目の前を流れる…）

目の前を流れる川を見詰めているがその川の水をなくすよう頼まれてここへ来ていた。空の薄暗い方に架かっている虹は紅一色だった。何本か白い腕が差し出されてその虹を掴もうとしている。腕の下までは見えるが胴体は見えない。腕の下はカラカラに乾いていてそれを川の水をなくすのに使えると思った。腹這いになって川に入ろうとしたが川縁のネバネバした砂が腹にこびり付いて私は先へ進めなくなった。体を傾けて腹を覗き込むと艶々と真っ白で、砂に劣らず肌はねっとりしているように見える。川の見張り番の引き継ぎが行われようとしていた。帰って行く見張りが私の事を話したがこれから見張りを受け持つ者は私の事は知らないと言い張った。その新しい当番は一人になると見張りそっちのけで川縁に生える草を次々に引っこ抜いて白い根の草だけを集めて回ったが、川縁だけでは足らないらしく何処か見えない所へ行ってしまった。川が川の言葉で私に話し掛けて来た。私には半分だけ分かったが半分分かっただけでは川が結局何を言いたいのかは分からない。握っている掌の中がゴソゴソするので開くと、蛹が羽化しようとしている。羽が広げられたがそれは空を飛ぶよりも水中を泳ぐに適しているようだ。その羽の裏が黒いのを見て私は川の命が尽きようとしているのだと思えた。それなら川は私に最期の言葉を伝えようと

しているのだ。掌から飛び立った虫が水面すれすれの所を小さな飛沫で歪な８の字を描いて動き回った。川の水が減り始めると虫は水面の直ぐ下を泳いで回るようになった。すると川の水は少し盛り返した。空っぽの見張り小屋に酔っぱらいが居座って小屋を震わせて中で暴れている。小屋は何度も火災に遭っていた。放火だとすれば犯人は川を下って来たのだ。それを防ぐための見張りでもある。酔っぱらいが小屋に火を掛けた。小屋の中には珍しい川の景色を描いた絵が湿気から守られて何枚も保管されてある。草を抱えた見張りが戻ってきた。火を見ると見張りは草を私の方に放って小屋に入って酔っぱらいと格闘しながら焼け死んだ。草まみれになる事で、私はやっとネバネバした砂から解き放たれた。川を下って男が来た。外国人で言葉が通じないが身振りからして、私に絡み付いている白い根の草を埋め戻すべきだと言っているらしい。その隙に私を殺す積もりかも知れない。お前は何処の国に税金を払っているのか、と尋ねると今度は言葉が通じて、もう店を畳んだので税は納めなくて良くなった、と男は答えた。何を売っていたのか、と尋ねると、お前に分からない筈はないだろう、川だ、と男は答えた。それは知らなかったが自分は川の水をなくすよう頼まれている、と言うと男は寂しそうに、この川はまだ全部出来上がっていない、売り物にならないからここに流してある、と言った。何が足らないのか、と尋ねると、それは言えない、と言って私を川の方に突いた。私は川の水に触

れて感電したような衝撃を受けた。そのまま私は、流れる水になったかどうかは定かでないが、川の一部になった。虫が寄って来て私の透ける程薄っぺらな掌に卵を産み付けた。川の命が尽きようとしているのをはっきりと感じ、火災で失われた川の景色の絵が次々に思い浮かんだ。悪いのは全てあの酔っぱらいなのだ。その酔っぱらいは火に包まれても死ななかった。草の白い根を齧ってその川縁で生き延びた。誰かが通り掛かると、川の由来を教えてやる、と言ってその日の気分で口から出任せにしゃべり散らした。それに負けず口から出任せの奇問を吹っ掛ける者も居て、そういう時には酔っぱらいは、酒が切れた、と言って痙攣して見せた。しかし私にはその痙攣だけが慰めで、なぜなら川はずっと痙攣し続けているからだった。紅一色の虹はもうそれより他のどんな色にも変わる事が出来ず、それだけが川の水の枯れるのを食い止めている。（二〇〇五年八月二十五日）

３７（塩を盗んだ…）

塩を盗んだ者の後を抜き身の刀を持って追っていた。盗人は裸でぬるぬるした全身が塩まみれなので直ぐに見付かった。斬り付けると体は二つに断たれた

が蜥蜴の尻尾のようなものを残して消えた。空中の何処かに盗まれた塩が隠されていると思えて刀を闇雲に振り回した。何かを断ち切った手応えは何度かあったが塩は出て来ない。盗まれたものは仕方ない、自分が損害の半分を持つからそれで矛を収めてくれないか、と直ぐ前の薬局から出て来た薬剤師に言われた。私は薬剤師に刀を渡し薬局に入って棚の薬を次々に床にぶちまけた。硝子の容器が砕けて中の薬は床を転がり通りへ溢れ出した薬剤師は外でそれに背を向けて刀を振り回している。全ての薬が通りに押し出されてがらんとした薬局の壁が堅い岩で出来ているのに気付いた。そこに穴を穿って中から塩を取り出すべきだ。薬局に入ってきた男が黒い革の鞄を開けると小さな花瓶が綺麗に収まっていて、一つ買ってくれませんか、と言う。買わないとどうなるのか、と尋ねると、怖い話しをいっぱいしてあなたの精神を蝕んであげましょう、と笑う。怖い話しなら私も誰にも負けないくらい知っていた。私が塩を溜め込む事が出来たのも、怖い話しの中にそれとなく示唆されている塩の埋まった場所を何ケ所も探し当てたからだ。こいつは何かの囮に違いない、と私は思った。案の定その男とは全く別の身なりをした者達が一人二人と薬局に入ってきてそれぞれ見掛けの違う鞄を開け、全く同じ花瓶が綺麗に収まっているのを私に見せてはそれを勧める。狭い薬局の中は花瓶の行商人でいっぱいになった。息苦しくて外に出たが外の方がもっと息苦しい。山が崩れ地滑りが起き土石が通りに

流れ込む前兆に違いなかった。そうなる前に薬局の土地は私が所有している事を役所に登録しに行かなければならない。役所の周りは磁場が出来ていて近付こうとすると跳ね返される。私の体は鉄で出来ていて磁気も帯びていた。地滑りを予感した地主は私の他にも大勢居て彼らも役所に入れなくて焦っている。彼らと一緒に一旦薬局に戻ると、中では花瓶の行商人達の骨と血が散乱していた。肉は囮を使って薬局に罠を仕掛ける程に賢い、飢えた肉食獣に食い尽くされていた。私達はその骨を砕き血を掌で掻き集めて、転がっている花瓶に詰め棚に並べた。堅い岩で出来た薬局の壁の側なら土石が押し寄せても安全だろう。しかしそこに拳骨を打ち当てて穴を開けようとしている者が一人だけ居てそれは私だった。その衝撃で他の者達の化けの皮が剥がれた。どいつも地主などではなく汲み取り式なので排便の臭いの染み着いた傾いた安アパートの部屋で寝込んでいる年金暮らしの病人ばかりだ。彼らの姿を見ると壁を打つ拳骨に一層力が入り快感で我を忘れる。裁判所から来たという者が、この辺りは全く迷路だがそれにも拘わらず裁判所はちゃんと約束を守りあなたの土地の権利は保証する、と言った。私は薬局の屋根に登って一体何処が迷路なのか目を皿のようにして周りの景色を見回した。迷路などである筈がない。その証拠に直ぐ側が船着き場で盛んに荷揚げも行われている。誰がわざわざ迷路に荷を揚げるものか。裁判所を騙ったのは塩を盗んだ奴だった。船荷は早速運ばれたが狭く曲が

りくねった道ばかりで直に身動きが取れなくなり全て放棄された。それを盗人は屋根に登って私と肩を並べて眺め、こんな景色は他では全く見られない、こんな楽しい思いをした事はない、と言ってて喜んだ。私も同感だった。盗人のぬるぬるしたい思いをした事はない、と言ってて喜んだ。

るぬるした肌から吹き出る塩を掌で刮いではそれを私が餌付けしている肉食獣に舐めさせた。行商人達の生肉はまだ腹の中でこなれていないので塩はその消化剤になるのだった。それでも山の森は着々と伐採が進み山崩れは近付いていた。私の何十倍もそれを敏感に察知する肉食獣は全身から黒い塩を吹き不安に耐え切れず悶え死んだ。その長く病んだような死に顔は、獣などではなく私の塩を盗んだ者の顔だった。刀を振り回して斬り込んできた薬剤師が、それを蒸し焼きにして食いたいのでお前を殺す、と私を睨み付けて脅した。鼻で笑うまでもなく私は鉄で出来た全身から磁気の強い息を吐いた。その息遣いが景色を全て呑み込んで、塩の結晶で出来た小さな迷路だけに私は導かれる。（二〇〇五年八月二十八日）

３８（日の当たる場所へは…）

日の当たる場所へは出て行けない。囚人ではないが自由の身でもない。そも

そもこの身分はまるで世間に知られていない。たまたま知られたとしても誰にも相手にされない。そんな私は一日中じめじめした所で材木を切り貼りして机を作っている。しかし作り方を忘れた。作り掛けの机と材木とニスは邪魔なだけだ。その片付け方も忘れてただ歩き回っては少しずつ歩き易いように散らかっているものを隅に押し遣るだけだ。机の作り方を思い出したが材木は傷だらけで使い物にならない。それでも使えそうなものを選り出して、それらを削っている手の中で私は、机の替わりに机を私と同じように作れる子供を育てていた。身分の高い人の子供を訳あって預かっている。その子供の目の中を覗き込むとずっと遠くの景色が見える。その中で私に似た者が身分は低いが宮仕えしていて、その子供を取り返すよう命令を受けた。机の作り方は思い出せていない。子供の育て方を思い出したのを勘違いしただけだ。その子供は物心が付いて一人で私の元を出て行った。独りになった私は作り方も片付け方も思い出し、あるだけの材料で出来るだけ小さな机を数多く作って全て売り捌いた。途端に私の身分が世間に知れ渡って居心地が悪くなった。自分では気付きもしなかったが、私は机だと偽って実はずっと子供を売っていた。しかしどうやって？と他人の振りをして尋ねると、机の裏側の風を送る装置の中に赤ん坊の形をした木の人形を隠しておいて、机を買った者がその人形を宮廷に持って行くと生身の赤ん坊と交換して貰えるんだよ、と言われた。そう答えてくれたのは私に

似た者で、貴人の子を養育していた私の事を知らないか、と逆に尋ねられた。私は知らないと答えた。机の裏側に風を送る装置など取り付けた覚えはないので嘘は吐いていない。私に似た者は、私が自らの事を知らないと嘘を吐いた、と言い触らした。私は僅かな自由も捨てて自ら進んで囚人となって身を潜めた。刑務所の所長が交代して、子供を売った罪を犯した者と机を作って売った罪を犯した者に選り分ける、と言い出した。私の元を離れた筈の子供が勝手に私の懐に抱かれていた。その顔が新しい所長にそっくりだったので心配になった。他にも子供を抱いている囚人は居たが子供の顔はどれも薄暗くのっぺりとして見分けが付かない。ちょっと眠ってしまった間に子供を取り上げられた。私だけが子供を抱いていなくて肌が乾いてカサカサになっていた。他の囚人の肌はどれも脂肪が乗って艶々している。子供を売っていたのは私一人という事になって棒状の飴を三本渡されて追放になった。背中を押す冷たい風が止むと浜辺で海は鏡のように静かだった。飴を齧っては不味くて砂の上に吐いて行くと、その吐いた所に金太郎飴の顔が脹れ上がり、掘り出すとどれもそっくりな赤ん坊になった。浜は遠浅で貨物船が座礁している。船の中の狭い茶室に招かれたが船員達がすし詰めで酷く空気が悪い。送風機があれば良いのだが、と言われたが私は、それが空気の入れ換えでなく座礁した船を動かすために彼らがそれを必要としているのだ、と見破った。お茶菓子に生きたままの小さな蟹が出て

来たので席を立つ許可を得ようと私は手紙を書き始めた。手紙がだらだらと終わらないので船員達は皆眠り込んだ。その彼らの眠りが長い手紙を白紙に戻してしまう。茶室の広い天窓から高い空を飛行機がくるくる回っているのが見えた。強い風が舞っているに違いない。その飛行機の小さな影が手紙の白紙の上に落ちて赤ん坊の顔の輪郭を描いた。顔の絵は次々に紙の上に並んだ。船員の一人一人の寝顔がそれとそっくりになって行く。私は彼らが目を醒ます前に送風機を拵えて彼らを喜ばせたくなった。船を下り風を操って飛行機を墜とした。そのバラバラに飛び散った部品を組み合わせて出来た巨大な送風機を動かすと、浜は深く抉れ船は沖に出られた。浜辺を立ち去ろうとすると私に似た者が来て子供を一人預けて行った。それでまた囚人でも自由の身でもない身分に戻れたが、日の当たる場所へでも何処へでも行き来出来て、ただそれなのに行き来出来るだけで何の自由もない。預かる振りをして子供を沖に流してしまったからだ。不味かった金太郎飴が甘くなった。（二〇〇五年九月四日）

３９（軍服のように重い…）

軍服のように重い金ピカの服をきっちり着込んで今死んだばかりの老人の居

る家に入っていった。季節の新鮮な野菜の香りがする。老人を取り囲む家族の頭が野菜に見えた。しかしそれらと比べても今死んだばかりの老人の方がずっと新鮮で近寄って匂いを嗅ぐと、周りのまだ十分新鮮な野菜頭さえ萎びて見える。実際それらは萎びて行った。老人の死体だけがまだ成長し続けるように瑞々しくて、私はその手足をもいで食べたくなった。そのために呼ばれていた。この土地の古式に則った死者の送り方で、一番新しくこの土地に住み着いた者、即ち私が死肉を食べる役を負わされている。老人の愛人を名乗る者が入ってきて野菜頭の家族達が色めき立つ中で、自分こそその役に相応しいと言い張った。家族が皆黙り込んでいるので私が、何故か、と尋ねると、この人と自分とはもうずっと長いこと関係を持っていないからだ、と答えた。それならば、と私は譲って外に出た。野菜で出来た大きな人形を右腕に抱えていた。止める家族を押し退ける時に独りでに出来上がってしまったらしく、振り解こうとする程唸り声を上げてしがみついて来る。よく見るとそれと私の右腕は金ピカの輪で何ケ所か括られている。そのまま何処か奥底の方に降りていった。その奥の底は少しも見えて来ない。見えて来ないから奥底なのだろう。その奥底の方から縦一列に並んだ人達が登って来て私と擦れ違った。彼らは右手に一塊の土を握っていて、その土で土地を改良して作物が良く実るようにする積もりなのだ。私にはその土では不十分で、もっとずっと奥底の土でなければ効き目がない、と彼

らに忠告した。傍らに彼らの造った休憩用の小屋があり私は客として招かれた。小屋の内も外も何処となく腐臭を漂わせていたが私の腕の人形がそれを全て吹き払って新鮮な野菜の香りを振り撒いた。その香りを独り占めしている私だけが奥底へ降りて行く秘密の通路を知っていた。しかし私にはそこから引き返せるだけの体力がない。それに比べて彼らの脚力は疲れ知らずだ。私は彼らの脚をもいで食べた。体力は少しも回復しないが脚をなくした彼らの体から新鮮な野菜の香りが噴き出して小屋の壁を壊した。そこから外に出て彼らだけで秘密の通路をピョンピョン跳ねながら降りて行った。腕の人形の野菜の量が独りでに増えてそれはどんどん太って行き私よりずっと重くなって私の体を振り回した。三日歩き回ったのに兎一羽だけだ、と言って顔色の悪い猟師が金ピカの猟銃を担いで入ってきた。私は受け取った兎の毛を毟って小さな箒を作った。火に当たって暖を取っていた猟師が振り返って、投票用紙は持っているか、と尋ねた。持っている、と答えると、投票所は遠いぞ、と言って私を小屋から追い立てた。投票所に入ると四方の壁をそれぞれ背にした四人の老人が函折り作業をしていて私を見ると、遅いぞ、と言って彼らの真ん中に私を引き込んだ。四人は私の腕の人形の野菜を一つずつもいでは箱に入れて行った。その度に痺れに似た痛みが走ったが、人形はそれで痩せるどころか更に肥え太って野菜は無尽蔵に採れた。その分私の体が痩せている。慌てて懐から取り出した投票用紙

は真四角の手鏡で、そこに映る私の顔は四人の老人の顔よりもっとずっと老けていた。その顔の映るままそれを封筒に入れた。兎の毛の箒で軽く掃くと、四人の老人と箱詰めの野菜と人形と私の右腕は塵のように何処かに消し飛ばされた。投票所も消し飛んでいて右手に土を握った人達が縦一列に並んでぐるぐる回っている。声を掛けると彼らはその姿を段々と一つに纏めるようにして近寄って来て、一人きりになった。投票結果の知れる時間になって封筒を開けると鏡は四等分に綺麗に割れていて、そこに映る四つの顔は死んだばかりのように若々しく新鮮な野菜の香りを振り撒いた。四つの種を掛け合わせれば見付けた土に合う良いものが出来るでしょう、とその一人きりの者が優しく言った。それは私の愛人だった人で、忘れられずに約束が果たされようとされていて、私はなくして右腕を振り上げられないか試みた。（二〇〇五年九月七日）

４０（消毒液の流れる…）

消毒液の流れる溝は深過ぎて溺れるのが怖くて引き返す者ばかりだが、私は渡り切った。消毒液は体を冷やして直ぐに乾き、着物を羽織ると風を孕んだ生地がガラガラと音を立てた。気紛れに脹れたり縮んだりする柔らかい箱を私は

抱えていた。箱の中は空っぽで私はその浮力で溝を渡れたのだ。箱を下ろせと命令されたので短い草が疎らに生えた地面に下ろした。箱は膨れる一方になり透けて行った。その何処かの目に付かない隙間から箱の中に入ると、私と同じ着物を着た者が何人か居て尖った帽子を被って両腕を拡げ独楽のようにくるくる回っている。私も渡された帽子を被って回ろうとするが直ぐに体が傾いてぎこちない回り方しか出来ない。ここは外国だった。箱を下ろせと命令したのはここでの私の仮親で、その人は箱の隅に立って私の有様を悲しげに見詰めている。私の軸足の爪先からだけ白い煙が出た。私は呼び出し状を受け取った。私だけ巧く出来ず煙まで出してしまう訳を問い質されるに違いない。仮親が見詰めるせいだ。他の誰にも仮親など付いていない。その呼び出し状は仮親からで私はその前に身を投げ出した。爪先の白い煙はもう箱の中を白く濁らせていて、仮親の表情を見上げると酷く疑り深そうに見える。私も負けじと何もかも疑り続けようと心に決めた。そのせいか箱がみるみる縮んで、回っていた者達は皆外に弾かれた。回っていたので弾かれる事も出来たのだ。私はどうしたら箱の外に出られるのか。目の前が真っ白な中で、ただ回れるのを信じて両腕を拡げ爪先立ちになって首を傾けた。疑り続ける決意は何処へ行ったのか。しかし失敗は許されない。回れたかどうか分からないが箱を壊して外に弾き出された。回っていた者達は地面に膝を突いて木の苗を植えていた。木はどれも二本の枝

を左右に拡げ彼らの回る姿に似ていた。私にだけ苗は渡されなくてまた箱の中に戻される事になった。箱に戻って何をすればよいか尋ねると、お前が仮親だと思い込んでいる者が箱の中に毒を撒いたのでそれを取り除くのがお前の仕事だ、と言われた。箱は三つあって、一つは小さ過ぎて入れないし、一つは大き過ぎて中に毒が充満しているならそれを取り除く途中で私は中毒死しそうだった。ちょうど体にぴったりの箱に入ると、植樹を終えた者達が寄って集ってその箱を傾けて回した。箱は独楽のように綺麗に回った。回しながら箱に彩色が施されると、くるくる回る渦巻きの形が浮かび出た。回されながら私は、また疑り続ける決意を忘れて箱に入ってしまったのを悔いた。どうしたら何もかもを疑れるのか。手っ取り早いのは、疑る事を疑る事だ。回っている筈の箱から上着でも脱ぐようにすんなり外に出られた。箱を回し続ける者達は渦巻きに夢中で誰も私に見向きもしない。渦巻きは速く回り過ぎて却って止まって見えた。それにそっと触れると、そこを起点にして目の前の景色が渦を巻き掛けてベロリと剥がれ、景色の暗い裏側が垣間見られた気がした。それを疑るべきか。それともそれを疑る事を疑るべきか。その裏側は大きな箱だったが私の目に晒されて急速に小さくなる箱に変わった。掬うようにそれを掌に乗せると温かかった。仮親が私のために思って残した温かさであり、それがどんな猛毒であっても私はその責を負わなければならない。剥がれ掛けの景色が最後まで剥がれると裏

が表になって、私はその小さな箱の中に実験動物のように閉じ込められていた。そこから見る何もかもが、ただ見えるというだけで、ものの見事に疑れた。その疑れる事も疑れて、私は渦巻きなどよりもっと綺麗に殆ど透き通るようにただ回っていれば良かった。疑り続ける事など、回り続ける事に比べればたかが知れている。一瞬の表は直ぐに私から剥がれて裏になり、その一瞬の裏がそこへ回り込む私によって表になり…　多分私は毒を消しているのだし、消されたた毒で別の毒を撒いてもいる。その新しい毒は回る私も裏も表もただ白く濁らせた。何も温かくはない。(二〇〇五年九月十日)

４１（本の頁を…）

本の頁を捲るように柔らかく薄い箱を次々に捲っていた。箱の中には少し歪な白い玉が二つ、ゆっくり揺れて回っている。捲るのを已めると歪な二つの玉は箱の表面に浮き出た。掴もうとすると、それを残して私だけが緩やかな斜面を滑り降りて行く。見上げると綴じられていた箱がバラけて横に並び、どの箱からも歪な二つの玉が浮き出てゆっくりと揺れた。よく見ると玉の形や大きさは色々で、中で一番歪に尖った二つの玉が際立った。体を傾けると滑り降りる

角度が変わってその二つの玉の側まで来た。掴もうとすると二つの玉は箱の中に引っ込んだが、その箱を手にする事が出来た。横を向くと円い窓から海と空だけが見える。ここは広い船室で傾いた床の上を、白い歪な玉が透き通った箱の中で好き勝手に転がっている。好き勝手に見えるのは、それが歪である事によって予想の付かない転がり方をするからだとは分かったが、何故それが転がるのかが分からない。窓の外の海は全くの凪で船は少しも揺れていない。その窓が皿のようにクルクルと回り出した。海の色と空の色が溶け合わさって白く濁った。床でカラカラと音を立てる物を拾うと溶剤で、それを窓硝子に吹き掛けた。すると白い濁りはクルクル回る窓から船室に飛び込んで来て、私の抱えている透き通った箱に降り掛かった。中の二つの歪な玉は激しく揺れて、外に出たがっているに違いない。ドアを開けると錆びたポンプがもう水を汲めなくなって取り外されようとしている。ドアを開けたのではなく、回っている船窓を開けたのかも知れない。取り外された船窓が床の上を転げ回りその縁が鋭い刃になって、透き通った箱を断ち切って行く。それによって転げ出た歪な玉はそれぞれ二つが一対になって私の抱えている箱目掛けて一斉に避難して来た。箱は少し脹れたが全ての玉が箱の中に隙間なく収まった。それでも玉はどれも歪に揺れて回り続けた。蛇口を捻ったが水が出ないので水道管を辿って行くと、何時の間にかその箱の中に入っていた。玉を一つ一つ手に取って品定めした。

確かにその歪な具合は何処にでもあるようなものではなく、それなりに楽しむ事は出来たが、全ての玉を手に取ってみて、そのどれかを選び取るべきなのかどうか、或いはどれがどう他より優れているのか、というような事は分からない。もう一度一つ一つ全てを手に取ったが分からない。更に三度目に手に取ってみて、そのそれぞれ一対の間には二つを繋ぐ隠された結び目があるのを見付けた。その結び目をなぞってみて、それぞれがどう優れていて他と違うかが、正に手に取れて感じられた。しかし一つを選び取る事は出来ない。それなら全てを取るだけだ。私の調合した薬を誰かが持ってきた。まだ誰にも試した事のない薬だ。それを飲むと並べた結び目が或規則に従っているのが分かる。見上げる広い丸天井にそれらはペタペタと張り付いた。私はそれらを眺め渡して、そこに浮き出る規則を定規を使ってグラフにした。私は分からないままに機械の設計図を描いていた。それは結び目をなぞる手を作る機械だった。それによって作られた手が結び目をなぞると、結び目は解けはしないが随分緩くなった。それをみて私は自分に出来る事を探したが何もなかった。機械の設計図を描いた事を悔いていて本当に悔いているかどうかが分からない。何故なら私は歪な玉の揺れる様を少しは楽しんだに違いないのだから。一方結び目は解けないまま際限なく緩くなって行くようで、それは見れば見る程不快なのに、その不快さを逆手にとって調子付くように丸天井は深く高く拡がって扱いようの

ないものになって行く。それを眺めて今度はそう意図して、また私は機械の設計図を描こうとした。その設計図が何時までで経っても描き上がらないせいかも知れないが、その機械を作動させて作れるのは、金次第で誰の言いなりにもなるものばかりだった。それらは柔らかく薄い箱の中に次々に詰められた。箱は綴じ合わされ、幾らでも分厚くなりそうだ。一箱抜き取って中のものを試してみると、凪いでいる海の一カ所が皿のように回って場違いな感じの水柱を立てた。（二〇〇五年九月十三日）

４２（鳥が虫を…）

鳥が虫を食わなくなったと連絡が入った。私は裸だったので私の代わりに真っ黒な服を着た人が出掛けて行った。処置がされてその人が帰ってくるとその処置の仕方では駄目だとまた連絡が来た。私とその人とでどうしたら良いか話し合ったが、巧く処置するには或る装置が足らないという事が分かっただけだった。しかしそれがあったとしても自分には使いこなせない、とその人は言って息の出来ない病気に罹って寝込んでしまった。病人は一階に寝かせ私は何か名案はないかと二階に上がった。逃げて来たな、と誰かに言われたが返事はせ

ずに窓から通りを見下ろすと、鼓笛隊が行進している。鼓笛隊はこの町の自慢で全国大会で優勝したので凱旋パレードをしている。狭いと思えていた二階の部屋は案外奥行きがある。その暗い奥の方で機械の動く音がする。何かが発明されたらしい。懐中電灯で暗い方を照らすと、大きな紙が差し出され、男の声が難しい単語を含む短文を途切れ途切れに読み上げた。私の字を書く力が試されて合格すれば発明品を見せてもらえるのだと思って、紙に難しい字を書き並べて行った。しかしどれが難しくてどれが易しいのか迷ってしまい満足出来る答案にならない。通りを鼓笛隊が行き過ぎて静かになったところで、字を書く事を禁止する命令が出されたと触れ回る声が響いた。私は、発明されたのが官憲に隠れて字を書く装置だと見抜いた。それを口にすると、一階の病人を診てきたという医者を名乗る者が階段を上って来て、カルテを書かなければならないのでボールペンを貸してくれと私に迫った。そいつは囮だった。しかし、それが分からない字を書きたがっている者達が窓から何人も部屋に踏み込んで来た。暗い奥から発明家が現れ彼らの相手をした。発明家の腋の下から楽器の匂いがして、彼が鼓笛隊のメンバーだと分かった。彼は私にこっそり楽器の隠し場所を教えた。そこは長い坂を登った先の農家の納屋で、床板を外すと地下に芋が貯えられていた。楽器は見た事もないものばかりで、私はそれらの楽器での鼓笛隊の編成を色々に考えた。その内に日が暮れて深い傷を負った発明家が

息絶え絶えでやって来た。納屋にあるのは楽器ではなく彼が永年に亘って研究して来た形式論理学の成果で、それらの装置を用いれば字を書かなくて字を書くのと同じ事が出来るのだ、と彼は言い残して息が出来なくなって倒れた。私は彼を母屋に運び込んで寝かせた。納屋の地下の芋の幾つかは、悪魔の脳ミソを抜き取って天日干しにしたもので、見掛けは芋そっくりだが煮込むと無数の記憶が湯気になって湧き上がる。母屋にその湯気を充満させたが、私はただ鼓笛隊がちょうど十周年で通りを行進したのはそれを記念してだと思い出すだけだった。他には何一つ思い出せないが彼の発明した装置が働いて、その一つだけ思い出せた事を文にすると、そこにとても重要な言葉が一語書き込まれているのが分かった。その一語を大切に守ってそれに常にお伺いを立てていればもう一生書かなくて済むのだと思えて嬉しさが込み上げた。農家の裏手の禿げ山に、字を書くのを禁止されて植林ばかり遣らされている者達が、役人に監視されながら、私の嬉しそうな顔を恨めしげに見下ろしている。私は農家に引き籠もって一日中悪魔の脳ミソを煮て暮らした。その湯気を吸い続けてやっと寝込んだままの発明家は息が出来るようになった。鳥に似た顔の若者が面接を受けに来た。彼は方眼紙にびっしり文字を書き込んだノートを私に見せた。合格どころか彼に全てを譲るべきだと思って、禿げ山の脇のだらだら坂に立てた道標を示し、それに従って行けばそれ一語で済む言葉に辿り着けると教えた。彼は

出て行った。時々戻って来ては悪魔の脳ミソを土産に置いて行く。私は安心し頭の中は鼓笛隊の編成で一杯になった。脳ミソを抜かれた悪魔がだらだら坂を下って行って、方眼の空いた眼の一つ一つに真っ黒になって埋まって行く。それを眺める寝たきりの病人の顔が輝くと納屋の装置は全て方眼で出来ていて、彼の論理学がよく理解された。（二〇〇五年九月十六日）

４３（学生で働いていないのに…）

　学生で働いていないのに今年になって急に金が貯まり出した。物の値段が何十分の一かになって知らない人から譲り受けた外国の投資信託の高額の分配金が毎日振り込まれて来る。正確に幾ら貯まったか計算を始めた。途中で眠くなって何度も数え直しやっと半分だけの数字を弾いたところで窓を開けると夜が明けた。日焼けした精悍な感じの頭の禿げ上がった男が訪ねて来て、いきなりその数字を言い当て、総額を出すにはそれを二倍すればいい、と言った。私は半分の倍が総額になるのを納得出来なかった。そんな事を認めれば金を盗まれても分からない。男はその総額をまた二で割って半分の数字を出し、これを上納しなければならないのを伝えに来た、と言った。双子かも知れないそっくり

な禿頭の男が来て同じ事を言った。三つ子かも知れないそっくりな禿頭の男が来てまた同じ事を言った。そこまでのことは非常にゆっくりと行われたので三人目の男が同じ事を言い終わったときには日が暮れかけていて、私は三人を泊めるために部屋割りをしなければならなかった。一部屋しかないので部屋を半分にしそれをまた半分にして一部屋ずつに三人を入れた。残った一部屋にはいると先客が壁の方を向いて寝ていた。声を掛けると、おまえは金を貯めたんだからいいじゃないか、と言いながら向き直った。私が、しかしそれは三つ子のヤクザに根刮ぎ持って行かれるらしい、と言って相手の顔を見ると、どんな事があっても嘘しか言わない顔だった。物価が下がったのも高額の分配金もこいつが吐いた嘘だった。その嘘を信じてしまったせいで私は部屋まで盗られて裸で放り出された。風は冷たいが地面は温かいので、体を丸めて地面を転がった。旅館の裏手は残飯を詰めたゴミ袋が山積みで異臭がする。破れたゴミ袋からドロリとしたキャベツの芯が覗いていたが、嘘しか言わない顔にも見えた。私は起きあがってその顔を蹴ろうとしたが誰かの声が足に絡み付いて何か別の事をしなければ立っていられなくなった。夜明け前の魚河岸に向かって裸で自転車を漕いでいた。前の荷台に、膝を抱えた女の子が私の方を向いて籠に収まっている。彼女は声優で、私が勝手に何かしようとすると彼女の声がそれを阻み、その度に今まで一度もしていない事を彼女の声に従って、これまでずっとやら

されていたのだ。下り坂に来て耳を塞ぐと自転車から放り出された。そこは前々から農業を遣ろうと思って探していた耕作に適した空き地で、その土地の持ち主が杭を打っていたので貸してくれるように交渉を始めた。後を追ってきた声優の女の子はその地主の孫だった。二人は私の裸を見て欲情し抱き合って地面の上を転げ回った。絡み合う手足が柔らかい土を耕してもう種を蒔くだけになった。魚の仲買人が私の自転車を引いて遣って来て、その見た事を世間に言い触らした。人の道に背いた二人が姿を眩まして私は土地を好き勝手に使えるようになった。種を蒔いても蒔いても土地は先に現れてその広さは半端ではない。それに合わせるように昼の時間も何処までも引き延ばされて、もう日の暮れる事はないのではないかと恐れた。どちらを向いても地平線で全て私の使える土地だが気は重くなる。嘘しか言わない顔を模してこの状況を言葉にし全てを嘘にしたかったが鏡がなくては自分の顔を確かめられない。しかし逆に嘘を言わない顔とはどんなものだろう。そんな顔はないのだ。顔である限りどれも嘘しか言わない顔なのだ。地主とその孫娘が、二人の間に出来た赤ん坊を連れて遣って来た。ここは地の果てなので世間の非難の声も届かないそうだ。それも嘘かと思いながら、私はまた種を蒔き出したが、声優の女の子が何か言うと、杭を何本も打ってそこの有刺鉄線を巡らし、そこにだけは種を蒔かない小さな土地を囲い込んだ。その美しい小さな土地しか私には見えなくなって、種を捨

てて何とかその土地の中に潜り込もうとするが、何重もの有刺鉄線に跳ね返されて傷の上に傷を負い続けるだけだった。（二〇〇五年九月十九日）

４４（新聞の砂時計の…）

新聞の砂時計の広告で、びっくりした顔の男が砂が今にも全て下に落ちてしまいそうな砂時計を慌てて引っ繰り返そうとする絵が大きく載っている。そのびっくりした顔に釣られて新聞の次の面の文字が外に流れ出た。それだけを目で追おうと新聞を破り捨てた。しかしそれは破れていなかった。どの破れ目にも少し高い所から、舞い降りるように薄い白い紙が埋まり込んで来た。そして一度流れ出た文字がその白い紙に流れ込んだ。文字は元々白紙だった所にもびっしり埋まり、押し詰められて行く文字はどんどん小さくなって紙面全体が黒くなって行く。それをまた破って文字を流し少しでも白紙の部分を取り戻すしかない。放って置いたらそこで文字は熱を溜め込んで、仕舞いには爆発しそうだった。魚屋が魚を売りに来た。それどころじゃない、と言うと、魚屋は空の水槽を指差した。白い蘭虫が額が真ん中から裂けてボロボロになって死んでいった水槽だった。一昨日、その浮いた屍体を溝に捨てた。魚屋は右手に持った

赤い魚を振り翳しそれを強く握った。魚の口が開いていて赤い血が噴き出し水槽に飛び散った。水槽の中で血は何尾かの魚の形になって泳ぎ出した。私が、酷い事をする、と言う目で魚屋を睨むと、魚屋は、お前が新聞紙にやってる事も同じようなもんじゃないか、と言う目で私を見返した。それなら踊りを踊って白黒付けようという話しになったが、私は踊りが大の苦手なのだ。先に私の口拍子で魚屋が踊った。私の口は信じられない程素速く滑らかに動いて魚屋はそれに付いて来られず無理な踊り方が祟って骨や筋肉をズタズタにして勝手に負けを認めた。蜂蜜を全身に塗り込めば治るだろう、と私は私と交代する医者に申し送りして私を待つ者の居る隣の診察室に入った。私は直ぐに自分が医者でないと気付いたが患者に騒ぎ立てられては困るので薬の用量と効能を事細かに説明した。患者は僻地の村から運ばれてきた小さな子供で私のせいで腐った魚のような体になってしまった。それも私と交代する医者に適当に申し送りして、魚屋が売りに来た魚の吐いた血の痕を辿っていった。血の痕は段々とぷっくり盛り上がっていい香りがした。そこは医学部の教室で他の者達は皆熱心に教授の話を聴いたが、私一人が飛び抜けて勉強しない学生で授業はさっぱり分からない。それが段々苦痛になってきて私は裸足の左足を机に乗せそれをガリガリと噛み始めた。それを見た教授が私を実験台にしたので苦痛は収まり安らかな気分になった。しかし教授がメスを色々に私の体に入れるのだが何の効果もな

くただ時間だけがダラダラと過ぎて、また苦痛になってきた。まるで引っ繰り返されてばかりいる砂時計だ、と呟くと、それが正解だ、もうお前に教える事はない、合格第一号！　と教授に言われて教室の外に出された。私は教授の愚かさを呪って教室で起こった事を小話にして駅前で通行人に語って回った。誰も相手にしない中に一人だけその小話を録音している者が居る。どうしてかと尋ねると、あなたの話しは自分の死んだ兄の冥福を祈っているので手本にしたい、と言われた。その吐く息が腐った魚の匂いがする。その口に手を突っ込めば私が捨てた額の裂けた蘭虫の屍骸を掴み出せそうに思えて、あなたの蘭虫を知らないか、と尋ねた。知らない筈がないでしょう、私があなたに上げたんじゃならないですか、と言われた。大きな釜に湯が煮えたぎっていて両脇には守衛まで付いている。そいつはその湯の中に飛び込んで駅前の通行人を喜ばせる芸人だった。今度こそ白黒はっきりさせようと私はそいつの口の中から掴み出した額の裂けた蘭虫を呑み込んでやっと古巣に戻れる気分で湯に頭から飛び込んだ。私はそれきりだったが、私の拵えた小話は面白可笑しく潤色されて直に廃れはしたが暫くは繰り返し演じられた。（二〇〇五年九月二十二日）

夜、小高い丘に何人かで登ると、一番高い所に穴が開いていて、中に入るとびっしり並んだ自転車が蛍光灯に照らされている。私も他の者達も盗まれた自分の自転車を探し回った。穴の中はとても広く私達はバラバラになって見回しても遠くに一人小さな姿が見付かるだけだった。自分の自転車を見付けたように思えたが、ただその自転車が他より目立って銀色に輝いているだけだった。私は古いスケッチブックを広げ、昔そこに何枚も描いた銀色の目をした鷲の絵を見て、その鷲を探しに丘を登ってきたのを思い出した。穴の中からなのにその鷲が私達の気配を察して他の所に飛び去って行くのが分かった。羽ばたく音が穴の中に響いて来たのかも知れないと耳を澄ますとコトコトと野菜を刻む音が聞こえる。一人が雑炊の準備をしていて他の何人かがその側で輪になって何か話しながら雑炊が出来るまでの時間を潰している。しかしその一人の手元を見ると、ただ手刀でまな板を叩いて音を出しているだけだった。雑炊の材料を忘れてきたのを他の者達に知られないようにしている。そいつは時々チラチラと後ろを振り返り他の者達の様子を窺っている。見覚えのある顔だ。昔私はそいつに金を貸したが逃げられた。時効寸前になってやっと住み処を見付けて踏み込むとまだ若いのに死んでいた。同棲していた者が遺品を整理していたので私は金目当てで手伝った。そいつの書いた法律の草案が次々に出て来た。同棲

していた者にも心当たりはなかったが、郵便局員が取りに来て全て持って行った。それらはそのまま法案として議会に上程されて全て正式に法律になった。そいつの死は大いに惜しまれて色々と名誉ある位を贈られたが、そいつは死んではいなかった。借金を逃れるために同棲していたとかいう者を使って私を欺したのだ。雑炊を待ち切れなかった者達が皆眠り込んだのでそいつは穴の外に出た。私は後を付けた。低い夜空は倒れ掛かってくる板塀のようで三日月はそこに蛍光塗料を使って描かれた落書きのようだった。港を見下ろすと水を運ぶための船が続々と入ってきていて軍備がどんどん拡張されているのが分かった。私を欺して逃げた奴は港に降りて行って、一番綺麗で大きな船と結婚した。停泊中の船全部の電飾が灯された明るい中で式が挙げられた。私も招かれたが私は客ではなく花婿だった。しかし花嫁になる筈の水を運ぶ船は何時間か前に撃沈されていた。私のような者は他に何人も居て一緒に活動する事になり、私は会の規則を作らねばならなくなった。私の体の中から何かがボロボロと零れて海に落ちて行く。そこに電飾の光りが届いてそれらは海の中で銀色に輝いた。盗まれた私の自転車に輪郭が似ている。港で働いている者達を駆り集めてそれを引き揚げさせた。労働者達はそれを眺めて色々と無意味な程に根掘り葉掘り吟味した。そうしていれば辛い肉体労働に戻らずに済むと考えているのだ。しかし結局溜まって行く仕事を片付けるのは彼らなのに、そんな事も分からない

のだろうか。一人に尋ねると、俺たちはただ雑炊を待っているだけだ、と言われた。私の自転車に見えたのは、海水より思い銀色のドロドロの液体が沈んでいただけだった。私は一人海に潜ってその液体を懐に入れて停泊中の船の底に塗って回った。どの船も重くなって港を出られなくなった。少しでも軽くしようと電飾が全て外され真っ暗になってもうそこが港かどうかも分からない。懐を覗くと銀色の液体を塗り込めた私の空っぽの体の中に中に小さな種火が赤く輝いている。それがあれば何隻でも船を沈められる。私は会の規則の草案を山程残して海に身を投げた。翌朝私の屍体が揚がって懐から草案が発見されると全てそのままに採用された。その屍体は盗まれた私の自転車で、海水に浸蝕されてボロボロだったが港で働く者達はその花婿になるのを夢見た。しかし彼らには何かが足らない。彼らもそれを分かっていてその足りない何かを彼らなりに思い浮かべるだろう。その色形が私の持っていた種火とぴったり一致しないとしたら、私は初めからこの夢の中に現れた私ではないが、確かめようがない。屍体を解剖出来るなら確かめられるが、それも自転車と擦り替えられてしまって行方知れずでは望みはない。

（二〇〇五年九月二十五日）

　料理屋で、周りは皆木の実を柔らかく煮たものを食っているのに、私一人が焼き肉を食おうとしている。恐ろしく小骨の多い魚で突き立てた箸も跳ね返されて身をほぐす事も出来ない。隣の客はくだらない悪ふざけで甲冑に身を包んで硬い胸をコツンと叩いて、魚を食うにはこれくらいの覚悟がないと駄目だ、と言いながら白い飯ばかり掻き込んでいる。そいつはヤクザの親分の腰巾着だったお調子者で私の高校の後輩だった。どうすればいい？と尋ねると、魚を綺麗に食べるので評判になっている人がいる、と言って料理屋の隣を指差した。行ってみると評判を聞き付けた者は何人か居たが本人は不在だった。しかし彼らの話を聞いているとどうやら彼らが協同で色々なものの食い方を研究していて、個人ではなくそのグループで評判になっているのだと分かった。彼らは透明な豆腐の食い方について議論を始めた。彼らの居る家は屋根には青いペンキが塗ってあったが、壁と柱は透明だった。透明である事に何か秘訣があるに違いない。近くの火事を見てきたと言う者が、私の手こずった焼き魚をバリバリ嚙りながら戻ってきた。彼らの話が食い物と関係のない無駄話に変わった。私は料理屋からまだ焼かれていない生の魚を届けさせてそれを私の目の中に入れて泳がせた。彼らの注意を食い物に向けさせようとしてだが、彼らは私のする事を迷惑がって一人また一人と去っていった。私の目の中で泳いでいたのは小

さな砂粒だった。何処からか水が浸みてきて魚はそこに投げ出されてピチピチと跳ねていた。砂粒と魚の区別も付かないで魚の食べ方など身に付く筈もない。しかしそれでいい。私は坊主になって魚を食う者達を仏道に導きたくて料理屋に入ったのに、私の事を知っている客達は先手を打って木の実ばかり食って私の頭を混乱させただけだ。私は坊主を已め髪が伸びるのを待って別天地を求める旅に出た。しかし行く先々で私の志への協力を断られ、結局青い屋根の家を一周出来ただけだった。またそこへ入って行くと近くの火事を見ていた者だけが一人残って掠れた声で私に、都会はどうだった？と尋ねた。私は仏道を捨てた事を言い出せなくて、都会の人はお互いを生殺しの目に遭わせて埒が明きません、と丁寧に答えた積もりだがムッとされた。俺はそんな事を聞いているんじゃない、誰と誰が結婚したかと聞いているんだ、と遠くまでよく通る声が返ってきた。私とその人とは随分距離が出来ていた。そのせいで青い屋根も引き延ばされて今にも落ちてきそうだった。ここは刑務所で私は刑に服しているヤクザの親分に、もう何年も魚の小骨を喉に引っ掛けたまま死にそうで死ねずにいる逃亡中の彼の子分の消息を問われていた。私は答えに窮し何とか話しを小骨の多い魚の食い方に持って行きたかった。そう言えば死んだ親爺は魚を食う名人だったな、と親分は言ったがその目はとても思い出に耽るようではなくギラギラと輝いた。それが魚の顔に見えて誰かが親分を焼いてバリバリ囓ったら

どうだろうと想像しながら、でも親分さんのお父上は生涯独身でただ一人の女も寄せ付けなかったのにどうして親分さんという子供を持てたんですか、と尋ねたが、私は直ぐに私の父親と親分の父親を取り違えているのに気付いた。それは自分の父親に尋ねなければならないのに、その父親は彼の友人達をも残らず引き連れて行方知れずだった。親分は出された焼き魚を黙って旨そうに食った。その顔は何十年も前にヤクザから足を洗ってずっと堅気で料理屋の板前をやって来た人のものだった。聞きたい事は他にも幾らでもあるぞ、とその人は私に小声で言ってまた黙った。道を踏み外したのは私の方だった。魚の食い方すら身に付けていないのだから。何年かぶりにまた訪ねて行くと料理屋も刑務所もなくなっていてそこに出来たサッカー場の特別席に座らされる身分になっていたが、何時まで待っても客は私一人で無人の競技場は試合の始まる気配もないがこうして日が陰った中でただじっと待つに勝る事はないと思える。（二○○五年九月二十八日）

４７（私の生まれる…）

私の生まれる前から長い時間を掛けて色々な人達が精魂を傾けてやっと一枚

だけ。私の手に入った花びらを質に入れていた。質札を見付けたのだから間違いない。今日中に金を持って行かないとそれは流れてしまう。外とは硝子の壁で隔てられている。今外から戻ってきたばかりだが、外では人が次々に死んでいた。ここに無事帰り着けたのが不思議だった。質屋に花びらを取り戻しに直ぐまた外に出なければならない。私には姉か妹がいて、その彼女が注文しておいたピアノが届いた。試しに彼女がそれを弾くのを聴いて、おかしな音が混じらないか調べなければならない。弾き手の人の耳には限界がある。ピアノと距離を置いて聴き取る耳が必要だがピアノの音が分かるのは私だけだった。先に質屋へと出掛けて死んで帰れないとなったらもう代わりは居ない。私はポケットから小さな石ころを取り出し、これを磨けば私の耳の代わりになるだろう、と言って硝子の壁の外に出た。老いた大木が何本も枯れ掛けていた。それらが死に際に樹皮から猛毒を吐いて人や動物の命を奪っていた。質屋は見付からず質屋のあった所が美容院になっているように思えてそこに入った。髪を真っ白く染めるのが流行っていて美容師達は大忙しで殺気立ち私が呼び止めても誰も応えてくれない。見上げるととても天井が高くてその天井ぎりぎりに掛けられた燕の巣のような所に人が一人収まっている。受付だった。そんな所に受付があるのは新規の客を受け付けたくないからに違いない。しかし天井と壁の境の辺りに修繕の跡があって、そこがまた破れて外の猛毒が入って来ないよう監視し

ているのかも知れない。私は石を置いてきたのを悔いた。あの石は私の力の源だつた。それを知っている姉か妹が美容院に石を届けに来た。しかし彼女の顔は紫色で全身に老木の毒が回ってもう助からないのは明らかだった。流行が去ったのか暇そうな美容師が、あなた達が以前住んでいた家に行けば解毒剤があるでしょう、どうしてそこへ連れて行かないんですか、と赤い目を擦りながら言った。私には今住んでいる家しか思い浮かばず、その家の事を尋ねようとすると、美容院はちょっとだけ改装されてそのまま劇場になり美容師達が舞台に上がって歌劇をやり出した。それによると私達は仮住まいの処を転々としていて、前に住んでいたちゃんとした家に帰り着こうと願っているのだった。私は襤褸布を頭に被って舞台に上がり劇に参加しながらその目当ての家が何処にあるか尋ねる科白を何度も挟み込んだ。尋ねられた方は顔を紫色にして息絶えて行く。それは質流れしそうな花びらの色だった。試写の顔の皮を剥がしては重ねると、ダンダントそれは花びらに似てきた。天井の方から、それは畑で栽培されるべきでしょう、と言う受付嬢の悲鳴のような声が聞こえてきて、私は、姉か妹を置き去りにしても剥がして集めた顔の皮だけはしっかりと握り締めて外に走り出た。裸の女が股を拡げて客を集めている。その人集りが邪魔でなかなか先に進めない。しかし客が集まるのはその名に毒を消す力があるからではないかと思い客を掻き分けると、裸の女は私のもう一人の姉か妹で解毒剤を一滴

ずつ即売していた。それを入れた壜に見覚えがある。この女が私達を前に住んでいた家から追い出して、その記憶まで奪ったのだ。紫の顔面の束を女に投げ付けると女は転げ回ってその死者の顔で全身を覆い一枚の紫の大きな花びらに包まれたようになった。解毒剤を欲しい客達がそれを乱暴に引き剥がすと、死んだ女の肌から老木の樹皮から出る以上の猛毒が吹き出て客達の息の根を止めた。私だけが大笑いしていて平気だった。笑いに勝る解毒剤はないのだと身を以て知って、一人で前に住んでいた家に帰った。そこはもう廃屋だが元は見張り番のための小さな小屋で、今はすっかり荒れてしまった小さな畑が見張られていた。改めてそこを耕してみても何も育たない。どうしてだろうとその土を舐めると、舌は質流れして二度と取り返せない花びらの味を懐かしんだ。（二〇〇五年十月四日）

４８（季節の区切りを…）

季節の区切りを祝う飾り付けを他の人達はしていたが私はさっき誰かが庭に魚を生き埋めにしていったような気がして何も手に付かない。それが鱗のない魚であるのも庭の何処となく濡れているような様子から分かった。生きた魚の

鱗を一枚一枚爪で丁寧に剥がしてそれを順に自らの腕に貼り付けている者が居る。その姿は四角い枠の中に入っていた。そちらへ手を伸ばすと手ではなく何倍にも膨れた半透明の心臓が伸びていった。それを眺める飛ぼうとしない山鳥が黙って近付いてきた。何故飛ぼうとしないのか、と尋ねると、私の伸びた心臓の届かない先へその嘴を突き出した。枠の中の者は全裸になっていてほぼ全身に鱗を貼り付け、貼り残した所がないか体を色々に捻って調べている。私も裸になってそれを真似た。暫くすると枠の中の者が私を真似ていた。私の全身は鱗とはまるで違うが鱗に似たもので殆ど覆われていた。枠の中の者は私を真似るのを已め、枠に頬杖を突いて私の体を眺め、一つ残る、二つ残る、三つ残る‥、と呟きながら鱗に似たものの剥がれている箇所を指差していった。私は口が利けなくなった。山鳥が、何故口を利こうとしないのかな、と私に尋ねてきた。庭で古い樫の木が倒された。それは切り分けられて飾り付けに使われた。私は飾り付けの遅れを取り戻そうと忙しく立ち働いた。その一瞬の隙を突いて枠の中の者が私を枠の中に引っ張り込んだ。見廻すと風で倒された木が重なり合っている。一週間以内に片付けなければならないと言われたが、無理に決まっているので神社の石段の脇の家の二階に逃げ込んだ。そこでは女が花嫁衣装の着付けをしている最中で、その女の小さな娘は先に黄色い着物を着せられてはしゃいでいた。私は一階に降りて、狭い玄関口で二階に上がった者の靴を数

えた。なかなか数が多くて数えられない。花嫁の悪口を呟くと意外に声が響いて二階に筒抜けになってしまったのが分かった。外に出ると本殿で結婚式が行われているのが見えた。その奥の山の数を数えたが山の向こうにまたそっくりの山があって、何時まで経っても数え終わらない。新しく数えられている山はもう目で見える範囲を超えているのではないか。私の目はそこを飛んで行く山鳥の目だった。すると山々は重なり合って艶を増し銀色の平らな面になった。そこに映る枠の中の私の姿は見た事もない生き物の形をしていたが、何となく水の中の生き物のようだった。晴れて夫婦になった二人とその小さな娘が、その銀の鏡に映る私の姿を見付けた。娘が笑いながら私の鱗に似たもので覆われた肌を指差し、同じ苗字だ、同じ苗字だ、と繰り返した。私を枠に引っ張り込むのと入れ替わりに枠の外に出た者は、全裸のまま全身の鱗を見せびらかして船に乗って魚を獲った。その妻と小さな娘も船に乗っていて、娘は、その船を追ってくる低い白い雲に向かって、魔物だね、魔物だよ、絵本で見たよ、とはしゃいだ。その白い雲の後ろに隠れて私は船を追っていた。お午になって家族三人はお弁当を拡げた。その隙を突いて私は鉄瓶の中に紛れ込んだが、その中の水垢に手足を取られてジタバタするしかなくなった。雲行きが怪しくなったので食べかけのお弁当は仕舞われて船は港に戻った。家族三人は雨の中を走って料理屋に飛び込んだ。妻は咄嗟に夫の鱗に覆われた体を隠したが、先回りし

て板前になっている私の目を欺く事は出来ない。鍋料理を出したが、中に入っている魚も野菜も偽物で不味くて誰も手を付けない。鍋の蓋の裏側に映る私の姿は、鱗に似たものを全て剥がされた全裸で、家族三人に食われようとしている。私は、魔物だよ、魔物だよ、と主に小さな娘に向かって言って抵抗した積もりだったが、口が利けない事を思い出した。口が利けないのは山鳥の習性で、水の中に住む私と山鳥が何処かで混ざり合ってしまったのを恨むしかない。しかしその混ざり合った生き物もインチキな偽物で、恨むべきはまた別の事らしいが何だろう。（二〇〇五年十月七日）

４９（直ぐに読み取らなければ…）

直ぐに読み取らなければならない楽譜を岩陰に隠れて長い時間掛けてやっと読み取った。それは悲しい歌だった。その譜面を今開いたばかりのような振りをして立ち上がり、出だしの声の調子をどうすればより悲しく歌えるか考えているると風向きが変わった。それはお祭り気分の歌になり、それをお祭り気分で歌えるのはこの世に一人しか居ない。それは私ではないが、私だけがその歌手を見付けられる。風向きが変わる瞬間にその歌の事を考えていたのは私だけだ

からだ。狭い道の両側を覆う笹が音を立てて風に靡いている。笹舟を造りたい子供が笹の葉を取ろうとするが巧く行かない。譜面がバラバラになって笹の中に舞い散った。子供の手に一枚だけ残った譜面を折ると翼を生やした笹舟が出来、それを掲げると道とは別の方向から青い空が降りて来る。風はそちらに向かって吹いていたが直ぐ行き止まりで固まって氷になった風が積み上がり、笹を全て枯らした。長旅で疲れていて眠りたいのに、そうさせないように誰かが私に楽譜を渡したがだ。私は風の氷の壁を蹴破って先に進み突然の寒さに凍えた。あの歌手を見付けてお祭り気分の歌を聴く他に救われる途はない。頼みは懐から出て来た温かい日記帳で、その記述の何処かに手掛かりがある。それによると私は毎日神社にお参りしていた。その頃私は半年後に取り壊される廃校に隠れ住んでいて、周りは住宅地なのに神社への道だけはひっそりとじめじめしていて住民の姿も一度も見掛けた事はない。子供達に尋ねると同級生の誰かが魔物に攫われたという話しが広まっていた。大きな揺籃を持って行けば良いのだ。魔物はそっとその揺籃に攫った子供を戻すだろう。家々を訪ねて回っても何処を探してもその揺籃がない。赤ん坊のためのものでは小さすぎる。小学生の体が収まるものでなければ駄目だ。まじない師に尋ねるしかない。私はまじない師の家に連れて行かれ、その家で行われている事を見せられた。小さな蚊帳が幾張りもこんがらがつて釣られ、体の柔らかいすらりとした者がその中

を泳ぐように動き回っていた。振り返るとまじない師の姿はなくて、それが何をしているのか私一人で考えなければならなくなった。それには服装が先ず第一で服を着替えたかったが箪笥を開けても正装は出て来ない。略式のものを何着も着重ねて何とか恰好を付けた。そうして姿勢を正して眺めると、動き回る者は卵子を子宮に運び込んでいるのだと分かった。胃液が喉に込み上げてまじない師の家中にその酸っぱい匂いが染みると、私は首枷を付けられて四つん這いにされ、小さな刃物を手にした子供達に見張られていた。私は間違った事はしていない。それを示す法律の条文を思い出そうとしたが昔暗記した古文が独りでに湧き上がって頭を満たしてしまう。法律は諦めて、子供達に喉が渇いただろうと鎌を掛けた。子供達は刃物を捨てて走って出て行った。しかし外の水は鉱毒を含んでいるのだ。私はその水を勧めてしまった。子供達の唇がみるみる赤く腫れ上がった。神社にお参りに行く筈の団体客が、途中別の団体のガイドと入れ違ったのか、けたたましい足音を響かせてまじない師の家を見学に来る。罪は見世物じゃないぞ、と私の代わりにまじない師は彼らを叱責したが、私はまじない師が彼らを導いて来たのではないかと疑い、団体客は続々とやって来るのだから、その中にお祭り気分の歌を歌える歌手が居る事に望みを繋いだ。その団体客が途中から首枷を付けた者ばかりになっていて、彼らは子供達が捨てていった小さな刃物を欲しがった。それを渡せるのは私だけで、それを渡す

と私は彼らに罪をなすり付ける事が出来て、棒のように突っ立っているのがやっとのまじない師の脇を擦り抜けて、誰も通らない神社への道に出た。団体客がお参りに行くのとは別の神社なのだ。行ってみると取り壊された後で何もない。何もないのこそ好都合だ。身も心も軽くなって歌いたい気分だがその歌がない。歌えない辛さに全身が痒くなって服を脱いでそこら中を血が出るまで掻き毟った。暫く眠っていた。気が付くと全身の傷の丸々と脹れた瘡蓋がどれも剥がれ掛けている。それを順に剥がして値札を付け、罪になると知りつつ売り捌いた。それとも罪を売り捌けたのか。（二〇〇五年十月十日）

５０（真っ青な空に…）

真っ青な空にたっぷり水気が含まれているせいか、力だけはある。その力に任せて石垣を積んではいるが直ぐに崩れてしまう。慎重に位置を決めてから積み上げれば良いと分かっていてもそれが出来ない。崩れた石に向かって鞭を振り下ろしている男が居る。その鞭の音が私から力以外の能力を奪っている。その男を誰かが羽交い締めにした。私は後はその二人に任せておけると判断して本で埋まった暗い小さな部屋に入った。そこでずっと語り継がれてきた古い昔

の力持ちについての文献を漁っていたが他に気になる本があって集中出来ず本は見付からない。そこは役所の資料室で、汗びっしょりで資料を掻き回している私に、役人が当たり前の顔をして賄賂を要求してきた。その顔を見直して本当に賄賂を要求しているのかどうか疑った程だった。役人なのにどうして蔓を被らないのか、と尋ねると、お前がこの国の人間でないからだ、と言われた。しかし私は生まれてこの方一度も離れた事のない町で、町の伝説として例の力持ちの話を聞かされて育ってきた。役人の方がこの国の人間ではないのだ。頭に手を当てると私の方が蔓を被っていた。外で私を呼んでいる。行くと市民がカウンターの前で行列を作っていて、私の力を求めて今にも騒ぎになりそうだった。私は力任せに彼らを処理した。それが認められて上司から記念品の指輪を贈られた。その青い石をじっと覗き込む内に、力以外の能力の使い方が分かってきた気がした。そこで私は市民の何人かから衣服を剥ぎ取った。その小さな端切れを継ぎ合わせてプロレスラーの使うようなマスクを作って被り役所の中の偽役人を次々に見破って足枷を付けて受付窓口の横に並ばせた。大学教授を名乗る背の低い若い男が来て、学生を引率してきたので資料を見せて欲しい、と言う。学生は年寄りばかりで物珍しそうに辺りをキョロキョロ見廻している。私が何の返事もしないで居ると、年寄り達は段々とばらけて市庁舎の中のあちこちに散っていった。私は彼らが師の財産を盗みに来たのではないかと思い当

たり、階段を上り下りして彼らの姿を追ったが見付からない。彼らは市庁舎の最上階の部屋に集まって一塊になって積み上がり、一番上の者が天井を壊していた。壊された所からはもう青空が覗いている。それを指揮しているのは偽役人の一人だったが、実はそれは本当の役人で彼本来の仕事をしているのかも知れない。天井が落ちて年寄り達が瓦礫の下敷きになった。屋上ではお祭りのための踊りの稽古が終わったばかりだった。私はその踊り手の一人だが踊っていた記憶がない。隣の者に、踊りを全て忘れてしまった、これではとても本番は務まらない、と言うと、時間を逆戻りさせてその裏側から光を当てる方法を教わった。その方法を使えば踊りを憶えなくても隣の踊るのを真似ていれば巧く踊れる。それで安心した私は、また別の時間の裏側を照らそうと動き回った。折り重なる年寄り達は瓦礫の下で血を流せば流す程若返った。一斉に声が上がると先ず瓦礫が踊り出した。それで瓦礫が全て天井の穴から吐き出されると、若い踊り手達は定規で引かれた図形のように綺麗に揃って踊り始めた。それは彼らの死ぬ間際の最期の踊りだと分かったので、私は彼らのために床に白と黒の熊の毛皮を敷き詰めた。彼らはその毛皮に触れずに踊るので自ずと宙に浮いた。屋上に私だけが上がると市庁舎ごと宙に浮いている。時の裏側の奥の方まで照らし過ぎた。どうやって戻れば良いか分からない。取り敢えず微かに聞こえてくる彼らの合いの手に合わせて一人で踊ってみた。体の動きの一つ一

つが定規で引いた図形だった。その図形だけがあって体はない。青空の中の水の匂いのする方で、水の腐ったような変な匂いのする見知らぬ図形が流れて行く。それを眺める事で私は踏み止まる事が出来、軽過ぎる時間が少しずつ空と反対の方に沈んで行く。（二〇〇五年十月十三日）

５１（流し目の達人が…）

流し目の達人が神の存在を証明するという。神は流し目の先に在るものらしい。その先に私は、くしゃくしゃに丸められた紙屑を想像してしまって、自分には神に近付く素質はないのだ、と失望した。しかし流し目の達人は紛れもなくその紙屑について語っていた。それとは別のだみ声に惹き付けられる。そのだみ声と比べたら流し目の達人の言う事は紙のように薄っぺらに聞こえる。だみ声に導かれて白い壁だけに挟まれた長い廊下を歩いている。窓一つない。行き当たりのガラス戸を開けると教室で、何時まで経っても現れない教師を待つ生徒が大人しく席に着いている。教師を呼びに行く当番の私は直ぐにそこを出て今来た長い廊下を戻った。白い壁ばかりに見えたが別の教室を見逃していたかも知れない。そう思って注意深く進んだが、やはり白い壁ばかりだった。行

き当たりのガラス戸を開けると、狭い職員室で教師が四人向き合っている。私達の担任はその中で飛び抜けて大男で動きは鈍い、生きて行く上で最も重要な事を語っていた。それを語り終えるまでは職員室を出られないし、それを語り終える事が出来てからでなければその同じ内容を私達生徒にも語る事は出来ない。残り三人の教師達は昨日の競馬の勝因やら敗因やらをコソコソ話し合っている。私は一瞬の隙を狙い定めてその三人を担任から切り離し担任一人だけを廊下に押し出した。担任は長い廊下をそのまま教室に向かった。私は三人を目眩ますために競馬の話しに加わった。自分用の灰皿をそれぞれ手に持っていて私の灰皿にだけ吸い殻でなく濁った水が満ちている。三人が吸い殻を足元に捨てて踏み潰すと駆られは僧侶の姿になった。どこから来たか尋ねると、三人共ずっと遠い所から来た旅の僧だという。競馬ではなく祈祷か呪いの仕方を話し合っていたのだ。廊下に出て担任の後を追っていると途中廊下は別の廊下と交叉している。何となくだみ声の聞こえてきそうな方に歩いて行くと汚い古びた着物を着た女が横になっていて、操っていたのは私だ、と言ったが、私は耳を塞いで急ぎ足でその前を通り過ぎた。行き当たりの硝子戸は閉まっていたが私はプロの空き巣のような慣れた手付きで硝子を音を立てずに割って鍵を破って戸を開けた。そこは狭く臭い部屋で背中を向けて座り込んでいた用務員が振り返って、俺は女を虐めるのが大好きで、そのためにあれこれの方法を編み出

しては楽しんでいる、というような事をだみ声で語り出した。ボロボロの本が一冊だけあって白蛇の御利益について書かれたものだったが、表紙は煙草の火で焦がした跡ばかりが目に付く。お前は俺を非難しに来たんだ、だったらさっさと非難しろ、と用務員は捲し立てた。私は声が出なくてその声の出ないのを自分の拳骨を衙えてしまったからだという事にしたくて、自分の拳骨を口に入れた。その拳骨が口の中で渦を巻いて私は段々と自分の居場所を見失った。教室で担任が例の重要な事柄を話し終えて私の居ない事に気付いたが、私が居なければ何も出来ず生徒の前でただオロオロするばかりだった。私は廊下と廊下が交叉する場所に立って、足元をグラグラと揺らした。私は大きな石の上に乗っていた。三人揃ってやって来た僧侶の服を剥ぎ取ると三人共女で、食い物を恵んで貰おうと僧侶に化けているだけだと分かった。用務員向きの女ばかりだと思って私はだみ声を真似て脅かした。用務員室の方に転がって行く彼女達の姿が紙屑のように見えた。私は何をした訳でもないのにグラグラする石から降りられずに居る。全ては、これまで私に関わって来た劣悪な連中のせいだ。しかし彼らを皆許そうと思った。初めから無人の十字の廊下を独りで歩き回っていたと思えば済む事だ。担任の顔を思い浮かべるとそれは実の兄だった。誰一人許しはならないと思い直した。

（二〇〇五年十月十六日）

５２（球を手に…）

球を手に取ると冷たくて、水を弾く材質で出来ていると分かる。僧侶が三人、上半身裸になって強い日差しを浴びる中で、光る球を追い掛けている。別の三人はその影のようにそれに背を向けてゆらゆらと揺れている。私はその三人の方を選んだ。別の球を手に取ると温かくて水を吸っていた。その湿った球を影のような三人に向かって投げると、彼らは僧侶達の影のようであるのを已めて足元の砂地からそれぞれに機械を取り出し、それを動かしてそれぞれに物を作り始めた。それらを売るのが私の仕事になり、先ず大きな店を建てた。商品の価値は商品の並べ方次第だった。私は人を大勢雇って店中にマネキンを並べさせそれらに商品を纏わせた。三人は重役になっていて物作りは別の者に任せ店内を廻って店員に色々と注文を付けている。私は店員と間違えられそうなので彼らに見付からない内にそこを逃げ出した。砂地が続いて足を取られてなかなか先に進めない。日差しが強くなると砂地に足を取られているのではないと分かった。砂地の中に頭と腕と脚をもがれて胴体だけになったマネキンが幾つも埋まっていてそれに足を取られているのだ。その一体を砂から引っ張り出すとスポンジのような材質で水をたっぷり吸っていた。喉の渇きを覚えて私はそれ

にしゃぶり付いた。私の他にも砂からそれらを引っ張り出してしゃぶっている者が何人も居る。胴だけのマネキンは色取り取りで私達はそれらを持ち寄つて並べ大きな砂絵を描いた。そこに自ずとクロスカントリーのコースが出来て私達はゴールのないそのコースを巡り続けた。マネキンの後ろに体を隠し顔だけ出した三人の僧侶が、その目の前を走り過ぎて行く者達の走り方を論評している。とても辛辣で褒められる者は誰も居ない。それに腐って走る人の数が段々と減って夜になっても走っているのは私一人だけになった。私はそうなるのを待っていた。誰にも見られずに三人の僧侶を私の自由に出来るからだ。早速三人をマネキンの後ろから引っ張り出し彼らのツルツルした体を代わる代わる球のように抛り投げて遊んだ。泥棒の一団がマネキンを盗みに来た。そのスポンジは特殊な材質で出来ていて高値で売れるのだ。私は僧侶の首根っこを三人纏めて押さえ付けて彼らから身を隠した。彼らがその持てるだけのマネキンを持つて立ち去ると、私はその足跡を頼りに彼らの後を追った。足跡は大きな庭園に入り込んでいた。そこは大邸宅だが家族仲が悪く、家族の誰も出て行ったきり滅多に戻らない。その当主が私だった。家に戻るのは何年振りだろう。懐かしら日記を付けている手帳を取り出して家に戻った事を書き記そうとした。月明かりはあったが手の影に覆われて暗くて字が書けない。三人の僧侶は丸い噴水池で水遊びしている。私は邸宅の端から順に切り売りして、それを段々小さく

して行く事にした。呼べば泥棒の一団は私の部下のように集まってくる。先ずは彼らに庭を順々に売っていった。泥棒は八人居て、彼らのものになった土地が私の邸宅を八方から隙なく塞いだ。その八方を一望に見渡せる場所に立つと私は自らが神である事に気付いた。しかし最下等の神で、みっともなくてとても人前で神を名乗れる身分ではない。僧侶が濡れた裸の尻を私に向けて三つ並べた。それを見る私は三等分され、僧侶の三つの尻の穴の中にそれぞれ埋め込まれた。それでこの邸宅を本拠とし、八方に向けて神としての私をこっそり広める事が出来る。しかしそれは夜だけで、夜が明けると、神である私の事を断りに大勢が押し掛けてくる。（二〇〇五年十月十九日）

５３（何時も決まった…）

何時も決まった所で小雨が降る。そこに何度も行ったが地面がじめじめしているだけで雨が降っているのを見た事がない。そこではないのではないか、と道案内が言う。道案内がそんな風ではお手上げだ、と言い返すと道案内は姿を眩ませていて、私は薄い布で顔を覆った男達に取り囲まれていた。私は彼らにとっての穢してはならない所に居た。私を追い払おうにも彼らは近付けずにい

る。道案内が風の中に紛れていて男の一人の顔の布を捲り上げた。男の私を見る目は怯えていて、何か神聖なものでも見るようだ。別の男が、松並木に沿ったる白い砂を敷いた道を走り過ぎて行く。風に紛れる道案内は、白い砂煙を巻き上げてその男を追った。私を囲む男達にその砂煙が掛かると、彼らは隣同士で掴み合いの喧嘩を始めた。私はそれを仲裁して廻って、私が彼らに危害を与える者でないのを示した。仲裁が巧くゆく度に彼らの姿はシャボン玉が割れるように消える。最後の喧嘩を仲裁すると、私はまた男達にぐるりと囲まれていた。別の男達で顔を覆う布の目の位置にだけ穴を開けていて、その奥の目はどれも怒りを湛えている。私の体は宙に浮いて長く伸びて行きながら輪を描き、男達の前に差し出された。彼らはその私の肉を食べ始めた。私も、彼らの前を一周して目の前に届いた自らの爪先を食べた。烏賊の味がした。嚙み切っても嚙み切っても私の白い爪先は生えてきた。地面を歩くための道具を見付けなければ、この窮状を脱する事は出来ない。地面を歩く道具とは足ではないのか。それとも靴か。しかし見付けなければならないのは足でも靴でもない。男達は私の肉を喰らう内に、蟻んこの群れに姿を変えていた。その脚を見ると粘液にまみれてキラキラと輝いている。その粘液の流れて来る方を目で追うと、壊れて捨てられた鏡の割れ目からそれは滲み出ていた。その割れ目は私の足の傷痕でもあった。その足で歩いていて、ホテルの一階の大衆食堂の暖簾を潜った。汚いなりの

労務者達が体のあちこちの脱臼を互いに組み合って治そうとしている。その呻き声だけが高い天井の下を響いている。天井には極彩色の竜の絵が描かれていて、今にも動き出して天井を壊しそうで私は不安になった。背景まで極彩色で見難いが、竜の体は輪を描いてその尻尾は竜のすぐ目の前にまで届いている。労務者達は脱臼を治すのを諦めて、ずり落ちそうなおかしな格好で椅子にしがみついて何時まで経っても料理が来ないのを詰り始めた。私のせいに違いなかった。料理は私が作らなければならないのだったが、材料を切らしたので探しに出掛けていた。取り敢えず尖った帽子を被った。それが合図のように労務者達も折ってあった同じ帽子をポケットから取り出し、風船のように息で膨らませてそれを被った。儀式が始まったが、進行役である私はどうして良いか分からない。ペットボトルを積み上げて泥棒猫除けのバリケードを作るらしいが、ペットボトルは少しずつ形と大きさが違って、積み上げても直ぐに崩れてしまう。その形と大きさを一定に揃えるために皆お揃いの尖んがり帽を被っている筈が、その帽子も少しずつ形と大きさが違う。それを知って私は、見付からないなら労務者達を勝手に殺しても良いのだと悟って実行していった。厨房に彼らの肉が積み上がった。私は料理への興味を失い、他人を陥れて暴利を貪る商売をしたくなった。音のする小さな布の袋だけを持って裏口から外に出た。生ゴミを入れた袋の積み上げられた陰で、男達が着替えをしている。一度着込ん

だ服を脱いで素っ裸になり、その服を同じく素っ裸になった隣の男と交換し合って着込み、着込むとまた脱いで行く。ホテルに遮られて一日中陽の当たらない家がジメジメと湿気て腐り出していて、建て替えなければならない。小雨が降り出し、走っても走っても私の行く所にだけ雨は降る。脱いだ服を抱えて素っ裸で私を追って来る男達は少しも濡れない。布の袋を開けると削ってない鉛筆が男の数だけ入っていて、それを男達に投げると彼らは引き返して素手で家の建て替えに取り掛かった。互いの体の肉を粘土のようにちぎっては、外壁に張り付けて行く。私が小雨を引き受けたせいで、現場はカラッと乾いて仕事は捗った。（二〇〇五年十月二十二日）

５４（工場の跡地…）

　工場の跡地いっぱいに四角い池が造られた。完成式典もそれなりに賑わって関わりのない私も浮き浮きした気分になった。担当者の見込みでは水鳥の群れが渡って来る筈だが、季節が移っても一羽として来ない。見物客を当て込んだ店も全て畳まれた。それならまた埋め立てて別の用途を考えるべきだが埋め立てる資金を出す者が居ない。無用の池とその傍らに並ぶ廃屋が残っただけで、

人の姿も絶えて久しい。私一人が地面に穴を掘って目だけ出してその殺風景な有様を眺めている。暖かい季節になり穴の中は暑苦しくて居られない。穴を出た私の体には筵が二重三重に巻き付けてある。それを剥ぐともう下着だけだった。筵はほんの微かな風にも宙に舞って廃屋の脇の池の縁まで飛ばされた。追い掛けて池に落とすまいと飛び付くと、私は水の上を滑る筵に乗っかっていた。廃屋は見る見る遠ざかり池の真ん中の方に流された。池は外から眺めるより、気味の悪い程広く感じられた。筵はもう流れているのか止まっているのかも分からない。池の水は青く濁っていて触れるのも恐ろしい。手で漕ぐなど出来る筈もなく、筵が池の縁に流れ着かない限り、私は池に浮かぶ漂流者だった。陽は高く昇ったまま降りてくる気配もない。私は池の真ん中で木乃伊になるしかない。確かに水に浮かぶ木乃伊はこの池の景色に相応しい。池は木乃伊を待って水鳥を拒んだのかも知れない。外国の軍隊が進攻して来て池を囲んだ。廃屋の一室に将校達が集まって私もその部屋に居た。私は死んで、そこに居られるのは私の霊だと思えた。その部屋は雨漏りが酷い。私がその一つ一つ違う原因を将校達に説明した。新兵が一人呼ばれて私の指示で屋根や天井裏や壁の修繕を遺らされた。新兵は私に、こんな事をするために志願したんじゃない、前線で敵と戦いたい、と不平をこぼした。午を告げる鐘が鳴った。昔工場で働いていた者達が、将校達に貢ぎ物を届けに来た。貢ぎ物には毒が塗ってあり、私が

それを指摘したので彼らは殺されずに済んだ。私は守衛に取り立てられ廃屋の外に部下を従えて立った。池の真ん中に筵が浮かんでるだろう、その上に乗っているのは木乃伊なんだぞ、と私は部下に説明した。彼らは私を取り囲み下着姿の私の肌を吸った。薄い肌は直ぐに破れ私は彼らに血を吸われた。元工員の一人がスパイになって軍に潜り込んでいて、そいつが私の部下に肉切り包丁を渡した。それを使っても私の肉は切り取れなかったがやっと彼らは、私の木乃伊の話しを我が事として受け取った。木乃伊の肉を切らなければ、肉切り包丁は宝の持ち腐れだ。初めにそれを言い出した奴が池に入った。その姿は直ぐに沈んで二度と浮かんで来ない。私は部下を棄てて一人池の周りを巡っていた。子供が、零した水の前で四つん這いになって途方に暮れている。その子供も昔工場で一日中働かされていた。誰を待っているんだ、と尋ねると、母親か女、と子供は答えた。どちらかに決められないのか、とまた尋ねると、子供は嫌そうな顔をした。どちらかに決められるなら私はそのどちらかになれる、そう子供に伝えたいが、子供は零した水を気に病んでいて聞く耳を持ちそうにない。私は母親になってみた。子供の表情は変わらないが、子供の手にしている空のコップに搾り立ての牛乳が満ちた。その乳を持って行けば兵隊になれるよね、と私は女の声で言った。牛乳が零れるのを恐れて子供は身動きが取れない。軍隊は次の駐屯地に移る準備を始めていて周りが慌ただしい。子供は私の声を幻

聴と決め付けた。私は狼狽えた。コップから零れる乳が絹地に見えた。それはクネクネと蛇のように伸びて池に入った。池が少しずつ白く濁って行く。それが豪雨を呼び寄せた。池は益々濁り、雨で前が殆ど見えない中を軍隊は出発した。小さな刀の鞘が落ちていて、子供が雨に流され池に落ちたのが分かった。

私の姿も見当たらない。雨は降り続いたが廃屋は黒い煙を噴いて燃えた。その中に僅かに覗く赤い炎なら私の事を知っていそうだ。雨が止んで眠りから覚めると、私は平らなコンクリートの池の底の真ん中で仰向けに横たわっていて、周りに沈むゴミの中に紛れていた。水面に浮かぶ子供の木乃伊が見失われると、無数の水鳥が舞い降りて一斉に水を掻いた。（二〇〇五年十月二十五日）

＊　＊　＊

（空だけが甲斐もなく…）

空だけが甲斐もなく晴れていた。尖った禿げ山の中腹の薔薇園を望む柔らかい真っ直ぐな青い道は、犇めく歩行者の声を全て吸い取って、その棘棘した静けさは耐え難い。歩調を緩めるだけで道を逸れる事が出来るし、そう思い至りさえすれば大抵の者はそうする筈だが、滅多に見掛けない。しかし今や彼は、ゆっくりとした歩みだけを愛する。ぼんやり眺める地平線を掠める速い雲の流れから、天候の変化など気楽に予想しながら。ではもう道を逸れているのか、と言うと、よく分からない。その足跡は、青い道の影のような裏道の中に記録されていて、緩やかな歩行への愛だけは確かめられる。尤も、何に付けても愛の裏には、それ以外のあれこれへの呪いも見透かされそうだ。何への愛であれそれを表立たせるのは、端（ハタ）からは呪いの身振りと解釈され兼ねず、危うい。しかし足跡だけ記録される裏道とは。そこを歩いた覚えもないし、勿論そこからの眺めも浮かばない。いや、禿げ山を見付ける以前の青い道からの眺めも全く浮かばないなら、どの道を歩いて来ていようと気に掛けるまでもなさそうだ。その気の緩みが恐らく彼を薔薇園に迷い込ませ、湧き上がるように絡み合う薔薇の枝の塊に囲まれて、行き止まっていた。ゆっくりとした歩みが阻まれ、青い道で声を吸い取られるより辛い。花は殆ど終わっていた。枯れても色を残したままの僅かな花の位置が見定められては順に線で結ばれ、星のよう

な形が閉じるとそこに、薔薇園の管理人の「青い道に帰れ」と言う手垢に塗れた言葉が響く。言葉は暫く星の形の中に影絵のように捕らわれていた。その影が薄れて風が渡り、風の中に期待された声は来なかったので、己の心臓に耳を澄まして、その変調に望みを繋ぐしかない。そうして同じようにしている者共が集った。薔薇の枝の塊はみるみる取り除かれ、踏み付けられ、風に追われた。思いのままの方へ思う存分ゆっくりと歩けそうだったが、薔薇を踏み付けた足は酷く弱って、それより動かなかった。細い脚を見せ合うのも段々と億劫になって互いに背を向けて蹲るばかりだが、ここが臨終の場であればさぞ一切は愛おしかろうと思えて仕方ない彼だけは棒のように立ち尽くし、彼を否定するために遣って来るものの目に触れ易いようにした。背を向けた者達の、のっぺりした明るい笑い声が彼を囲んで、彼の姿勢を溶かしに掛かるようだった。笑い声は薔薇の花弁のように彼を包んで折り重なった。その彼は薔薇の花心か。その一輪は、青い道を逸れて僅かに道を見下ろす所に薄い影絵のように咲いて、その心臓の鼓動は受粉の音にも聞こえた。手垢に塗れた響きの正体が暴かれたに違いなく、青い道の方から薔薇を逸れて行くのが分かったが、それがはっきりする程、裏道の眺めの色形が、薔薇の前に組み立てられて行く。薔薇がグリグリと肉厚の身を醜く輝かせる程、青い道は色褪せ、遂には捩じ曲がった身を投げるように崖に突き当たって絶たれた。それを待っていたかのように、禿げ

山の頂だけがさっと削れて、小さな小屋が建てられた。森の眺めばかりが続く
裏道をゆっくり歩いて、薔薇の心臓の彼は、小屋に気象台の看板を掲げてそこ
に入った。見上げると、平板な巨大な星の形に切り取られた夜空一面に、小さ
な雲が数え切れず掛かっている。心臓から散り落ちた薔薇の花弁が夜空に流れ
込んで、それぞれに雲と絡んだ。その内に雲と花弁の区別が付かなくなり、夜
空が星形の薔薇園と見紛われて、気象の観測は阻まれたが、雲の活発な活動だ
けは嫌でも目に入る。決して雨を降らせない薔薇の色に染まるだけの乾いた雲
ばかりで、夜の静けさがまやかしであるのを見透かしていた。そのまやかしに
惹かれる青い道が、螺旋を描いてそちらへ昇って行く。役割を終えた気象台は
雨も風もないのに壊れて、残骸は禿げ山を転がった。禿げ山を取り囲む森が、
高い陽を受けて挑むように深く凶暴に輝くのが、殺風景な禿げ山の頂から見下
ろされた。青い道もそこを行く人々もその声も、夜の方へ見事に逃げ切ったの
だ。そして彼もまた、それら夜の方へ逃げたものの共から、逃げ切ったのだと思
うと、独り禿げ山の頂に残されて、望み得る限りを成し遂げたのではないか。
気象台の残骸は一塊のまま森に転げ込んで、森を傷めながら、衰え知らずに突
き進んだ。それで殺された草木や虫や鳥や獣の腐臭が、禿げ山を這い登る。彼
の望みで建てられた気象台に違いなく、独り残されるどころか、それら腐臭と
何時までも馴染んでいなければならない。もう一度逃がしてくれる裏道もなく。

いや薔薇の心臓の身のその刺で、時の裏表を突き通せたなら。愛が呪いであるように。

さてそれから、

内輪だけの夕食会だが、知った顔が居ない。隣などは人型のゴムだ。真っ白でゴツゴツした穴だらけの肌だが、名を呼ばれて向きを変えると、反対側の頬も首も肩も真っ黒でのっぺりしている。むっちりと白く太い斑模様の脚の牝馬に跨ったままの男に闖入されて少しざわついたが、直ぐに誰も気にしなくなった。騎乗の男は、それを良い事に得意然と馬を駆け回らせ、皿も鍋もひっくり返した。河の大波に攫われて死んだ男女の事が話題になった。夕食会も、月の満ち欠けの具合で、月に一度その水量によっては現れたりもする川床で催されていた。白い布が張られ、死んだ彼らの面影を偲ぶ影絵が、披露された。牝馬は嘶いて振り上げた前脚が白い布を波打たせたが、影絵の輪郭が余りに生前の彼らの体格にそっくりで、誰も馬を遮る必要を感じなかった。人型のゴムが、自分が乞食だった頃の事をこっそり語り出した。過去を美化して懐かしむという魂胆は見え透いていたが、途中からそれは怪しくなって、今も乞食同然の境遇であると明かされていたは、話しの筋は宙に浮いた。過去と今とは必ずほんの少

しでも何かが変わっていなければならない、その確信だけが話しを続けさせるようだが、その変化は見付かりそうで直ぐまた見失われ、それは河岸に寄せては返す波にも擬えられて、何も聞かずその波だけに目を凝らす方が心楽しめた。そしてその波の或る一条が、月明かりの具合か、それだけ変わった色に輝いて、鈴の音さえ立てそうに表面に繊細な肌理を描いた。それは卓を囲む下まで流れて来て、脚を濡らした牝馬など置物のように大人しくなった。波は影絵に掛かると、その布をひらりと駆け上って反転を繰り返し、男女の形の影絵の輪郭を激しく震わせた。それらはもう人には見えず、人以上の何かに違いない。居合わせた誰も扱えそうにないなら、祭司が呼ばれなければならない。間違ってか、挿絵画家が来た。彼は一心に写生を始めたので、様にはなっていて、それなら祭司の代役として務まっていないか。場の雰囲気は大体それで一致し、写生の出来栄えが期待された。しかし鉛筆が薄過ぎて、白い画用紙にただ爪で跡を付けているのと大して変わらず、出来を確かめるまでには相当な忍耐が要りそうだ。短気な一人が画帳を取り上げ、その描き掛けの一枚を破って皆の目に届くように翳した。爪跡すら見えない真っ白な長方形の強さが、震える影絵の白い布と関係でも結んでいるように向き合って、それは祭司の仕事に見えた。仰向けに動かなくなった挿絵画家の顔にも恍惚の色が差し、何の不足もなく祭儀は執り行われている。そう確かめられた事にして、人型のゴムは、お人好しの資

産家からその愛人を奪った話しを始めた。誰もそれを耳に入れようとは望まず、あちこちからでもっと別のまるでお堅い話しが、妙に力ない声で囁かれた。いや、それならどうしてもっと大声で話されないのか。別の話しをする振りをして、人型のゴムの話しの筋を追っていないか。どの話しも、岸辺に寄せる波のように盛り上がり掛けては途絶え、その内、話しが尽き、沈黙が覆った。人型のゴムだけがぶつぶつ言っていたが、ゴムの擦れる音にしか聞こえない。牝馬の出番が期待されたが寝ている。「もういいだろう」と誰かが言えば、それでいいに違いない。いや、本当に誰かがそう言えば、却って何一つ良くはなくなり、今宵の一切が台無しに成り兼ねない危うさが、微かに気付かれてもいた。それなら、ゴムの擦れる音の已まないのは当座の慰めであり、祭儀の潤滑油ともなった。それでもその音に紛れて、子音を連ねるだけの耳元で囁かれてさえ意味の取れない小声で、移民の相談がされ始めた。それは、意味の取れない声と声で行われていただけ、互いの意思は通じた。少しでもそこに意味の取れる言葉など紛れ込めば、生臭さに鼻が曲がって、吐き気がして、話しはご破算だろう。子音だけの小声の途絶えない事だけが、影絵の震えを鎮められるだろうか。虚しい期待でしかないようでもある。どれ程の小声であろうと、それが影絵の震えに乗り移る事はなく、死んだ彼らの口から、移民の話しは語られ得ないのだから。挿絵画家だけが元気付き、寝相の悪い牝馬の色々な姿を、濃く柔らかい鉛

筆で写生し続け、画帳を一冊使い切った。その描き出された艶めかしい姿態が、移民への願望を凌いで、ゴムの擦れる音を慰めとせずにも済んだ。次の輝く波が待たれる。それで必ず画帳の牝馬は血肉を得、祭儀に添える挿絵となって、牝馬の闖入以外の、ここで起こって来たあれこれを悉く忘れさせてくれるだろう。ゴムの擦れる音が耳障りなだけになって、苛立つ空気に挑発された下らない争いでも起きない限り。…それから私達は、可笑しくもない話しに馬鹿笑いを添えながら、川を背にそぞろ歩いて、まだ川音の僅かに聞こえる窪地の草を皆で刈り、木切れで土を引っ掻いて四つ辻を描き、それぞれの糧を得る準備に勇んで散った。(二〇〇七年三月十二日)

(体の柔らかい…)

体の柔らかい女は娼婦になるべきだ。体の柔らかい男は、同じ類を相棒にして、蛸になるべきだ。二人の体を捩り合わせて、二本ずつある腕と脚をくねらしせ、八本脚に擬えて、蛸蛸と叫べば蛸だ。さてそんな蛸からすれば娼婦をやってる女なんて気楽なもんだ、と思っている蛸を、女はどう思っているだろう。蛸にすれば、その蛸の姿を映す娼婦の目が、お気楽な蛸の動きによって、何処

までも暗く暗く沈んで行くなら、それこそ蛸として生きた甲斐があったというものだ。間違っても、男のお気楽さに向けて侮蔑の色でも女の目に混じり、僅かでもその口元を綻ばせたりさせようものなら、冷たくなって何処までも深海に沈んで行かなければならないのは蛸だ。ただ勿論それは蛸であって、男はそれを深海の深さでも測るように見下ろしていれば、何という事もない。暗く暗く沈んで行く目で。或いは以下のようにも言える。体の柔らかい男は男娼になるべきだ。体の柔らかい女は、同じ類を相棒にして、蛸になるべきだ。二人の体を捩り合わせて、二本ずつある腕と脚をくねらせ、八本脚に擬えて、蛸蛸と叫べば蛸だ。さてそんな蛸からすれば男娼をやってる男なんて気楽なもんだ、と思っている蛸を、男はどう思っているだろう。蛸にすれば、その蛸の姿を映す男娼の目が、お気楽な蛸の動きによつて、何処までも暗く暗く沈んで行くなら、それこそ蛸として生きた甲斐があったというものだ。間違っても、女のお気楽さに向けて侮蔑の色でも男の目に混じり、僅かでもその口元を綻ばせたりさせようものなら、冷たくなって何処までも深海に沈んで行かなければならないのは蛸だ。ただ勿論それは蛸であって、女はそれを深海の深さでも測るように見下ろしていれば、何という事もない。暗く暗く沈んで行く目で。それはそうと、毎夜のように（男をではなく）男娼を買って飽きない女を知っているのだが。知っているどころか何故か、その彼女の行動を日を遡ってでも逐一あり

ありと思い描けてしまう。一度たりとも断じて蛸であった事などないのに、自らの体験のように、（二〇〇七年四月一日）

（僅かだが角度が…）

　僅かだが角度が変わると、雨に毒が混じって見える。それで甘かった雨粒も、吐く瞬間、空気に触れて苦い。雨の落ちる範囲は何時の間にかだいぶ狭まって、もうそれは端から端まで見渡せる。こちらへ傾く楕円の中だけが黒く濡れていて、その外には乾いた透けた空しかない。雨は狙いを定めていたに違いない。楕円の毒の拡がりの切り開かれるために、雨は利用されたのだ。もう雨ではなく楕円に被さる霧で、風に吹き流されそうでも楕円の上を回って、毒に毒の威力を教え込んでいる。その毒の場所は大変な脅威で、恐れに堪え切れなくなって突撃する者達は悉く打ち破られた。彼らの屍は楕円の表面に織り込まれ、規則的な刺繍が浮かび上がった。それはしかし霧を行き惑わせ、楕円は斑に曇って毒もだいぶ薄まっているとも見えた。もう突撃するまでもない、と誰かが呟いたのが間違いで、毒は楕円の外にまで黴のように拡がり出した。次の雨は恐らくその楕円の外にだけ降って、その毒を流すだろうか。しかしもう雨は降ら

ないと伝えられた。その伝言は楕円の中で増幅され、楕円の外の拡がり続けるよ毒にも届いて、毒は根を下ろすように深い方へも降りた。いや深い方と言うより、その毒がそこに深みを作り出していて、毒だけでなく毒でないものも、そこへ流れ落ちて行く。実に効率の良い刑場となりそうだ。と言って刑を言い渡す者も居ないので、眠気に負けて倒れ込んだ者達が、独りでに自らに死を与えるだけだ。しかしそこは全く静かなままではないか。その静かさだけで、睡魔と戦う者達は震え上がって、直ぐに石のように動けなくなった。ただそれでも、動けないのは楕円と向き合う時だけで、楕円を忘れてさえいれば、日頃の習慣になっている事柄は全てこなせた。ただ新しい事をしようと少しでも思うと、途端に、その静かさの毒が回るように、動けないでいる事の他に関心が向かなくなってしまう。そして動けないでいる事は、どう考えても、それが或る間違いから始まっているとは推し測れても、狂ったように何も変わらない。相変わらず楕円の姿をそのままに見て取れるなら、楕円に落ちている訳でもないのに。蜂のように強い羽根と毒を蓄える強い腹を持って飛べば、楕円を震わせる事も出来ようか、などとも考えるが、それは別の事を考えているに過ぎないだろう。全く楕円とも毒とも関わりのない所から落ちて来た考えで、しかしそんな別の事も考えられるなら、一縷の望みも繋がりそうだ。いやそんな余所事が紛れ込んでしまうのこそ、もう毒が回っている証しでは、と気付いてしまう事は更に

事態を悪くさせる。椿円ごと縮こまって行くようだった。目を閉じようにも頭を抱えようにも、蜂の羽音で、椿円の毒以外何もかも掻き消される。そしてもう蜂の羽音を聞く耳の中にしか椿円は見出せない。いやそれは見出せたという事でもなく、ただ消えた椿円の後を追える時が来るのを待っているだけかも知れない。(二〇〇七年四月五日)

(言い伝えなど、疾くに…)

言い伝えなど、疾くに何処かで途切れていたに違いない。伝えられた通りを伝えている振りをして、口から出任せの話しを拵えるのは訳ない。ただ下手に自分に有利な話しにしようとしても、聞き手は大抵疑り深く、そこだけあっさり削ぎ落とすだろうか。寧ろ逆だ。話し手に有利な事を、聞き手にも利が有るとり思い込ませたなら、その話しはぐっと粘り気を増して、口から口へ耳から耳へ、なかなか途切れたりしなくなりそうだ。その話しが庭の隅で伝えられようとしていた。問題はその庭土だ。廃棄物を粉々に砕いたもので、只で運ばれて来た。爆弾の上にでも乗っているようにピリピリして、口伝えの調子も刺々しく、それを聞き取らねばならない耳はさぞかし辛いだろう。話し手に向けられ

た方の耳の穴からはもう血が滴っていた。話し手はそれに気付いていて、血が庭を汚さぬよう合わせた両手でそれを受けていたが、もう溢れそうなので、聞き手にそれを飲むようにと言って、その口の前に両手を差し出した。聞き手がその血を飲むと、話し手はもう話す事がなくなって黙った。伝授は一度切りで決して繰り返せない。聞き手もそれは心得ていて、ただ血の事だけしか頭に残っていなくても、何も聞き直せなかった。話し手の態度からして、自分にも得になる事が伝えられたに違いないが、聞き手には皆目見当が付かない。来し方を振り返られる限り振り返ってみた。すると自分は損ばかりして来たような気がするのだから、正に話しにならない。得になる事が一つも思い浮かばないのは、こんな安物の庭の隅で寝泊まりしているからだ。これを機にこんな生活を打ち切って大海原に乗り出すべきだ。実際庭の周りは、石の回廊が取り巻くその外は海だった。その海は全方位見渡せるのだが、問題は石の回廊でとても入り組んでいて、その隙間に何が潜んでいるか知れたものではない。結局聞き手は毎度のように直ぐに諦めて、自らを鞭打った。その身に食い込む快感だけは、彼を何か得した気にさせる。目が霞んで回廊はぐらぐらと揺れ、海原は黄ばみを帯びて遠ざかる。話しを伝えに来た者の、地面を擦る程に丈の長い上着を纏った後ろ姿の小さくなって行くのが、不意に目に留まる。その上着の裾は綻びていて、回廊に黒い糸屑を次々に落としている。それは途切れそうで途切れず、

その糸屑を辿れば回廊を抜けて海辺まで出られるのではないか。そう思うと、血が忘れさせた言い伝えの中味が少しだけ甦った。それは「糸屑を拾い歩くべからず。禍の元だからである！」だった。そうだ、それに第一そんなのはみっともない。心が少しだけ安らいで、鞭打ち以外で初めて何か得した気になれた。あの者は裏切り者なのだ、そして自分はそれを見破ったのだ、と彼は昂ぶって、潮風が糸屑を吹き散らすのを、歌いたい気分で楽しみに待った。が体は逆で、ふらふらしながらも一番近い糸屑へと黙り込んで歩を進めている。がそんな状態で巧く行く訳がない。早速回廊の狭く深く歪んだ隙間に体は嵌り込んで身動きが取れない。改めて自らを鞭打ちたい、そうして目を覚ましたい、しかしそれは叶わない。僅かに身震いだけは出来たので、ひたすら身震いだけした。するとその嵌り込んだ隙間は何処か裏の方へでもひっくり返って行くようだった。空が傾くので分かる。するとその空に向かって犬のように吠える事が出来たので、ひたすら犬のように吠え続けた。もう鞭など要らないのだ。打っても痛いだけで馬鹿げてる。一瞬目の奥に或いは喉の奥にか、火の手が上がり見る間に拡がって、見えている世界を燃やし尽くすようだ。その火を説明さえ出来たなら、その燃え落ちた先のものによって自分は大いに利を得るだろうか。その火の説明が、庭の隅で言い伝えられたのではなかったか。そう考えて彼に出来るのは、一面の火の海を血の海に置き換える事だけで、いやそれは見事な説明に

なっていて、そうして彼はその燃え落ちた先のものを、力強く搏動する二つめの心臓をしっかり掴み取るようにして、己のものとした。とそこで、ヒリヒリした喉で到底吠えたりなど出来ず、逆さまに狭い石の隙間に挟み込まれた自らの姿を見出し、その弓なりに反った胴体の酷く薄っぺらなのを気に病むばかりになった。薄っぺら過ぎて、そこにはもう血など通えないのではないか。ならばせめてその胴を何かで綺麗に飾りたいと思えば、逆さまの目から涙のように真珠が零れ出るようで、それらが彼の体の向きを直し、更に石の隙間から彼を押し出した。火の海も血の海も跡形もない、また四方を囲む水ばかりの海と向き合うしかないが、彼の擦り剥いて血の滲む膝頭にはあの糸屑がこびり付いていて、その繊維の中に僅かずつ染みて暗い色に尖って固まって行く自らの血を、目で見えるかのように頼みとした。廃棄物の土の匂いが鋭く鼻を付き、振り返って見渡せる我が庭の形は、幾ら貧相であっても信じられない程に酷く入り組んでいて戻れそうにない。それに比べて石の回廊はずっと平板で、ただその平板な中に数え切れず深い裂け目や歪な傾きが犇めいているだけで、得も損も俄には見付かりそうにない。聞き手さえ現れれば、そいつの顔付き次第に幾通りにも口から出任せの秘儀伝授など出来るのに。（二〇〇七年四月十七日）

（ドブに身を…）

ドブに身を投げ真っ黒な汚泥に塗れて歓声を上げる娘達には呆れる。泥に薬効成分が含まれているという話しだ。それでか、ずっと娘達は若いままだったが、短い間に流行病で次々に命を落としたとも聞く。しかしそんな深刻な病でもなかった筈だ。一人だけは残って今も汚泥に塗れている。本当のところを聞いてみようと近付くと、彼女は全身ドブの泥の中に身を埋めて幾ら待っても出て来ない。ドブの底を流れて行ってしまったのかも知れない。何時の間にか私と肩を並べてドブを覗き込んでいる男が、自らを医者だと言って痛そうに更に腰を曲げた。ドブに杖を落としたが知らないか、と尋ねると医者は、勿論それは知っている。杖が何処かは知らない、と答えた。娘と同じ方だろうか、とまた私が尋ねると、何故私の娘の事を知っているのだ、と医者は少し驚く振りをして立ち去った。ただドブに汚泥を流しているのは病院で、直ぐに後を追えた。診察時間は過ぎていて、院内には誰も居ない。壁に小さな絵が掛かっているらしいが、小さ過ぎて殆ど見えない。杖なしに歩けるのは、そこまでだった。私はその場に頽れたが、顎をガクガクさせながらも顔だけは上げて絵を見詰め続けた。絵の位置さえ見失われたが、絵に何が描かれてあるかは見て取れた。絵は真っ白だった。白は応用が利かないからな、と後ろから医者の声がした。

では黒なら絵はこんなに縮まずに済んだのか、と尋ねると、黒を絵に描く事はまずは無理だ、黒を正確に描こうとすれば、絵の画面が世界と同じ大きさになってしまうだろうな、と答えが返って来た。だったらそうすればいいじゃないか、白は描けたんだから、と言うと、いや、白も正確には描けていない、ちゃんと描けたなら、完全な一点になって君のような通りすがりの者の眼で気付かれる事はない、実際この絵に気付いたのは君が初めてだ、僅かに灰色が混ざり込んでいるのを君は見逃さなかったという訳だな、はっきりとは分からないが、何処へ行くにも君がずっと杖を使っていて、今その杖をなくしてしまって無理としてここまで辿り着いた君の眼に、常とは違う視力が備わったからだろうか、と医者は言った。お前は眼医者か、いやそんな事より、その灰色とはお前の娘達か、自分の娘を絵に塗り込めたのか、と詰め寄ろうと思ったが已めて、何時どうして杖をドブに落としてしまったのかと、繰り返し黒い汚泥ばかりを思い描いていると、頭の中がどんどん黒く塗り込められて行くようで、医者の言う通りなら、私の頭の中が世界と同じ大きさまで拡がってしまいそうだ。そんな白の事なんて誰も知らないし気にも留めないだろうから、その僅かな灰色について調べられる事もなさそうだな、娘なんてほっとけば勝手に居なくなるもので怪しまれもしないだろう、と私は譫言を言ったかも知れない。医者はそう聞き取ったのかどうか、そうか君は白が欲しいんだね、ずっとそうだったんだ、で、

ここまで来られた、でも黒い汚泥を幾ら覗き込んでも白は見付からないよ、いやその中に白が混じっていない訳じゃ決してないんだ、ただそこに杖を突っ込んで掻き回した位では白は出て来ないよ、勿論そうしたい気持ちは分かるがね、だって君には殆ど万能の杖だろうからね、と言ってしゃがみ込んで私と肩を並べ、そうなんだ、君がさっき言った通り、完全ではないにしろ白を描けたなら、完全ではないにしろ黒を描きたいんだよ。と囁くようでもその声は私の頭の中を吹き荒んだ、真っ黒く。それには杖が必要なのだ。杖が実際何色であっても、世界大の黒の前ではそれは、完全な黒に混ぜられて、僅かに濁らせた黒にして、それを目に見えるようにするための灰色でしかない。それが私の頭の中に投げ込まれれば、ほぼ世界大の黒い絵が遂に日の目を見る。そのために最後の娘はその杖を探して今もドブの底を這い回っている。そのための情景を思い浮かべている私は、もう殆ど医者の望む通りの黒い絵ではないか。いやその情景を思い浮かべているとしたら、その方が大いに困る。杖を失くした身であれば。寧ろそうでなかったとしたら、（二〇〇七年四月二十七日）

（髭の女は…）

髭の女はか細い声で泣く。或る嵐の夜、死ぬ夢を見たくなくて、眠らずに居るために覚えた技で、だからそれは夜にしか通用しない。死ぬ夢などよりもっと酷い事柄が、白日の下に剥き出されて流れて過ぎて行く昼間の光景を前にして、蹲って肩を震わせたところで、泣き声もよちよち歩きの幼児の靴音も、泣いている本人にさえ区別は付かない。それまでに溜め込んでいた感情を全て吐き出す積もりで、それよりもっとか細い声で叫ぶしかない。夜に濡れてまだ湿っていた髭も乾いて尖ってピンと立つ。それで何とか身を保てる。しかし感情を全て吐き出してしまってそれが容易には戻らないとなれば、声はもう声ではなくなって、物と物の擦れる音と変わらない。が叫びが絶えたのではない。と言って、声なき声で叫び続けているのとも違う。叫び声は彼女を離れて、あちらこちらの白く平板なものの上を渡る。それを見付けても、戻らない感情についての手掛かりは見付からない。寧ろ叫びは白く平板なものの奥に埋め込まれた、既に死んだ感情の甦りを抑え込んでいるとも見える。ただ銀メッキの曲面でだけは叫びは滑って、害されて切れ切れにされた感情の絡み合う様が映った。自分の心の底を自分で見透かしてしまったようで、その夜、髭の女は、腹の中が銀メッキされている夢を見てしまうのではないかと恐れて、か細い声で泣こうとしたが泣けず、自分の腹を割いて、臓物全てが銀色に光っている夢を見る羽目になった。それでしかし次の日から、昼間、叫ばなくてもいられるように

なった。勿論、叫びたくても叫べないだけだとも言える。実際、叫ばないのだから同じ事だが、ただ黙っていては、世界は女の髭のように鋭く尖った叫びに満ちていて、耳を聾する。そのままでは身を保つのは難しい。銀メッキの曲面の中にまた、壊れた感情を探すしかなかったが、どれもただの銀メッキでしかなく、そこに映るのは、土気色の自らの髭の顔だけだった。その歪んで引き延ばされて千切れそうな顔に何の表情も浮かばなければ浮かばない程、それをじっと見詰めていれば、それで彼女の身は取り敢えずは支えられた。夜になった。銀メッキの中の顔は暗がりの中に溶けて、ドロドロした影にしか見えなくなった。それでも女の髭のように尖った叫びは、已むどころか、世界の端までを貫いて耳を劈いた。死ぬ夢でも見たかったが、叫びは夢など寄せ付けず、彼女はその叫びの姿を、鏡に映した自分の髭のように、念入りに眺めていなければならなくなった。そこで髭を落とした瞬間、世界が丸ごと、彼女から落ちて行く。そんな選択は彼女にある筈はない。髭も世界も惜しくはないが、髭を失くした女など何の役にも立たないゴミとして、その場に捨てられるだけだ。片付けられもせず、燃やされも解体もされず、触れられる事など決してない。眠れないまま次の日が来て、銀メッキの中の自分の顔とまた対面は出来たが、直ぐに目を背けた。目を背けた先の昼間の光景は、何処も白く平板で、やはり女の髭のような尖った叫びもそこを貫いてはいたが、その凶暴さも、その白く平板な中

に収まるしかないのではないか、それが彼女の身を支えたところで、害したところで。恐らくそれで、彼女の身は支えられてもいて害されてもいるだろう。或いは全く見当外れの事を気に掛けているに過ぎないのかも知れない。髭に付ける香水のように。いや案外その香水が、一切を片付け燃やし解体するようでもある。それで女は、剥き出しの昼間の光景の一部となって、そしてそこから外れる一部ともなって、流れから隔てられた先に、何も待ってはいないが構わないと、銀メッキの腹を固めて。そんな選択も彼女にはない。何故なら、女の髭の香水は夜の匂いが度を超して強いので、昼には向かない。死ぬ夢のように取るに足らない。夜になればなったで用はない。さて少し戻って、銀メッキから目を背けた先からも目を背け、その目を背けた先からも目を背け、昼夜もなくぐるぐる回っていれば、尖っていた髭も柔らかく靡いて、尖った叫びに貫かれた世界も回り出せば、初めからこの話しの落ち着く先も、剃っても剃ってもも生えてくる女の髭に似た、用を為さない堂々巡りと定まっていた訳で。（二〇〇七年四月三十日）

（水は何処にでも…）

　水は何処にでもありそうだ。何時からか身に付いたその水を飲む楽しさが、速歩で風を切って進むのを詰まらなくさせる。それで態と重い汚い服を着て、敗残者のような息を吐いて落ちて行こうというなら、叢の中にそれに相応しい抜け穴を探さなければならない。或いは、汚い服は、地面を転げ回って踊るのこそ相応しい。そうして踊り続けていれば、喉が渇けば全て水に流して、また水を飲みに戻ろうと出来る。そんな見通しも立てば、風ばかりか光りまでも切り取って腹に収める積もりで行けば、直に追い風になって、速歩に進む楽しさも思い出せよう。そう来れば、穴を見付けても、ただ可笑しいだけだ。水小屋の窓辺から見渡せば、吹き抜ける風に草が波打って倒れて、穴は次々に見付かつて、笑いが止まらなくなって、また踊るしかない。居合わせた光る熊と踊つているものだと思っていると、熊だけが独りで踊っていて、休む度に熊は水を勢い込んで飲んだ。それで更に踊ると獣の重い水腹が波打って、熊は泥のような水を吐いた。その零れた地面は赤くなってゴッゴッと脹らんで、光りの失せた熊は行方を眩ませた。それで何が残ったか。恐らく私らしきものだけは平然と、嘗てそこから水の湧き出ていた真上に居た。いやその私らしきものが泉を踏ん付けて立っているせいで水は絶え、山を下りるしかなくなった熊も、水の涸れる後の事を見越して、光りに寄り添おうとしていたに違いない。それを愚かと嘲る前に、先ずは今居座っている所から身を引くべきだが、そんな事が出

来るなら疾くにそうしていた筈だ。その私らしきものも、汚れた風の影の吹き払われるように流れて消えると、やはり確かに初め光る熊と踊っていた、何処にでも水を見付けてしまう者が、重い汚い服を脱いで、晒された柔らかい肌のすらりとした背中に、湿った緩い風を当てた。その背中が感じたのは風ばかりでなく、いや風など少しも感じず、それはそこに光りのように流れる、その者自らの、水を呼び戻そうという覚悟だけが感じられていた。それはしかし、直ぐに消えた。消えて良かったのだ。もう水は決して戻れない所へと失われたのだから。そうして風に似せた色の軽い服に着替えて、風を切って鋭い足取りで歩き始めたが、本当に自分がそこにそうして居るのかどうかが、どうも定かでない。雲間に現れたり隠れたりを繰り返す陽は、歩く姿にうっすらとも影を付けようとしないではないか。自分は、風の中にだけ居られる、風を切ってだけ、自らの姿を自ら認められる、或いは認めたと思い込めているだけの、影だけのようなものではないか。いやそれもそれで良いのだ。そうと定まれば、考える事など已めて風の中に消えて行ける。消えて行ったところで、決して消えたりしないのだから。そこが水と違う、と思った瞬間そこは、失われた水の流れるだけの、決して戻れない所ではないか。失われた水を何処までも眺めて行くとは、何と楽しい事か。そしてそれを楽しいとさえ感じられたなら、それを眺めるまでもないし、楽しいと感じるまでもない。何一つ、決して消えたりしない

のだから。初めから、或いは光る態に免じて途中からでも一向に構わないが、消えてもいて。（二〇〇七年五月三日）

（道を尋ねられたが…）

道を尋ねられたが答えられない。全く平坦で見通しも良いのに知った道でなかったとは危うい。慌てる間もなく、ここからそこまでは弾丸が飛んで来るので身を屈めろ、と言う注意書きが目に入ってそこを抜けて、顔を上げると段差がくっきりと見えて蹌踉けた。段差はまだ何歩も先なのに何故蹌踉けるのか。しかもそれは継ぎ目のない石の壁に横一文字にざっくりと走る割れ目に沿って、陰翳を描き加えた騙し絵のようなものだ。ただその描かれた陰翳と、割れ目のずれが落とす本物の影とがすれ違っていて、それが遠近感を狂わせるのか均衡を失い、その場に俯せに激しく倒れ込んだ。或いは立ったままその壁に激しくぶち当たったか。どちらでもない。立ち塞がっていた壁が横倒しになっているからだ。どうやらその割れ目の段差に実際に躓いたらしい。今立ち塞がっていた壁と今倒れている壁とを繋ぐ時は、何処でどうなってしまったか。或いは、その二つの時の隔たりが作る段差に躓いたのか。いや突然時の一部が抜け落ち

る訳もないなら、私の時に対する遠近感が狂わされたのか。横倒しの壁に腹這いのままでいる内、その時の僅かな勾配に気付いた。平坦な上に倒れたのに勾配があるのは、その下にその何かが挟まっているからだ。抜け落ちた時が壁の下敷きになっているに違いない。そう確かな手応えで感じ取れてしまう私も、前後の繋がりを絶たれて行き迷っている時の切れ端ではないか。用心深く辿々しい蛙のような動きで、その勾配に腹を擦り付けて進んだ。壁全体が微かにカタカタと響く。傍から決して聞き取れない、密着した腹にしか伝わらないその音は、壁の上の静けさを際立たせた。そこでは恙なく時は繋がって行くだろうか。だとしてもそれは私の上をただ通り過ぎて行くだけ、などと思っていると勾配が消えていた。或いはその勾配から私が消えたのか、煙のように。声が掛からなければ、その煙の私も吹き払われて消えていたかも知れない。「そんな僅かな勾配に馴染んで一緒に消えてしまえる程なのに、それでも答えられないなら、一体誰に答えられるのかね」聞き取り難かったが、さっき道を尋ねて来た声だとは分かった。「で何を問うているのですか」と私は問い返した。「ここからそこまでだよ」「立ち塞がる壁から横倒しの壁までの時の事ですか」「それに限らず何によらず、この平坦な世界の何処を取っても、常にその、ここからそこまでだけがあって、他に何があるのでもなく」「つまり私にとってあなたは、ここ・私からそこ・あなたまでの問題でしかないと。そしてあなたが去れば、た

だ私のここからそこまでがあるだけなんですね、それで」「十分じゃないか」「どう足掻いてもここからそこまでから逃れられず、囚われたままでも」「囚われてこそさ。逃げ切ったところで、そんな奴らは全て消えたよ。初めから何もなかったように」「しかし忘れ去られないものなんて、ないでしょう。初めから何もなかったかのように」「そんな事もまた、ここからそこまでの問題だよ」「では時も」「時なんて幾らでも抜け落ちる、気付かないだけで。地震計でだけ計測出来て体に感じない地震がのべつ起こっているようなものだ。そうして止め処なく抜け落ちて世界を揺らして転がして行く」「あなたもまた、その抜け落ちた時の切れ端ですか」「まさか、私は君のこめかみを撃ち抜いた弾丸だよ」「それでハッタリの積もりですか。そうなら私には、ここもそこもない。時の切れ端の私と話せるあなたもやはり同じ類でしょう」「君が自らを時と言い張るなら、頭蓋の弾丸の入り口から出口までだ」「喩えにもなっていない」「ここからそこまでも、喩えにはなっていないよ」「実際、喩えじゃないからでしょう」「いや、どんな喩えもここからそこまでだが、ここからそこまでは喩えじゃない」「そんな事があるんですか」「我々の遣り取りも喩えだが、それには曲がりなりにも喩えでないものが、嘘でも欠かせないからね」「そうか、それで分かった！　その嘘でもに躓いたのが私なんですね。だから私は消えても消えても煙と違ってまた現れるんですね。欠かせないものにずっと躓いているんだから。

地震計でしか測れない微かな揺れの連続が私だったんだ！」「君はただ自らを一つの喩えにしているだけで、何も得ていない。感嘆符を付けられるような事などまるで」「だったらどうしたと」「もう一度道を尋ねたいんだが、（二〇〇七年五月六日）

（何によらず、理解されている…）

何によらず、理解されている事は、実は全く理解されていない。理解する、とは別の事が、理解する、として理解されてしまっている。つまり、理解する、という事が何であるか理解されても理解されておらず、その理解されていないという事も理解されていない訳だが、理解するという事が理解するという事と別の事であっては、どうという事もない。とそのように理解されても、それは理解されていない、となるが、その理解されていないのが何なのか、となるとそれは、理解されている事、であって、そうであるなら、全く理解されていない全ては、理解されているしかなく、理解されている事が理解されるとは何なのかに過ぎない。そう理解されても理解されていない。抑も理解されていないのか。それが理解されないにしても理解されるには、何が理解されなければなら

ないか。どのようにかそれが理解されても、実はそれが全く理解されていないのである限り、その理解されないままであると理解されるしかない。そう理解されるしかないが故に、何も理解されない。ではそこで、何事かが理解されてもされなくても、その理解するしないは、ありもしないのと同じで、ただ初めから終わりまで何事かだけがあって、そのまま何事かだけが残る、としてみてはどうか。しかしそれもまた、そう理解されなければ始まらない、となれば文頭に戻る。戻って、ここまでの呪文を繰り返すだけだ。いやそうとも限らない。戻るとしても戻るに値しなければ戻らないのと同じだし、それがそう理解されても理解されないのでもあれば、戻る戻らないについても、理解されるもされないもない。であるならやはり、何事かだけが残る。しかしその何事かだけという事が、それを巡る、理解される理解されないを引き起こしてしまうしかないのであれば、決して文頭に戻らない所まで辿り着けたのでもなく、その引き起こされた中を、当てもなく彷徨き回るしかない。そうなればもう文頭は易々と踏み越えられ、そこが文頭でなければならないという事もなくなりそうだ。或いは、ここまで書かれて来たこの文がなかなか文末に辿り着けないのは、それに相応しい文頭を見付けられていない事に端を発していないか。それに適う文頭でさえあれば、そこに一切は解決を見て、枝葉末節を切り取れば、それより何も起こらない。そしてその起こらない事が、見逃され知られもしないせい

で、そのまま理解されさえしなければ、そのままに投げ置かれて何も起こらないままではないか。それがそう理解されて、全くそう理解されていないにしても、その理解されていないという事は、ただ全く理解されていない、という事ではない。初めから理解されないままの事が、そう理解されるのを経て、理解されていないのだから。それもまた、そう理解されさえしなければ、何も起こらないだろう。いや、その何も起こらない事の他に、それとて何事かであるしかないなら、それへの問いは些細なものであっても残る。しかし問いとは何か。それもまた理解されたところで理解されない、のであるから問える、と理解はされる。理解するとは別の理解されていない事として。であるなら、何事かへの問いは、その何事かと別の事ではない。そしてそれでも尚、その何事かへと、問いが回収されないなら、それは問いを問う問いでしかなく、それで何が問えるのでもないのであれば、この文はゴミ箱行きが相応しい。ただ残念ながらゴミ箱へは、取り敢えず確定されてしまう文頭から文末までが放り込まれるだけで、それで何を捨てた事になるのか。いや改めて捨てるまでもなく、何事かが何事かであるだけで、理解されるもされないもないままこの文を書いている者がゴミだし、その言うところの何事かもゴミであり、その理解されるされないにしても、ゴミからゴミへの事に過ぎない、となれば、この文によって表されたのは全てゴミ箱の中の事と同じである。しかしゴミを無用のものとして取り

除いても、或いはゴミを愛さないまでもそのまま放置しても、やはりその事は、事として残る。そこに閉じ籠もってさえいれば、ただそのままに居られるだろうか。勿論その問いも問うに値しないのは明らかだ。いや問うたのではなくそう願ったのだ。その願ったと理解されるのも、それとは全く別の事で、そうしてその壊れ易さが際立てば、そこに閉じ籠もる者もまるで儚いのであり、その無用な姿ばかりは、そう理解されるままで構わないと、理解されて構わないのではないか。それが、理解されていない別の何かである事からして、無用であるに違いなければ。ここを文末と思い定めても詮ないが。（二〇〇七年五月二十一日）

（順に三つの…）

順に三つの音が回り出し、虚ろな三角形が転がるのだと、それを留めるための螺子を探した。星座の動物を印刷した冊子に挟んだ筈で、その読み掛けの頁から滑り出る、紙飛行機のように先を尖らせた潰れた袋は、見掛けより硬く攻撃的な手触りだった。中に螺子を仕舞った覚えはない。念のため口を開くと、そこだけはふわりと柔らかく、中を覗けはしたが白っぽいだけだった。そこに

微かに焼け焦げた匂いが昇って、転がる虚ろな三角形を歪め、その様を書き記すにはそれに相応しい星座の動物を用いるべきかと頁を繰っても、しっくり来るものを選べないまま奥付まで来た。そこに押された版元の印は、三つの音が繋がったまま回る様を描くようで嫌でも目に留まる。三つ巴とは似て非なる形で、その違いをはっきり見極めようとする程、動いて定まらない三方から形全体はぼやけ、尻尾を掴まれまいと身悶えするようだった。それもまた、焼け焦げた匂いの煽りを受けて何処か僅かずつ歪むようだが、それも絶えず動いてぼやけてしか捉えられない。仕切り直しに目を逸らしたが、目より体が先にそちらに向いて、その印は目の前を動かない。それならと冊子を閉じたが、汚れた緑色の裏表紙に、その印の形は移って来た。周りの緑の汚れを細かく震わせ、それは撮み取れそうに盛り上がるようでもある。いや実際に赤みの影が弧を描いて片側を縁取り、それもまた細かく震える動きを見せて来れば、そこに小動物が乗っかるのと変わりない。しかしそうして三つ巴とは似て非なる形を保っていても、それには色がない。と言って、形が見えるからには透明である筈もない。肉の厚みまでは見えたが、或いはその神経の交流さえも見えたかも知れないが、色のない動物はあり得ない。それはやはり音なのだ、或いは音と親しく繋がる、物体の埒外にある何かなのだ、と決めるのは容易い。などと時を過ごす間に、焼け焦げた匂いから濁りが抜け、大地から或いは天空からも奪い

取った熱を若い命が立ち昇らせるような、清く澄む程に粗暴でもある香りに変わっていた。それは、転がる虚ろな三角形の歪みを正すばかりか、三角形がその形であり続けるために欠かせない、三角形固有の歪みまでも取り除きに係って、それでもそれがギリギリ三角形に踏み留まるなら、正され過ぎて反転されたかのような歪みが、皮を剥がれた剥き出しの肉のようにそこに纏い付く。それは既に三角形ではなく、その記憶が浮かぶに過ぎないか。尤もそうであったところでそれに変わりはない。それでもそれが転がり続けているかどうかだ。いやそんな事が問題なのか。そうしている間に、見過ごしに出来ない事が気が遠くなる程に見過ごされている。その一番端の尻尾の辺りを一瞬捉えたその姿が、いきなり順に回る三つの音になって虚ろな三角形を転がしただけだ。（二〇〇七年五月二十八日）

（これは爆弾だ…）

「これは爆弾だ」断定的口調だったが、それがこれから爆発するのか、爆発そのものと向き合っているのか。これから爆発するのなら、それは捉え所のない茫洋とした水の底をうねる砂のようなもので、これが爆発そのものなら、そ

れはとても静かで透き通って滑らかな僅かに傾く大きな水面のようだし。しかし、どちらも見当違いなのでは。これは爆弾だ、と言う声の中に爆弾が潜んでいるか、或いは今その潜んでいたものが爆発しているか。いやもうずっと何も聞こえてはいない。それならそれは声ではない。しかし声だけが言葉ではない。言葉は光りかも知れない。石の表面の凹凸かも知れないし、風の震えかも知れないし、そのどれでもない何処でもない所からも、言葉は届けられる。光りも石も風も、見当たらないし触れられないし感じられないなら、その言葉とその爆弾は、その何処でもない辺りから来たのだろう。しかし何処から来たのか突き止めたところで、何になるのか。今爆弾がどうなっていて、それにどう身を処すべきかだ。なのにそれは、少しも爆弾らしさを現さない。ただ、その言葉の意味とその断定的口調だけから、一体どんな身の処し方が導き出せるだろう。そうしている内にも、その意味と口調は、どんどんと散り散りになって、その危うさの度合いを増しているに違いない。出来る事と言えば、その後を追って、同じように散り散りになってでも、兎に角それを見失わないよう付いて行く事だけで、それも、それと全く逆の行動こそが正しいのではないかという疑念を抱いてのものだ。それが何処までも続いて行く。それは平穏な見掛けはしているが、実は、爆発に次ぐ爆発に巻き込まれたまま、その激しくなるばかりの爆発の直中で、身は果てもなく傷付けられ痛め付けられているのかも知れない。

それが杞憂であったにしても、その杞憂こそが爆弾の爆発、或いはそれを上回る破壊力を持っていて、それを抱いたまま、その言葉の終わりまで付き合わされたのでは、その方が身が持たない。尤も身が持たないなら持たないで、その終わりの手前の何処かに、どのようにか転換点を見る事が出来て、一瞬の閃光か、石の一欠片か、風の戦ぎにでもなって、この意味と口調を忘れてしまえるだろう。そしてまた、その後に、「これは爆弾だ」と、（二〇〇七年六月十日）

（足下で犬が…）

足下で犬が吠える。その吠える口が砕け、そこから犬は磁器のように壊れた。残骸はどれも硬そうで尖っていて、巧く足を運ばなければ傷を負いそうだ。足を運ぶどころか、重心が定まらず、体はぐらぐらと傾く。それは犬の残骸のせいではなく、足下の地面が定まらないからで、そこには別の犬の残骸が埋まっているのではないか。地面の凹凸が偏って、足は狭い隙間に嵌り、重心は定まったが倒れる事も出来ない。地面に突き刺さった割れた磁器の欠片のようだった。犬の残骸と間違われないためには、どうしたら良いのか。その前に、犬の残骸でないと、どうしたら自分に分からせられるのか。いや、犬の残骸であっ

て何が悪い。犬の残骸に何が出来て何が出来ないか、苦しいのか楽しいのか、まだ何も分かっていないし、（二〇〇七年六月十一日）

（誰にも知られない…）

　誰にも知られない心の中にだけ湧き起こる、とびきり悪い事を考えたい。庭で。誰にも立ち入らせない庭。心の中の一切がそこに晒される。私の悪行のせいで、災禍という災禍が庭を荒れ狂う。気が付くと、揃って高く伸びた朱い薬草の脇に、猫のような小さな背中の女がしゃがみ込んでいて、土を混ぜては白い種を蒔いている。早速心の中の女が鞭を振るって女を庭から追い出しに掛かったが、鞭を振るわれた女の、土を撫でる透き通るような細い指の動きは、庭に蔓延る悪を全て消し去った。しかしそこに別の女が来て、毒のある言葉を吐くと、小さな女は更に背を屈め、薬草の中にじっと身を潜める小さな猫とも見えた。心の悪は即座にまた庭に躍り込んで満ちた。女の吐く悪態は、その悪に向けられ、その叫喚の止まりそうになくなる程、心の悪も荒れ狂った。遂に極点に達し、その女にも激しく鞭が振るわれると、女の姿は鞭と溶け合い、それが、心の悪の一端であると知れた。鞭の女はもう悪態を吐くまでもなく、庭の

隅々まで唸りを上げる鞭となって悪を伸び上がらせた。小さな女は小さな猫らしく、知らぬ間に庭から消えた。すると鞭はただ鞭になって、女の面影が失せたせいで、何か鞭打つべき対象が見付からなければ、振るえなくなっていて、庭には心の悪が渦巻くだけなら、それに鞭を振るうしかないが、それは鞭自らを鞭打つようなもので、鞭は激しく振るわれる程、それ自身に届かなくなるばかり。そんなものを、何故庭はさせるに任せておくのだろう。小さな女の帰りを待てば済むとでも考えるのか。出て行く猫はうっかり見失っても、入って来ようとする猫は、直ぐに見付かって追い出されてしまうだろうに。そして鞭は振るわれなくなった。女の重そうな体が、薬草を薙ぎ倒して俯せに横たわり、腐乱しないなら息はしていて何時かは目を覚ますだろうが、時は待ってはくれず、次にはそこから庭が出て行く番だった。壁は崩れ落ちて土に還り、薬草に取って代わって、その土地本来の種種の草と虫が幅を利かせた。心の悪などは疾っくに散り散りで、再び帰る場所などあるまいが、（二〇〇七年六月十二日）

（塔に監禁されて…）

塔に監禁されて何日になるだろう。眠れなくなる程、力が湧いて、その力ば

かりが突き上がって目前の世界を壊すので醒めている事も難しくなって、日を数えようにも、その始まりも終わりも分かち難い。床も天井も疾っくに見失われ、風を感じる度に独りでに呟かれる声が、塔の外まで響き渡って、思いも掛けない者達の耳に届いてしまう。彼らは味方なのに、呟かれる言葉は彼らへの侮蔑と悪意とに満ちていた。前のめりは鉄粉を両手に掬うためで、それを耳に詰めた。何が聞こえなくなっているか見当が付かないが、最も聞きたくない己の呟き声だけは聞こえる。鉄粉は幾らでも掬えた。耳が一杯になると、鉄の壺に溜め込んだ。重過ぎてなかなか持ち上がらないが、持ち上げてしまえば、壺は思う様、壁に叩き付けられた。これはその壺の話し。初めからただ壺があるだけ。そんな重い壺が持ち上がる筈がないのだし、（二〇〇七年七月九日）

（穴を出て…）

穴を出て漫ろ歩いていると一軒の家を見付けた。人の気配がないので男は腰を落ち着けた。首のない女が来た。首から上が、ない。女は黙って住み着いた。初めは人形を抱くようだったが、段々具合が良くなって離れられなくなった。寝食を忘れ気絶するまでやって、目が覚めるとまた続けた。或る日、男の頭の

中に、もし女に頭があったなら中を満たしているだろうものが流れ込んだ。（その内容は、以下の通り）↓女は空き家を見付けた。そこに腰を落ち着けると、首のない男が来た。首から上が、ない。やっている内に段々具合が良くなって離れられなくなった。寝食を忘れ気絶するまでやって、目を覚ますとまた続けた。女の頭の中に、もし男に頭があったなら中を満たしているだろうものが流れ込んだ。↓男は空き家を見付けた。人の気配がないので腰を落ち着けた。首のない女が来た。首から上が、ない。女は黙って住み着いた。初めは人形を抱くようだったが、段々具合が良くなって離れられなくなった。寝食を忘れ気絶するまでやって、目が覚めるとまた続けた。或る日、男の頭の中に、もし女に頭があったなら中を満たしているだろうものが流れ込んだ。↓女は空き家を見付けた。そこに腰を落ち着けると、首のない男が来た。首から上が、ない。やっている内に段々具合が良くなって離れられなくなった。寝食を忘れ気絶するまでやって、目を覚ますとまた続けた。女の頭の中に、もし男に頭があったなら中を満たしているだろうものが流れ込んだ。↓

　この頭を切り落とすしかないが、そんな事の出来る筈もない。（二〇〇七年七月十三日）

（庭のその独り…）

庭のその独り枝を真横に伸ばす木に咲いた花の、何を見ても良いのではない。その奥に花に付き随う音が幾つも聞き取れてしまうなら、それらは初めから物の姿の定まらない輪郭のようで音とは似ても似つかない。花に係わる問いが答えられないまま続くだけで、恐らく花は咲いてもいない。咲く花について知ろうとしたくても、そうさせてくれる花であった覚えはない。未だ何も問われていないからには問いに限りはなく、花に何が知れていて花は問うのか、と問うても、花を知れずに問うのでは問いになっていない。そのようにして花は長らく忘れられ、思い出されてもいないし誘われてもいない。では何なのか、と問われるのが、その花であるなどと少しも決まってはいない。しかしそうして問いが花に向けられなくても、問いの先が花でないとも限らない。その花こそ何なのか、という問いは拒まないまま、また花は花に係わる問いをその答えから守るためのように、どのような姿も見せず、見せない姿を隠しているとも悟らせない。そう悟らせないように花なのか。花を語る事もなかった。

*

*

*

付き随う音も物の姿を捨てて断ち消えるようで、それによって静けさとは似ても似つかない静けさが、定まらない輪郭のように残され、何処へ音は消えたのか。音も静けさもそれと似ても似つかないで何を聞き分けるのか。花の奥とはまた別様に音とは似ても似つかない音を、花の奥の静けさが消せずにいたしても、何処にも届きそうにないその音は、花のようには星明かりを立ち止まらせはしない。或いはそれが音の、問いを立てる流儀であるなら、そのようにして音は何かの妨げとなってはいる。その音で身を隠して、桃は眠るようにしていた。

庭を螺旋に巻く溝のように狭い道を一周半して未だ幼い鬼子が、目を閉じたまま星から滑り降りるように急いで泉まで駆けた。水面は細長い白い花びらで隅々まで溢れそうに覆われ、花びら同士の擦れ合うざわめきも聞ける。それを捻れた姿勢で覗き込まなければならず、背中から嘲笑う微かな声に似た衣擦れの、何時かの死に損ないめ、と耳に入った。長く掛かる事の途中なのにすっかり手ぶらだと気付くと、急な冷え込みの迫る頃だとも気付く。渇きを癒しに来た冷たい肌身の大柄の影らが、水の冷たさに挑み掛かるように獣じみた声を尖らせて群がるが、どいつも半透明のでっぷりした着ぐるみにでも潜り込んだように確とはその姿を示さない。彼らのせいで、水と隔てられたまま息苦しくなって、助けを求めるように庭を振り仰ぐしかない。

何が庭を傾かせているかは分かるようで分からない。庭まで這い登ろうとする草木の根の張り方に酷い偏りはあるらしい。庭の側を囲むのは産毛のような若草ばかりで、それを振り仰ぐままの幼い鬼子を押し退けて、確とは姿を示さない大柄の影らは、泉の水を詰めるための樽を転がそうとするが、独り離れて裸のつるりとした姿を晒して水に腰まで浸かる一際大柄の影の指図に耳を貸さないでは、樽は彼らに扱える代物ではない。押し退けられた幼い鬼子は、踏み堪えようにも足場さえ覚束ず、どちらを向いても後がなく、泉の匂いに溶けて消えたくなって、予め見付けておいた穴に己を突き落とすかのように忽ちその願う通りを叶えた。その幼い鬼子の溶け込んだ泉の匂いは、樽詰めの指図を黙らせた。樽を囲む冷たい肌身の大柄の影らは泥のように振り払われ、樽は底を地面に打ち付けた。空っぽを誇る乾いた音が樽を震わせ、そのか細く伸びる突き刺すような音は地面の硬さを際立たせた。驚いた泉の匂いは、常とは違う弓形に吹いて来て過ぎ行く刹那ぬらりと消える風に気付き、それに気触れるのを恐れ、また自らの感じ易さにも戸惑いながら水から足を抜いた。

「何が弓形の風を消すか知らないか」と泉の匂いが尋ねると、樽を諦めた大柄の影らは暫く根も葉もない冷え込みの訳を言い募り、消えるようでありながらそこに淀むままの風を土に埋める合図を待つと称して、石を並べたように一斉に硬い地面に座り込んだ。その冷たい肌身の温もりにさえ硬い地面が僅かに

弛むと、風は消えずに曲がって、泉の匂いに庭への斜面を眺めるよう促した。草木の捩れ果てた根が透けて見え、それを辿れば泉の匂いは庭の方へ這い登って行けた。

　星明かりは、今折ったばかりの筆の艶めく曲線を晒す影の形に見入っていた。泉の匂いが来てその影に染み入ると、影に潜んでいた菜の花の匂いは逃げ、その東の空へ消え失せるのが替えの利かない無くし物にも見える。泉の匂いに「何があなたを運ぶのか」と折られた筆が尋ねる。筆はもう己の影を泉の匂いに奪われ、その影の青く冷たくなるに連れ凍えるしかない。答えようとしたが答えはなく「折られてあなたは秤のようだ。私には量りたいものが色々あって辛い」と慰めのような事を言うしかない。その彎曲した影の方が筆よりずっと秤に似て、それはもう氷のように冷えて筆から切り離されるのを心待ちにする。泉の匂いであればそれを秤に用いられそうだ。影の裏に僅かに残っていた菜の花の匂いが別の形を甦らせようと抗うまま、泉の匂いは秤に似た影を懐に収めた。

　折られた筆は己に新しい影を差す新しい光りを泉の匂いに求めるしかないが、泉の匂いが何もしなくても、光りは折られた筆だけを真横から照らし、出来た影は蛇のようにクネクネと庭と逆の方に長く延び、その延びる勢いに当の筆までが影と共に運び去られた。光りだけが淡く浮かんで残り、風も匂いも受け付けないその姿を泉の匂いは妬んで「光りだけで影も作れず何をしているのか、

何をする事さえないのかな」と呟く。その妬みを素材に凹凸のある硬い覆いを光りは自らの上に載せ、その凹凸で定規で引いたような短い影を作った。泉の匂いはその覆いからも影からも弾かれた。凹凸は更に深く切れ込んで、長さと太さの少しずつ違う五本の筋が、そこから生えたように浮き立った。図らずもそうしたのは泉の匂いで、そう気付いた泉の匂いは、それを左右に振ったり幾らかは曲げたりもした。取り外せはしなかったが、ぎこちなくでも互いを擦り合わせると少し濃い色の光りがぽつぽつと溢れる。直ぐに消えたがそれを泉の匂いは、己の隠れた力と係わるものだと誇りたかった。或いはただそれを眺めていれば、時に流されてさえ己だけは変わらず、降り掛かる他の移ろいを痛みもなく遣り過ごせるか。しかしそうなら寧ろ、己の係われない力の及ぶようではないか。確かめるにはそれを同じように見て取れる別の眼が補われるべきで、泉の匂いの届かない所にそんな眼もあるかと高い方を仰いだ。何処にも空はなく泉の匂いの限り限り届く端を示す透けた壁だけが、見えない星明かりに圧し遣られるように撓って緩く弧を描く。緩い弧は自ずと捻れ、透けた壁は向きの違う二枚の翼に成りたがっているなら、それを丸ごと眼に仕立てても障りはない。

　翼は片面は泉の匂いが染み、もう片面に泉の匂いはせず、匂いを巡る互いの牽制が二枚の翼を絶えず動かす。そのようにして眼であるそれは、光りではな

く力を見なければならないが、寧ろ力に見られてそのような形をしていて、二枚の翼は匂いのある面の向きの揃うのを嫌い、何処からも泉の匂いのある面とない面が見えるよう、向きと形と捻れ具合を整える。それを見上げる泉の匂いには、その動きの危うさに巻き込まれそうで楽しくはない一方、それで泉の匂いの限り限り届く端が巧くぼかされるのは快い。

　翼の眼は、何の影も泉の匂いに示せていない。未だ見られるためだけの眼なら仕方ない。そう知れた泉の匂いは翼の眼だけを見なければならないのでもなく、翼の眼の方から見えそうな見当で、五本の筋から零れる濃い色の光りを眺めた。そうして見る光りは、傍からのようには直ぐには消えないで糸状に延び、忙しく這って泉の匂いの底の辺りに順々に溜まっている。しかし泉の匂いの何処が底なのか。泉の匂いに見える筈もないなら翼の眼がそれを見下ろすのだ。改めて翼の眼を見上げると、そこに見えるのは、泉の匂いを逃れようとするために、泉の匂いの視線を鏡に映すように真似るかの、捻れる兆しもない端をぼかした緩い弧だけだった。

　それでも翼の眼は見られるためだけの眼として未だそこにあった。泉の匂いにではなく、泉の匂いの底に溜まる光りによって、それは見られていた。泉の匂いにその光りが見えるのは、光り自らがその姿を泉の匂いに晒すからで、その光りは、その光りに見られてだけの翼の眼であるのを、翼の眼に向けて見せ

てもいた。それだけは翼の眼に見える。そのせいで、その翼の眼を囲む何れは翼の眼によって見られる筈の未だ空っぽの拡がりが、のっぺりと微かに唸るようで、翼の眼の幼さを静かに責めた。翼の眼も至らなさを隠したかった。微かな唸りが未だどうにでもなりそうなら逆に望みで、それがもし、はっきりした響きになって巧く空っぽの拡がりを行き渡るなりすれば、それに身は紛れる。そう見通せば、翼の眼にそれは、その通り叶った。身を紛らせたにしても、溜まった光りに見られてだけ眼であるのに変わりないが、責めを一時ながら免れられた。

空に代わって架かる端をぼかした緩い弧は、泉の匂いの底に溜まる光りと何も違わない。どちらも翼の眼を見ているというだけではない。火に包まれた熱い壺の中から、どちらも翼の眼によって助け出されていた。壺を覗き込んで、熱の中で動きの取れない小さな陽炎のような揺らめきの助けを求める声を聞いた時には、眼は見えていたし翼の形でもなかった。熱せられ焼け焦げる寸前のその形の定まらないものを掬い上げるのに、咄嗟に翼の形が求められたか。それともそれを掬い上げてから、それが弧と光りとの異なる姿に引き裂かれ、思い掛けずその二つの遠ざかるせいで翼の形を強いられたか。何れにしろ翼の眼は、そうして翼へと姿を変えて行った様を時を遡って瞼に浮かべ、それによって一通りのものを見て取れるようになったと信じようともした。

匂いも色のように光りを受けて褪せる。泉の匂いの底に溜まった光りは、少しずつ泉の匂いを蝕んだ。秤に似た影が、泉の匂いの懐から骨のように浮かび、ゆっくりと光りの方に向きを変えた。それでも揺らぐ気配のない光りに切り込むように、秤に似た影はその直ぐ傍まで降りた。光りの急所を探り当て光りに一気に栓をしなければならない。いや、それは泉の匂いの望みであり、影はその秤に似た姿を活かすべく光りと泉の匂いとを秤に掛けられる位置を得たい。
「何故俯いてばかりなのか」と泉の匂いは質した。秤に似た影は狼狽えるだけで、代わりに光りが、「周りを見ないで居られるとはな、お前こそ穴の一つでも抜いておけ、己を嵌めるものでもなければ萎んで消えるぞ」と言い返した。
周りは暗がりばかりで、ここの光りに栓がされたら匂いでさえ闇に溶ける。泉の匂いは己の衰えが身に染み、柔らかい身の熟しが利かなくなって、秤に似た影に身を委ねるしかない。衰えを跳ね返すに身を二つに裂いて少しでも小回りが利くようにすべきか。そしてその分かれた身を秤に掛けるよう仕向ければ、秤に似た影が光りを量るのも防げる。それで身を裂いたが、片方だけが若返り、もう片方は塩漬けにでもされたようで、秤に似た影はその塩漬けの方ばかりを喜び、それと光りを秤に掛けようと動き出す。若返った方からすれば、それは匂いの塩漬けでさえなく、どう見ても秤に付属した錘であって、身を裂いたのを悔やんだ。秤に似た影からすれば、泉の匂いから半分抜け出せて、使える錘

まで手に入った訳で良い事尽くめのようだが、泉の匂いが半分欠けた分、光りを量れそうな見通しも半減したと思い知るしかない。光りは半分の中に窮屈に押し込められただけで少しも失われていなかった。

光りがそう縮んだなら、空に代わって架かる緩い弧も光りと何も違わない証に、変わらなければならない。若返った方の泉の匂いがその届く端の辺りを見上げると、ただ標的のような黒い小さな丸があるだけで、泉の匂いの視線は呆気なくそれに囚われ、その中にも自らを映す鏡を探した。見付かりそうにないと分かると直ぐに、自らの映された姿を白く細い線の塊に描き出し、それを輝く透明な線で縁取って閉ざし、そこを自らを映す鏡である事にした。偽の鏡だ、と声だけはする。泉の匂いは勇んでその声の鏡に映る自らの姿を探ったが、その探る視線が何もない中に為す術なく溶けて行く己の様を見せられるだけだ。そいやその溶ける様こそ、声の鏡に映された泉の匂いの姿を真似るかして、匂いの限り限り届く端を示している。声だけの鏡が何も言い返して来ないのだから、そうであるに違いない。その確かなのは、何も言わない声だけの鏡が、泉の匂いの底の光りの形だけは映すのでも知れた。

その見下ろされる光りは扁平な円形で、角度を変える度に金色のゆったり波打つ帯を揺らめかせながら輝き出さずにはいない。そしてもうそれは泉の匂いの底から自らの四本の足で抜け出ていて、輝く高い甲羅を背負う亀の姿だった。

そんなものは偽の姿だ、と鏡の声がして、声だけの鏡は、その声のせいで泉の匂いの届く端から何処へか見失われた。端をぼかした緩い弧が、一度も姿を眩ましていなかったように甦ったが、それは何にも触れられないかのように何処へも傾かず、泉の匂いの届かない所に浮かんで、泉の匂いに、その底に溜まる光りとは異なる光りが弧を照らしているのに気付かせ、泉の匂いを身構えさせた。いや、泉の匂いに直に注がれるその光りだけであって、少しも異なる光りなどでない筈だが、それでも身構えずにいられないのは、その光りが遠く隔たる緩い弧の方ばかりを向いて決して泉の匂いの方を向かないと分かるからだ。

亀は金色を輝き出しながら振り返って、尻尾の先まで泉の匂いと切れたのを確かめた。泉の匂いもそう認め、自らの中から光りが去ったのをどう受け止めるべきか戸惑ったが、秤に似た影が甲羅に乗っているのを見付けると、己の身がどうなろうとそれを受け入れれば済む気がした。

それから泉の匂いは、彼方からの塵芥まで運び来て泉の匂いを消し飛ばそうと遠い道程を貫いて来る風をも、避けていられる積もりになれた。その傲りにも似た匂いには似つかわしくない揺るぎなさを嗅ぎ付けて、長い脚の背の高い体に似た産毛しか生やさない痩せた猿らが集って来て、その泉の匂いの標になる柱を立てる相談を始めても、相応しい石など直ぐに見付かる筈がない。その内の

蛙の皮を全身に被って陰部だけを晒す猿が一匹だけで金色の亀の後を追い、追い付いて亀を跨いで股が裂け直に骨だけになった。亀にだけ或いはその屍が骨と見えるか知れないが、亀は散らばったそれらを集めて埋めた。そこへ全身裸で陰部だけを蛙の頭で覆った猿が追って来てそこを掘ると、掘れば掘っただけ薄紫色に汚れた尖った骨は幾らでも出て、切りがないので埋め戻したが、泉の匂いを確とそこに据えないでは、薄紫色の臭い匂いにずっと付き纏われそうで、そこを離れられない。亀がその周りの同じ道筋を回り続けるので、その輝き出す金色の帯が地面に染まって、そこは直に金色が波打つ環に囲まれた。

　泉の匂いにはその環が、泉の水の根を映す波紋の輝きにも見え、懐かしさに知らず引き寄せられはしたが、近付けても環の中には入れない。見事な石を担いで後を追って来た全身丸裸の陰部のない猿らも、泉の匂いに渋々随って環の外を巡るしかない。環の中で動けなくなって陰部だけ蛙の頭で覆う金色の輝きに照らされ過ぎた猿は、もうただの影に等しい。それでもその影は何度も深い息を吐いて望みを繋ぐ姿を示した。それを見て泉の匂いは、環に入って何をしたいのでもないと思い直し、その環と亀の歩みを一目で見られる辺りまで後退った。石を担ぐ猿らは突っ支い棒を外されたかのように、亀を跨いで石ごと環の中に転げ込んだ。彼らも股が裂け、骨になったかどうかは知らない。

　石の柱が、真っ直ぐ天に向かって環の中心に聳り立つ。泉の匂いは金色の環

より一回り大きな環になって素速くそれを囲んだばかりか、自らの中に残された僅かな光りを全て滲み出して、囲んだ中を外から隠そうとさえした。そんな残っているか知れない光りに頼るのも詮ないが、それでまた周りが一切闇なのが見えてしまって、そちらへ追われる怖さから逃れるために、直ぐにも眠り込みたかった。そう願えば叶う筈なのにそれを妨げるのは、側で泉の匂いを睨んでいる、闇に紛れ切れずにぼんやり白い視線に違いなく、

「忘れられる事など何もないと分かっているだろうに何も忘れられずに眠る積もりか。それとも忘れられない筈なのに忘れていた事でも思い浮かべて、それを寝床に一眠りとは。でも何処へ向かってかな」とそれは泉の匂いに迫った。泉の匂いは「何も忘れてなどいない。何も忘れていないのを忘れるのは忘れたが。その忘れていたせいで何も忘れられない。…のではあるが、それを忘れていたのは確かだ。尤もそれも今思い出す訳だが、それに寄り添えば眠られそうかも」と答えた。「そんな屁理屈で鎌掛けてる積もりとはな。何で猿の骨が埋まってるんだ。亀が眠りをとことん嫌うように端を発するにしろだ、それだけじゃ何も起こるまい。」「つまり骨になりたがる猿の自業自得だな。いや全然そうじゃない」と泉の匂いは少し強く言って、それで打ち切りたかった。ぼんやり白い視線はそれを察し、泉の匂いの気を引くように己の姿を少しだけはっきりさせた。それは白い血管の浮くようで、

「あぁさっき見て来たあれか。見過ごして済む気もしたが。鏡に拒まれて行き場もないとはね」と泉の匂いはあしらった。浮いた視線は「そんな筈ない。鏡の幻に欺かれるのはよくある」と答えて黙った。それはもう視線ではなくクネクネした白い血管そのもので、それをそう見る泉の匂いの視線ばかりが、そこから鋭く跳ね返って来る。その己の視線が眠りを妨げるようでは事はより深刻で、泉の匂いは眠るのを諦めて己の視線を石の柱へ強く向け、石に繋がれるよう願った。それを白い血管が蛇のように這って来て遮った。足の生えていない血管であれば猿のように亀を跨いで骨にされたりしない。金色の環に入り込んだその血管の端が石の柱に触れた。

　白い血管に比べると石の柱は少し透き通っていて、金色の波を受けて青ざめている。その中を、更に透き通ったバラバラにされた数え切れない猿の骨が、回りながら浮き沈みを繰り返す。溶けて行くらしく骨っぽいものは稀で、泳ぐに夢中な魚のような輪郭ばかり目に付く。白い血管は、またぼんやり白い視線に戻って、骨の浮き沈みに溶け入ろうと身を捩ったが、却って己が姿の醜くゴツゴツした様を晒す。それがまた泉の匂いの視線には酷く邪魔で、もう前が見えず、金色を輝き出す亀の甲羅に乗った秤に似た影を探すのがやっとで、それも偶に輪郭をなぞれても直ぐにぼやけた。

　それは、翼の眼が甲羅の少し上まで降りて来ているからでもあって、ぼやけ

る輪郭の地と図を逆に見てその作り出す余白を辿れば、泉の匂いを巡って牽制し合う二枚の翼の動きの一端が浮き上がる。泉の匂いがそっと身を引く振りをすると、翼は俄に温和しくなって一枚の布のように秤に似た影に覆い被さり翼の形は失せた。その布の形が眼であるかは知れないが、時を掛けて秤に似た影を亡き者にしようと企んでいるのは、布の形から浮き上がる秤の輪郭が翼に似て行くので知れる。布の形が、端から端まで波打って裂ける間もなく金色の無数の点に弾け飛んだ。布の形は直ぐまたそこに覆い被さった。弾け飛んだのは、布の形の下の亀から輝き出す金色の波の、押さえ込まれて溜まっていたもので、ぼんやり白い視線も弾け飛んだか消えていて、柱の中の骨の殆どが、透き通ったまま片側を金色に染めている。泉の匂いも消えてしまったか。己の匂いを知らないまま。

　失せた筈の翼の形が金色の環を見下ろしている。その翼の眼に泉の匂いはなく、替わって桃の葉の糸で織った布地の古びた匂いがその裏にも表にも染みている。秤の形に少しだけ翼の飾りをあしらって布目を残すきり、秤に似た影に被さる布の形は影に溶け入った。それで布の形は、影で織られた布になれた。しかし金の亀には目障りで耐え難く、甲羅を揺すってそれを振り落とした。直ぐその後を狙って、消えた筈のぼんやり白い視線が甲羅に乗り上げると、狭い中で苛立ち身を強ばらせる蛇のような白い血管の姿で、早速そこを這い回る。

振り落とされた秤に似た影の布には金色が血糊のように着いた。それを翼の眼が降りて来て拭うと、影はすっかり透けて秤の形を示さず、ただ翼の飾りに沿う布目だけが現われたり消えたりするだけになった。

　金色の環の下に狭い隙間が覗くのだから亀は僅かに地面から浮いて這っている。亀が尻を向けるのを待って、透けた影はその隙間に身を滑らせた。奥は半球型に地面が刳り抜かれ、底に溜まる腐った水に、石の柱の中と同じ魚の輪郭の小骨が幾つか沈み、汚れて死んだように動きがない。亀に倣い、透けた影はその丸い水溜まりを巡った。何周かして馴染んだところで、影にまた色が戻り秤に似た形は取り返せたが、虹が独楽になって回るかにその色は鮮やかでも定まらない。その虹色を閉じ込めようと金色の環は少し沈んで地面との隙間を埋めてしまった。閉じ込められた秤に似た影は、窮状を耐えるに腐った水を嗅ぐしかない。呼ばれたように小骨の一片が水に浮かび、影の虹色を受けてゆっくり回った。どの角度からも魚の輪郭を見せないのは何故か。秤に似た影はそれを量ろうと腐った水に入った。水は虹色に煽られて波打ちながらも虹色に吸われて行く。己に着いた色は腐った水を蓄える袋だと分かった時には、秤に似た影はそのたっぷり水を吸った重く脹れた袋に押さえ付けられていた。量ろうとされた一片の小骨が虹色を浴びるまま跳ねた。釣られて仰ぎ見る地面の裏側に、その上に据えられた透き通る石の柱の底がめり込んでいる。隙間を埋められて

闇に閉ざされないのは、その石からの光りが柔らかく降るせいだ。そう気付いた秤に似た影は、己が身を翼のように軽々と投げ上げた。そうして石の内に溶け入ると元の影の色になった。虹色を浴びていた一片の小骨だけはその影の色を追える。

　泳ぐ猿の骨は見当たらない。遮るものもなく石の内から外を眺め回せる。その景色へと巡り来て巡り去る一切の物の形は挑み掛かるようで、秤に似た影は一々それらに身構えた。しかし物という物の形はそのように、量られようと身を投げて来ているのだ。一片の小骨を尺度に用い、針のような尖端を石から外へと突き刺している。秤に似た影はそれらを量り続けて飽きないのは、尽きない新奇な事象を一々見定めながら世界を巡るにも似る。

　そこへ片側を金色の波に染める笑い声が降り掛かる。石の柱の天辺に身を寄せる猿の骨共で「亀の甲羅の輝き出す金色に照らされた闇自らを欺く闇の贋の姿が石の表面に映るだけなのに。そんなものを量っても量った端から闇に消えまるだけとも知らないで。」そう笑われて秤に似た影は、一片の小骨を尺度のまま残し何処へか消える。小骨の色は、ぼんやり滲み出る虹色の欠片が入り交じっては砕け散るばかりだし、形は、その何処を何処から見ても何ものにも似ていない。しかしそのような色形は、石に溶けて埋もれるのを予め見込んでか。闖入者が消えてまた石の中を好きに泳ぎ回る猿の小骨共には、その毛色の違う

一片は気付かれてもいない。石の中が片側を金色の波で染める魚の輪郭で満ちては、それに埋もれて尺度は取り出しようもない。
　相変わらず石の柱を巡っている金色の亀にもその尺度の見える訳ではないが、見えない何かが中に紛れ込んでいるのは、砂粒の紛れ込んだ目の痛みそっくりに感じずには済まない。その埋もれた色と形を、石から染み出る匂いとして亀は嗅いだ。目の奥にだけ映るその匂いの色と形が尺度なのだが亀は尺度など知らない。
　亀の目の奥の裏まで覗き込み、その尺度を浮き立たせるのが泉の匂いだった。瑕も衰えも寄せ付けない、泉から匂い立つままの混じり気のない泉の匂いだった。それでも未だ泉の匂いは己の匂いを知らないしその知らないのも知らないが、亀の目の奥に隠された未だ知れない色と形は見えて尽きない。それを尺度と知り得てもただ独り知るままでは用いられようもなく知れないのと変わりない。
　泉の匂いが、泉の匂いのせいで古びて何処へか消えた音を聞き取ろうと息を殺せば、亀は自ずと逸れて環を一周して戻るまでの、尺度の匂いの色と形に就いてただ思い巡らすだけの時を泉の匂いは稼いだ。そして戻ったのは亀ではなかった。金色を輝き出す中に見えるのは、蜷局を巻く白い血管と白く濁った亀の目玉で、聞き取ろうとされた音が何処へか消えたきり諦められると、それに

代わるべきであるかのように白い血管を内から食い破って痩せて骨まで透ける蛇が現われ、直ぐに亀の目玉を呑んで、その目の跡に立ち昇る尺度の匂いに巻き付き、鎧のようにそれを守った。尺度の匂いは、透ける蛇の背骨を数える仕草を繰り返す。蛇は擽ったがるようにそれを嫌って自ら身を裂いた。尺度の匂いは針金のように細い剥き出しの背骨を数える振りを尚も続ける。蛇は身も皮も棄てて骨だけを己の姿と見た。すると骨はまた新しい身と皮を纏うようだが、それは尺度の匂いが蛇の身と皮に己を擬している。

　そうして蛇の身の熟しを得た尺度の匂いは、その身で泉の匂いを打ち貫こうと狙い定める体勢を取った。泉の匂いの殺す息は静かに洩れて、粗く掃かれた濡れた砂地を低く這い、庭を逸れた密な小さな藪の先の何処へか、その求める音の消えた痕を探り見ようと先走った。僅かなざわめきを含んで藪の先の拡がりを押し返す青く塗り込められた空が、泉の匂いのそちらに向かうのを阻むので、泉の匂いは藪の底へ重く流れ込むしかない。藪の底は抜けていて黒光りする水が蠢いて辛うじて藪を支え、藪の先の揺らぎも鎮めている。そこは緑色の小鳥のための水飲み場でもあって、尺度の匂いは小鳥までも襲おうと泉の匂いを追ってゆっくりと降りて来た。しかし藪の底に泉の匂いはない。泉の匂いは、藪の密な中に身を細かく切り分けて潜んだ。藪はその密であるせいで音を拒んだので、息を殺さなくても泉の匂いは求める音を聞き取ろうと出来る。そしてて

音の拒まれて却って、藪の先の細か過ぎて聞き逃されるしかない音が様々に色と形となって、切り分けられた泉の匂いに纏わっては滑り去る。尺度の匂いは、黒光りする水の面に張り渡り、その色と形を一々告げ知らされるのを身を低くしたままどうにも出来ない。それで再び身と皮を剥がれた蛇の骨は、黒い水面の裏側を重そうにくねくねと泳いで、遅れて来る筈の仲間を待とうとやや投げ遣りに決めている。

　水の黒い面に白い線で描かれる細かな三角形の影が数知れず犇き出す。それを尺度の匂いは、己が水に拒まれるのだと考えた。告げ知らされる音の色形も、白い三角形の影が蠅のように集って掻き消した。蛇の骨を水の中に逃がしてしまったのを悔いても蛇の身の熟しを真似ようとも出来ず、尺度の匂いは、水の縁に沿う環になって震えた。尺度の匂いの退いた蠢く水の真ん中は、白い三角形が消えて黒光りもせず色もなく濁りだけが蠢き、そこを覗き込まずにおれない泉の匂いは、藪から滲み出る露のような一纏まりの姿を水の真上に晒された。尺度の匂いはそれを先を越されたと感じ、水の縁から身を起こそうとするが、黒光りの中に溺れそうになるばかりで、いっそ溺れたなら蠢く水の真ん中にも触れられようが、環に押し込められて互いの角を食い合うかの白い三角形の影の犇きに突き上げられ、それも叶わない。

　泉の匂いは水の底を泳ぎ回る蛇の骨の薄ぼんやりした影を見付けていた。そ

れを鏡に映したかの蛇さながらに泉の匂いは藪の中を這い回り、藪は滑るように棘棘した切れ切れの音を嫌々鳴らした。その音に触れる度、水は少しずつ澄んで蛇の骨の姿を顕わにし、水の蠢くのはその音を映すせいかとも見紛われた。その変化を尺度の匂いは知れなかったが、藪の鳴らす音は細かな刃で刺され続けるような痛みとなって注がれ、尺度の匂いに水から身を起こすのを諦めさせ、更に藪の音は水の縁をぼやけさせた。尺度の匂いの環は、そのぼやけた方に段々と滲んで、水の縁を越え遂にはすっかり外へ出て水を縁取った。尺度の匂いの退いた水面は、環のまま黒光りして白い線の三角形の影は愈愈勢い付いて湧き立った。藪の先の細かな音が泉の匂いに纏わるのを経ずに藪を透けて、色とも形ともならないまま水に届いてしまうからだ。それは泉の匂いが密だった藪を歪ませたせいだ。そう尺度の匂いが気付くと、その水を縁取る環の一箇所が切れ、切り口の自ずと下を向く方が頭でもう片方が尻尾になって形だけは蛇に似た。

　その環の切れ目から水の外へ、犇めく白い線の三角形の影ばかりが黒光りを残して噴水のように躍り出る。藪の先から来た細かな音の姿を一つずつそれぞれに閉じ込めていて、その姿の重さに応じて行く向きが決まるが、その重さの僅かな差で向きは大きく違えられ、様々な重さの音を入れた三角形が錯綜する。それでも同じ重さを入れた影は必ず同じ向きに延びて尽きず、入り交じる白い

線の図柄は時を止めたように揺るがない。そこへ遅れて薮の先からの薄緑に滲む光りが差すと、虹に似た揺らめく色の並びの塊がそっと弾む泡のように立て続けに幾つも浮かんだ。環の切れ目はもう大分拡がり、環というより尺度の匂いは斜めに撥ねて感じ易い両端を持つ弧で、その上に浮かぶ色の並びの塊から見れば、機嫌を損ねている蛇の姿だった。水を離れて尺度の匂いは蛇の身の熟しも要らないが、薮の先からの薄緑の光りは蛇の姿を追い求めて来たらしく、虹に似た揺らめく色の並びの塊は、その蛇の姿の行く手を塞ぐ形に列を構え、尺度の匂いは進退窮まった。蛇の身の熟しを真似ても身を躱せそうになく、蛇に似ないようにも己を見せられもしないなら、脱皮さながら蛇の姿だけ残して消え去れないものか。

　薄緑に光りは僅かに茜が差して虹に似た揺らめく色の列は爛れたように崩れ、尺度の匂いに撓垂れ掛かるかで、立て直すには薮を透ける光りの茜だけを防がねばならない。急に茜に染まって行く泉の匂いがその役を果たすかと見えたが、すっかり茜一色の蛇さながら薮を這う姿は、逆にその己の色を染め付けて光りの茜の濃さを増し薄緑を除いた。そうまでになると虹に似た揺らめく色の塊が却って茜色を吸い取るようになって、爛れそうな色の列は寧ろ持ち直され、それで光りは徐々に色を薄めた。遂には泉の匂いの茜色まで吸い取られ、薮を透ける光りは、色を一切失う刹那の透き通った輝きに震えるや、墨汁を走らせた

ような黒い鮮やかな一筋が藪を貫く姿となって、水の底を泳ぐ蛇の骨や尺度の匂いや水の外の入り交じる白い線の図柄までを荒々しく照らした。

色の塊の列から虹に似た揺らめきだけが水の縁に滴り落ちた。裸にされた色の列は、黒い光りの筋を睨みながら亀の甲羅の形の一塊に溶けて混ざり合い、色尺度の匂いの蛇の姿の頭を銜えて一切の色を捨てた。そこを光りの抜け殻と見て取った尺度の匂いは、亀の餌食となって呑み込まれる蛇の振りをして、自らその厳しく色を拒む塊に入り込んだ。尺度の匂いはその中で、亀の甲羅の形をそのまま尺度の形として用いれば良く、弧だの蛇だのの形から解き放たれたばかりか、もう匂いである事もなかった。その尺度が藪の底の蠢く水の方を向くと、水は黒光りする環を薄い膜にして僅かに浮かせ、環が囲む水の真ん中だけを少し低く見せた。その真ん中で水は少しずつ澄んで、水の底を泳ぐ蛇の骨の姿を泉の匂いが覗き込んでいるのではなかったか。しかしそこは黒光りする水面よりもっと黒いどころか、黒さえ見て取れない程に底無しに暗い。しかし泉の匂いにはそれはまるで違って見えていないか、と亀の甲羅の尺度は考えて迂闊に水に近付くのは控えたが、水の暗さの中に、それと同じ底無しの暗い茜の差していると見てしまうのは、直ぐに水を量りに行けないのが苦しい余りか。或いは水の底に潜んだ茜が尺度を求める故なら、そこに身を投げないで尺度に居場所などない。そうして斜めに身を起こして構えた途端、水の外の入り交じ

来る白い線の図柄が、一斉に尺度に向けて、その中に閉ざされていた薮の先から来た細かな音を打ち掛けて来た。

音は亀の甲羅を砕いたが、それを上回る勢いで粉々の亀の甲羅が音を砕いた。音を辿って白い線の図柄まで襲い、入り交じる線のあちこちを熱に溶けたような形に歪めた。それが収まると亀の甲羅は跡形もなく、白い線の図柄はその姿をすっかり変えてはいたが、個別に閉ざさしていた音を一つに溶かして固く守っていた。尺度は捩じ曲げられ押し詰められた図柄の上に撒き散らされ白い線に染み通って行く。その上にまた色を拒む亀の甲羅が浮かび、水の縁の虹に似た揺らめきを輝かせた。尺度は身を潜めるしかないが白い線に受け入れられているのでもなかった。

水の奥の暗い茜は泉の匂いも窮している。水の底を泳ぐ蛇の姿なしに己の姿は捉えようもなく、蛇の姿を諦め薮に合わせて身を細かく切り分けようにも、茜が拒めば水は泉の匂いを呑み底無しの暗さに沈めるだろう。尺度の様を見てさえ亀の甲羅に逃げ込む誘惑にも駆られるが、己の姿を失ってそれに近寄るのも叶わない。薮を貫く黒い光りが水とその周りを荒々しく照らしても色もない泉の匂いは素通りされた。精も尽き水に落ちたかも知れない、そんな響きの音の方へ泉の匂いは漂い掛けた。それでしかし薮の先の細か過ぎて聞き逃されるしかなかった音が、一斉に湧き上がって泉の匂いを囲んで守った。

　水に沈んではいないが弾かれて泉の匂いは光りのように飛び散っていた。光りの飛沫の一つ一つの形までを泉の匂いは自ら見て取って、その拡がり行くのを一つ一つ見届けられた。と思えた。がまた、泉の匂いは水とすれすれの所を止まれば落ちる所を何とか止まらずに滑って行くようでもある。見上げれば藪の底が見上げられるが、見下ろそうにも下はない。そこは或いは茜の領域で茜の力が泉の匂いを水に沈めず辛うじて浮き上がらせているのかも知れない。藪は広く大きく見上げられ泉の匂いは己の小ささを感じたが、却ってそれで藪は見窄らしい生気のない段々と勢いを失って縮んで枯れるもののように見えた。泉の匂いが蛇のように這い回った跡だけがヌルヌルと艶めかしく見え、そこを外れた藪は鳥も寄り付きそうにない腐って虫が湧きそうな色にくすんでいた。その中で藪を貫く黒い光りの当たっている所だけが僅かに露を垂らしていて、その露が水の起こす気流によって上に昇ると、泉の匂いはその力に引き寄せられて段々と一つに纏まって行きそうだ。しかしそこには泉の匂いを近寄せない別の匂いが立ち塞がる。土の中で急速に腐らされた匂いが僅かでも混ざり込んで泉の匂いには耐え難い。露に音が段々と溜まって、藪の先の疎らな藪の残骸で塞がれた地面をぼんやりと見せた。埋もれ掛けに蛇に食い残された兎の鼻の頭の腐った匂いが地を這う矢のように細い風となって泉の匂いに射掛けられた。泉の匂いは身を躱しながら蛇の姿を身に纏って藪の底の水すれすれを切り抜け

た。後を追ってくるのは尺度と水を含んだ虹に似た揺らめきで尺度が振り返ると水は亀の目に見えた。亀の目の中を息絶え絶えに泳ぎ回る蛇は拷問を受けているようで骨と皮になって行くようだった。透けた骨に黒い光りが透かし込むと骨の一片一片が翼の形で蛇は翼を重ねて蛇だった。泉の匂いはそれを己の尻尾のように振った。藪が騒いで元の密な音を通さない静かな藪になって藪の底に水は蛇が穴に返るようにゆっくりとそこから身を退かせた。水底に追い詰められた茜は沸騰するようでそれは己を益々暗くしその暗さの中に己を沈め茜が消えるとそこは鏡になって藪を透かしてその上に覆い被さる猿の通り道の枝分かれを繰り返す網の目のような枝を映した

（二〇〇七年九月四日）

庭のその独り

著者　u_

© 2007 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published